凡人に誇り高き烏が入りました

班斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
凡人に誇り高き烏が入りました

【Ｎコード】
Ｎ２９２６Ｗ

【作者名】
班斗

【あらすじ】
関ヶ原の戦いで雑賀孫市は命を落とした。
彼女の魂は時を経て、別世界に転生する。
この小説は魔法少女リリカルなのはと戦国ＢＡＳＡＲＡ３とのクロス小説です。

時折、オリ設定とオリキャラが出る場合があります。

それらが苦手な方はお引き取りください。

また、この作品は著者の処女作です。

文章的に拙いですので生暖かい目で見守ってくれたら幸いです。

第零話　序章一

時は慶長五年九月一五日。

陽(ひかり)と陰(やみ)が交わる地、関ヶ原において天下分け目の戦が行われようとしていた。

絆の力で天下を治めんとする東軍総大将「東照権現」徳川家康。

家康を豊臣秀吉の仇として討たんとする西軍総大将「君子殉凶」石田三成。

この両雄の激突は圧倒的な武力を誇る西軍の有利に進む。

そんな戦の最中、戦国最強の鉄砲傭兵集団雑賀衆が頭領「煙鳥翔華」雑賀孫市は東軍の本陣にいた。

「孫市、今の所我が軍は少々不利な状況だ。そこで内応策にでる」

「内応策……小早川を味方に引き入れるか？」

「無明秋夜」小早川秀秋は豊臣秀吉の義甥であるが些か、いや極めて気弱で優柔不断な性格であり、三成に脅迫されて嫌々従っていた。

家康はそんな秀秋の状況を読み、内応策に出たのである。

「ああ、金吾は三成に嫌々従っているようだ。すでにこちらの味方になるという書状は受け取っているがこの不利な状況では優柔不断な金吾の事だ確実に迷っているだろう。そこで……」

「我らが松尾山へと銃撃を行い、小早川の裏切りを促すか？」

「そうだ、金吾が味方になればこの不利な状況も覆せる……頼めるか孫市」

孫市は考える。

この策が成れば東軍の勝利は確実のものとなるだろう。

それはつまりこの戦の勝敗を我らに委ねるという事だ。

我らは我らを最も評価する者と契約する。

これは徳川からの最大の評価だと考えてもいいだろう。

「わかった。その任、快く受けよう」

孫市は振り向き様に叫ぶ。

「いくぞ！　我ら誇り高き雑賀衆！　我らの働きでこの戦に勝利をもたらす！！」

一方、その頃松尾山では……

「はあ……まだ戦終わらないのかなぁ……早く原山海雄（はらやまうみお）先生主催の戦国美食会の会合に行きたいなぁ」

戦国一の優柔不断と名高い小早川秀秋は未だ終わらない戦に憂鬱な気分だった。

そして目の前の焚き火には山の幸がふんだんに入った美味しそうな鍋がぐつぐつと煮立っている。

「やっぱり秋は鍋だよねぇ！　勿論、春も夏も冬もだけど……この鍋時間が僕の一番の幸せだよぉ！」

この男は皆が身命を賭して戦っている最中、一人呑気に鍋を食していた。

はふはふと熱々の鍋を汗を垂らしながらも平らげていく秀秋の顔は幸せの絶頂のようだ。

だがその幸せな鍋時間ももうすぐ終わりを告げようとしている。

孫市率いる銃撃隊が松尾山へと迫りつつあったのだ。

そして一発の銃声が鳴り響いた。

「ん？　……あっ、あちっあちぃーーー！！」

放たれた弾丸は見事に秀秋の鍋へと命中し熱々の中身が秀秋に降り注いだ。

突然の悲劇に混乱の極みに達する秀秋……哀れな……

「ななな、何事ーーー！！」

次々に放たれる銃撃に小早川軍は大混乱に陥った。

だが更にそれを助長しているのは他でもない大将の秀秋である。

「わわわ……徳川軍からの銃撃……敵は家康さん！　いや、味方になるって書状送ったし……なら敵は三成君！　……は怖いし……あぁ、天海様ーどうすれば？　……あれ？天海様？　……何処に行ったの天海様ぁ！？」

秀秋の傍らに立つ正体不明な謎の高僧「慈眼傍観」天海はこの場に

はいなかった。

彼の言葉を求める秀秋は周囲を見渡すがその不気味ともいえる雰囲気を纏う、かの僧の姿は何処にもない。

そして、とうとう慌てふためく秀秋の頬に一発の弾丸が掠めた。

つぅと頬を流れる血で冷静さを……

「みっ、三成軍だよ！　早く三成軍に攻撃して！！　うわっ……うわぁ助けてぇー！」

取り戻せなかった秀秋は散々に銃撃に晒され、遂に三成軍への攻撃を指示したのだった。

「天海様ぁ、たーすーけーてー！」

その頃、小早川軍の陣地から少し離れた山中で……

「ふっふっふ……すみませんねぇ金吾さん……私は少しやる事が出来たので退散する事にしました。まあ、誰にも言ってませんがねぇ……」

謎の怪僧天海がこう呟いていた。

「さあ……もうすぐですよ。もうすぐ貴方に会えます……信長公！！」

その後、天海の姿を見たものはいない……

孫市は必勝の策を成功させた。

松尾山への銃撃は小早川に裏切りを決意させ、その結果東軍が圧倒的有利となりもはや西軍の勝ちはなくなったと言えるだろう。

だがその事実は三成にとってどうでもよかった。

彼の目的は始めから家康の命。

戦の勝敗など関係ない、ただ家康を殺せれば三成にとっては勝利なのである。

西軍本陣へと乗り込んだ家康と孫市は石田三成と彼に付く参謀「寥星跋扈」大谷吉継と対峙していた。

「家康ぅ！　ようやくだ。ようやく貴様の首を秀吉様に捧げる時が

来た。秀吉様、許可を……この大罪人を斬首に処する許可を私に……」

「三成！　もうやめろ。もう勝負は着いた。この戦、ワシの勝ちだ……」

「黙れ！　戦の勝敗などどうでもいい……家康、貴様は黙って私に惨滅されろ！」

「三成……分かった。決着を着けよう。孫市、悪いが下がっててくれ」

「刑部、下がれ！　家康の処刑など私一人の手で事足りる」

両軍の総大将はその胸に宿る様々な思いを己が武器に乗せ、ついに決闘を開始した。

そこから少し離れた場所で二人の英雄が激しく火花を散らし激突する様子を背に孫市は口を開く。

「大谷、加勢しなくともいいのか……徳川を倒すことがお前達の目的だろう？」

「ひっひっひっ……主もなかなか非道い事を言う。ああなった三成に近づけば我も斬られよう……それにそれは三成の目的だ。我の望みはまた違うものよ……」

重い病に冒され、全身を包帯で包まれた異形の武将大谷吉継。
彼から立ち上る凶々しく暗い気配が気になり孫市は尋ねる。

「そうか、興味はないが一応聞いておこう。大谷、お前の望みとはなんだ？」

「我の望み……ひひっ、それはな全ての人間に等しく不幸を振りまく事よ……我は人が不幸に成り逝く様が見たい……」

「ほう、それはそれは……一つ聞く」

「何か？」

「全ての人間と言ったな……それは私もか？」

「然り」

「徳川もか？」

「然り」

「大谷、お前自身もか？」

「然り。我もだ」

「では最後に……石田もか？」

「……！？　三成……三成は……」

最後の問いに明らかな動揺を示す吉継の姿を見て孫市はよく見なければ分からないほどの笑みをこぼした。

「大谷……お前もなかなかのからすだな。自身の望みと思いの差に気付かないとは」

「望みと思いの差……だと？」

「そうだ。全ての人間に不幸を……これは紛れもないお前の本心だ。だがお前は無意識にも石田は……石田だけは大切な存在だと思っていた」

「……」

「徳川曰く、それは「絆」と言うそうだ」

絆。

それは家康が胸に掲げ、声にして叫び、それをもって天下を治めようとする程のもの。

人と人との繋がり、信頼関係を具現化した力をこの男はたった一人ではあるが持っているのだ。

「だがこれでお前を是が非でも押さえなくてはならなくなった」

孫市はそう言い放ち銃を構える。

「今はどうやら五分な状況だが、この先石田が不利になればお前は私を押し退けてでも、石田に斬られると分かっていても石田の加勢に向かうだろう」

「……だ……まれ……」

吉継の呪術によって操られる数珠が孫市の周囲を旋回し始める。

お互いに戦闘態勢に入ったようだ。

「評価には結果で返すのが我らだ。戦の行先を我らに委ねるという最大の評価を与えた者を討死させたとあっては我らの誇りに傷が付く。ふふっ、これも絆か……」

「黙れぇ！　これ以上我を惑わすな鴉がぁ！！」

吉継の叫びと共に数多の数珠が四方八方から孫市へと襲いかかった。

第零話　序章一（後書き）

なのは成分はまだです。

第零話　序章二

決着は着きつつあった。

家康への怒りと憎悪をたぎらせ果敢に攻め立てていた三成だったが絆を信じる心と極限の集中力によって覚醒した家康の敵ではなかった。

家康本人も自身の変化に愕然とした。

なぜなら相手の動きが極端に遅く見えるのだ。

それなのに自身の動きはいつもと変わらない。

いや、むしろ切れが増している。

それは数多の武士の中でも極一部の限られた者でしか到達できない武の頂。

無我の境地、後に戦刻ブーストと呼ばれるものだった。

人の体には普段は脳によって制限がかけられており三割程度の力しか発揮できないようになっている。

しかし無我の境地に入るとこの制限が外れ十全の力を発揮できるようになる。

その結果、時間の流れが遅く感じる程の思考加速とその中でも普段以上の動きが出来る程の身体能力を得るのである。

無論、危険も存在する。
人体に制限が存在するのはそれがないと危険だからである。
人の体は自身の全力に付き合えるほど頑丈ではない。
制限が外れた状態で長くいるとその強大な力に体が耐えきれず自滅してしまうだろう。
無我の境地は一時的に爆発的な力を得ると同時にそういった危険も背負ってしまう諸刃の剣なのだ。

「い……えやすぅ……家康ぅぅぅぅぅ！！」
「これで終わりだ！　三成ぃぃぃぃぃ！！」
刀を地に突き立て渾身の力で斬り上げる「斬滅」を放つ三成。
その一閃は真空波となり直線上のあらゆるものを斬断するほどの威力を持つ。
対して家康が放ったのは最大限までに溜められた「天道突き」。

これは気を拳へと収束させて放つ正拳突きである。

これに三成は勝ったと思った。

しかしその思惑は大きく外れることになる。

通常であれば気で強化された拳であろうと三成の「斬滅」によって拳ごと家康は一刀両断にされていただろう。

だが、家康は気をずっと溜めていた。

そう、無我の境地に入るずっと以前からである。

全身の気を余すことなく拳に込め放たれた「天道突き」は通常の十倍の威力を発揮する。

さしもの三成もこれには驚愕した。

家康を両断するはずの真空波はその拳によって霧散されたのだから。

三成は即座に思考を切り替える。

今の一撃を防がれたのは憤慨だが技後の硬直を狙い「刹那」に「斬首」すれば良い……と。

思考と同時に行動に移る三成だったがふと顔に差した影にその思いは粉々に砕かれた。

三成の憎悪と狂気と驚喜に彩られた瞳に飛び込んできたのは家康の左拳、「天道突き」の二段目だったのだ。

一瞬にして三発。

銃声が一つにしか聞こえない程の連射は吉継の数珠を瞬く間に破壊する。

「グッ……オノレェェェ！！」

吉継の呪詛に満ちた慟哭も柳のように流した孫市は弾の無くなった銃を捨て腿の吊革から新たな銃を抜く。

「どうした大谷、感情的になるとはお前らしくもない。そんなに矛盾を指摘されたのが業腹だったのか？」

普段の冷静沈着な吉継ならばその変幻自在な数珠捌きにさしもの孫市も苦戦を強いられただろう。

だが戦闘を始める前の問答が吉継から冷静さを失わせていたのだ。

結果、感情的になった吉継の数珠は緻密で複雑だった以前の動きはなく粗雑で単調なものとなっていた。

そのようなもの孫市にとっては止まっているも同然である。
一個、また一個と孫市の銃撃によって破壊され、数も残り少なくなっていた。

「不幸ヨサンザメク降リ注ゲ！！」

吉継は残り少ない呪力を尽くし数珠を巨大化させ一斉に孫市に襲いかからせる。
だが……

「舞え！　幾千幾万羽の八咫烏よ！！！」

孫市も奥義を繰り出しそれを迎え撃った。
遙か上空に放り投げられた幾つもの拳銃、散弾銃、機関銃。
それを次々に手に取り繰り出される銃撃は鉄風雷火の限りを尽くす嵐のような個人戦争。
数多の弾丸が暴風雨となり数珠を一つ残らず破壊し尽くす。
これで止めだとばかりに肩に担がれた鉄箱から飛び出した連筒火矢は上空で分散、地上へと降り注ぎ辺り一面を業火と閃熱と爆風に包

み込んだ。

「グゥッ！？　忌々シイ鴉ガ！！」

何とか爆心地から逃れた吉継は全てを呪い殺すかのような瞳を炎の中心に向けた。

「……！！？」

そこに見えたのは業々と燃え盛る炎の中に立ち、すでに狙い済ましたかのように銃を構える孫市と己の命を刈り取るであろう弾丸の姿だった。

「徳川、終わったか……」

三成の亡骸の側でふさぎ込んでいた家康が顔を上げると孫市がこちらに来ているのが分かった。

「孫市……ワシは……」

今にも泣きそうな家康の顔を見て孫市はふと笑みを浮かべる。

「徳川、このからすめ。本当に女々しい奴だなお前は。」

「……ああ、ほんとに女々しいなワシは。今になって様々な思いが胸を締め付ける。何故こんなことになったんだろうとな」

「石田を倒したことを後悔しているのか？」

「……分からない。ただ、三成とは他の道があった気がしてならないんだ。それを後悔と呼ぶのならワシは後悔しているのだろう」

孫市は目を細めじっと家康の顔を見つめた。

様々な感情が入り交じった顔は情けなくも思えるが……

「悪くはないな」

「……？」

「いや、なんでもない」

「そうか……悪いが孫市、三成と二人きりにしてくれないか」

「……分かった」

頭巾をかぶり三成の傍らに座り込む家康から離れた孫市は少し辺りを散策する事にした。

「戦国最強」本多忠勝や「奥州筆頭」伊達政宗といった戦友達や雑賀衆の部下達がこの決着の地に集いつつあり、その者達に労いの言葉を掛けて回るためである。

だが、その為にこの場を離れたことが後の悲劇を生む事をこの時の孫市は知る由もなかった。

恐らく、西軍総大将を下した事で東軍勝利は確定した……その事実が孫市から警戒心をほんの少し取り去ってしまったのだろう。

ふと吉継との激戦地に戻ってきた孫市は些細ながら違和感を覚えた。

それに気付けたのは運によるものだろう。

ただ、それが幸運か不運か孫市本人しか分からないのだが。

孫市が抱いた違和感の正体、それは……

「ッ……大谷はッ！？」

凄まじいまでの嫌な予感に孫市はその場から駆け出し、急ぎ家康の下へと戻る。

瞬間、視界の端で何かが閃いた。

「ぐっ、徳川っ！！」

「？！！」

ふさぎ込むのを止め立ち上がろうとしていた家康を押し退けた孫市はすぐさま閃きの下へと銃弾を撃ち込む。

そこにいたのは全身を血と煤で汚しながらもぎらついた眼でこちらを睨む大谷吉継の姿であった。

「惜しい、惜しかったなぁ。これで三成の仇も……三成……の望みであ……った太……閤の仇も取れ……たものを……ひっひっひっ……」

どさりと音を立て崩れ落ちる吉継を見て、自身の危機を知った家康は感謝の声を挙げようと孫市の方へと振り向き愕然とする。

家康の目に飛び込んできたのは胸から大量の血を流し崩れ落ちる孫市の姿だった。

「ま、孫市ぃーーっ！！」

致命傷だった。

誰がどう見ても致命傷であった。

吉継の放った最後の数珠は孫市の左胸に大きく穴を開けたのだ。

まるで間欠泉のように吹き出す鮮血をその虚ろな瞳で見て、孫市はか細く声を上げた。

「徳川……そんな顔をす……るな。このからすめ……お前は興した夢を……貫く事を決めたのだろう？」

孫市は急ぎながらも後悔にふさぎ込んでいた家康が決意と共に立ち上がるのを見ていた。

人と人との繋がり、絆の力でこの世に平和を作る。

その興した夢を貫こうとする、乱世によって平和というものが霞んでしまったこの世界に昇る気高き太陽の姿を。

「孫市……ああ、ワシはこの夢を最後まで貫く。だから孫市、お前もワシと共に……」

「契約か……ふふっ……分かった……」

孫市は震える手で銃を構え、それを天に向ける。

動作を一つ終えるごとに気が遠くなるがこれは最後までやり遂げなければならない。

家康は孫市を抱き込み、その震える手を支えた。

そして繰り返される三つの銃声。

「我ら……ほ……こり高き……雑賀しゅ……う。只今……より契約の……赤……い鐘を……執行する……」

この地に集いつつあった東軍、雑賀衆の面々はそれを固唾を飲んで見守っている。

「響け！　我ら……が炎の……音を……撃ち鳴らせ！！」

響きわたる赤い鐘の炎の音。ここに契約は成立した。

「我らは……八咫烏……太……陽の……使いだ。我ら……は……お前と……いう太……陽に……何処まで……もつい……ていこう」

「ああ、孫市見ていてくれ。このワシが作る平和な世を……ずっと傍で……ずっと……」

もはや流れる涙を隠しもしない家康に孫市は今までで一番の笑みを浮かべた。

「ふふっ……とく……が……わ……やはり……お前は……女……々しいな……」

握られていた銃が孫市の手より地に落ち鈍い音を響かせた。

「孫市……おい、孫市……孫市ぃーーーっ！！！」

八咫烏は天へと飛び立った。

残された太陽はその夢を最期の時まで貫き、以後永きに渡る平和の礎を築く。

だがこの物語はこれで終わりではない。

新たなる物語は時間も世界をも遠く離れた異世界にて幕を開ける。

八咫烏が再び舞い降りる地……その世界の名は……

第零話　序章二（後書き）

次話よりリリカルなのはに入ります。

第一話　太陽の烏（前書き）

ようやくなのは成分入りました

第一話　太陽の烏

使えない奴だ。

静寂を尊ぶべき場所で誰かがそう呟いた。

「航空隊の面汚しめ。犯罪者を捕らえたならまだしも……取り逃がした上にくたばるなど」

それが聞こえた瞬間、少女――ティアナ・ランスターは頭が沸騰した様な気がした。

ティアナは思う。

お前たちは兄の何を知ってその口を開いているのかと。

兄は、ティーダ・ランスターは違法魔導師の人質になった人達を救うために行動した。

命令無視と独断専行の末、結果は命を失う羽目になったが人質に全く被害はなかったのだ。

それは賞されてしかるべき兄の手柄のはずである。

結果と評価は等価であるべきだ。

兄の出した結果に対する評価がこれなのだとしたらあまりにも非道

い。

視線だけを動かし、さっきから兄の誹謗中傷を口にしている奴を探す。

守らなければならない。

思い知らせなければならない。

名誉を、尊厳を、そして誇りを。

何も言えなくなった兄の代わりに！！

「……見つけた」

飛び出そうとした瞬間、誰かに肩を強く掴まれた。

振り解こうと必死に藻掻くが、その腕はまるで万力のようで全くびくともしない。

恨み籠もった眼で振り向くと、そこには知った顔があった。

時空管理局地上本部レジアス・ゲイズ准将。

ティーダが航空隊に配属する前にお世話になっていた元上司に当たる人物だ。

ティアナは兄を通して何度か会ったことがあった。

「気持ちは分かるつもりだ……だが、今は耐えてくれ」

震える声でそう呟いた彼を見てティアナは抵抗を止めた。

「……私は……許すつもりはありません。兄の結果を否定する者も……それを許す管理局も」

「それで構わん。だが、自棄にはなるな。あいつが悲しむぞ」

「……分かりました」

ティアナはそう言って踵を返す。

聞くに耐えない兄への罵詈雑言がひしめくここにはもう一秒たりとも居たくはなかったからだ。

「ランスター、これからどうするつもりだ？」

「さあ……少なくとも管理局に入るという選択肢はないです。あなたに迷惑を掛けるつもりもありません」

レジアスは少し残念そうな表情をしたがすぐに元の威圧と威厳に満ちた仏頂面に戻った。

彼は唯一の身寄りを無くしたティアナを引き取るつもりだったのだ。
別に管理局員になる事を強制するわけではない。
他にしたい事があればとりあえず名前だけは貸そうと考えていた。
内心は局員になって欲しかったがティアナが望みを言えば彼はその援助を惜しまなかっただろう。
だが、ティアナはそれを拒否した。
最早、今のティアナには管理局に属する者は例え兄が懇意にした元上司といえど信用できなったのである。

「そうか……貴様の射撃は奴のそれと比べても謙遜ない程のものだったのだがな」

「……ありがとうございます。ですが……」

「わかっておる。だが、何かあったら儂を頼れ」

「……はい」

こうしてティアナはミッドチルダから姿を消した。

そんな懐かしい夢を見た。

本拠にしている廃ビルの私室のベッドから這い出したティアナはシャワーを浴びるために浴室に向かった。

リズム良く流れ出る湯を頭から浴び、ティアナはさっき見た夢を反芻する。

「我ながら本当に数奇な人生だな……」

そうティアナは口ずさみ、思わず溜め息がこぼれ出た。

理由ははっきりしている。

自身の境遇があまりにも荒唐無稽だからである。

『マスターにとってはある意味二回目の人生ですからね』

首に巻いてあるチョーカーからそんな声が聞こえてきた。

ティアナのデバイスの一つ「ゼフィロス」である。

彼は拳銃型のインテリジェントデバイスであり、亡き兄の唯一の形

見でもある。

現在はティアナをマスターとしており、彼女の良き相棒となっていた。

「そうだな。この記憶も幼い頃はあまり気にならなかったが、成長し、理解できるようになるとどうも引っ張られる」

どうにも老けた気分だ、まだ十五なのにと自嘲気味にティアナは笑った。

そう、ティアナ・ランスターには前世の記憶があった。

それは一瞬だけ浮かぶ蜃気楼のような曖昧なものではない。

前世の自分がどの様に生き、そして死んでいったのか……その全てを記憶していた。

「雑賀孫市……今から約四百年前、第９７管理外世界「地球」の極東の島国「日本」に生きた傭兵集団の長」

『雑賀衆……戦国最強の鉄砲傭兵集団ですか。マスターの射撃の腕も納得できますね』

ティアナは幼い頃より射撃が異様に上手かった。

それは速射と精密射撃に秀で、まるで風のように敵を次々に撃ち落す様から「風のランスター」とまで呼ばれた兄をも超えるほどである。

それもそのはず、ティアナには前世の記憶という反則があったからだ。

雑賀孫市として生きた前世の記憶は普通は得る事の出来ない程の膨大な経験をティアナに与えていたのである。

それは射撃術は勿論の事、徒手戦闘術・剣術・用兵術・サバイバル技術・爆発物や罠の知識等々多岐に渡っていた。

寧ろティアナがこれらの技術を兄に与えたからこそ彼はストライカーと呼ばれるまでに至ったのだ。

「打ち明けられた時の兄の顔は今でも笑えるな」

『それはそうでしょう。目に入れても痛くない大事な妹が突然前世の記憶があるなんて言い出したんですから』

自分には前世の記憶がある。

そう妹に告げられたティーダの驚愕ぶりと焦燥ぶりはかなり酷かった。

何せ本当に猫可愛がりしていた妹が突然前振りもなく変なこと言い出したのである。

どれくらい酷かったというと、夜中にも係わらず、

「俺の大事なティアナが変なこと言い出したーー！！！」

と、大騒ぎするティーダを近所迷惑だという判断の元にティアナが絞め落としたほどだ。

ちなみに、その後ティーダは朝になるまで目覚めることはなかったという。

そんな驚愕の事実を告げられた当初は、半信半疑どころか八割ほど信じていなかったティーダだったが、ティアナがその記憶にある知識及び技術を実際に披露したことで少しずつ信じるようになった。

それを完全に信じたのは自身が最も得意であった射撃で完膚無きまでに負けたときである。

「しかし、例え生まれ変わったとしても誇りは……というか生き様は変えられないものだな」

『前世も今も傭兵稼業ですからねぇ』

「一応、看板は何でも屋なんだが。まあ、戦に生き、戦に死ぬのが我らの……いや、私の生き様だ。今更変えたいなんて微塵も思わない」

『そうですか。ああ、そう言えばレジアス中将からまた依頼が来てますが……』

レジアスが今のティアナの仕事を知ったのは彼女が傭兵を名乗り始めてから二年程してからだった。

最初は止めさせるつもりだったのだがティアナが挙げた戦果や任務成功率を知り、試しに懸賞金が掛けられている違法魔導師の捕縛を依頼したところ驚くべき早さでこれを達成したきた。

以降、彼はティアナにとって一番のお得意様となり、時折こうして依頼をしてくるようになったのである。

「内容は……また懸賞金付きの違法魔導師捕縛依頼か。いい加減、私を頼らずにこれ位はやって欲しいものだが」

『マスターに頼んだほうが早くて安全で確実なんでしょう』

「……まあいい。了解したとメールを送っといてくれ」

『分かりました。では』

ティアナは湯を止め、タオルで体を拭きつつこう告げた。

「ああ、「太陽の烏（ソルレイブン）」……出るぞ」

第二話　再会

太陽の烏（ソル　レイブン）。

四年ほど前に突如としてミッドチルダに現れ、急激に名を揚げ始めたフリーの傭兵である。

二挺拳銃を駆使し、驚異的な精度を誇る精密射撃と魔力炎熱変換による圧倒的な火力で敵を殲滅する事で有名だ。

その存在はミッドチルダにおいても今や知らぬ者はいないとまで言われている程である。

その太陽の烏（ソル　レイブン）ことティアナは現在、情報を得るためにバイクで違法魔導師が潜伏していると思われる地の最寄の陸士部隊に向かっていた。

「魔導師ランク推定ＡＡＡの違法魔導師の捕縛か。中将殿もなかなかきつい仕事を回してくれる」

巧みな運転で公道を飛ばしつつもティアナはそう呟く。

『最高でランクＳの魔導師をものの数分で仕留めたマスターが何を言っているのやら』

それに答えたのは相棒のゼフィロスだ。
かつての戦果を例に出してその呟きに突っ込みを入れた。
「あれは罠で翻弄して余裕を無くした上に超長距離から狙撃しただけだ。直接やり合えばランクＡ程度でしかない私に勝ち目などあるまい」
それがどんなに大変な事か、かつてはティーダのデバイスであったゼフィロスは嫌な程知っている。
それにティアナならば例え直接対峙したとしても軽く殲滅できると思える程、ゼフィロスもこの理不尽な強さを誇る現マスターに毒されてきていた。
『あーはいはい、わかりましたよ……常日頃から戦の勝敗にランクは関係ないとか言ってるくせに』
「……何か言ったか？」
『いえ、別に。それよりもうすぐ目的地の陸士１０８部隊々舎に着きますが』
「まあ、いい。しかし１０８部隊か……私はあそこの狸親父がどうも好かない。声だけは少し惹かれるんだがな」
『確かゲンヤ・ナカジマ三佐でしたか……相当喰えない人物らしい

ですからね。しかし、何故声だけに……』

ゲンヤとティアナの出会いは三年前の第八臨海空港大火災の時まで遡る。

第八臨海空港――それは首都近郊にある比較的大きな空港だった。

しかし、その空港である日突如にして爆発が起き、炎に包まれるという未曾有の大災害が発生したのだ。

その原因は密輸された違法ロストロギアであるとされているが、恐らく出火元であったであろう貨物庫があまりの熱量によりほぼ消滅しており詳細は未だ不明のままである。

しかし何故、この大災害とも言える現場に傭兵であるティアナがいたのか？

実はそれにはこういった理由がある。

常日頃からの地上の人手不足の深刻さと年々悪化する治安の悪さを省みたレジアス中将は傭兵ギルドとの間に協定を結んだのだ。

それは活動を許可する代わりにこういった災害時には傭兵達を臨時戦力として起用するという約定だったのである。

この協定が結ばれた当初は揉めに揉めたが、地上本部が互いの落し所としてギルド特別法を制定し、連携強化のための交流会や合同演習などを進んで行ってきた結果、地上本部は僅かながらでも戦力不足を補うことに成功したのだ。

そしてティアナも傭兵としてはフリーという存在ではあるが、ギルドに所属せずとも身分の登録と届け出は義務である為、この日もレジアスがギルドを通じて出した緊急要請によって災害救助の救援に駆り出されていた。

その先でティアナが指揮下に入ったのが当時災害救助の現場指揮を執っていたゲンヤの下だったのだ。

ちなみにこの日、ティアナに助けられた同じ年頃の少女が長く続く腐れ縁の仲になることを彼女はまだ知らない。

無事に１０８部隊の隊舎に着いたティアナは簡単に受付を済ませ舎内を歩いていた。

しかも案内付きのＶＩＰ待遇である。

「しかし、しばらく見ない間に随分と雰囲気変わりましたね、ティアナさん。」

そう言って案内役を仰せつかったギンガ・ナカジマは隣を歩くティアナの顔を見た。

名前から分かるとおり彼女はこの１０８部隊の部隊長ゲンヤ・ナカジマの娘である。

ティアナとの出会いも先の空港火災の時だ。

妹を捜していたギンガは休暇でたまたま現場にいたとある執務官によって先に救出されていたのだが、その執務官は空港内の安全地と思われる場所にギンガを降ろすと他の要救助者を探しに出てしまった。

そうして一人になってしまったギンガだったが、降ろされた場所が安全とは言い切れなくなってしまい、動こうとした所をティアナが見つけ、無事にゲンヤの所に送り届けられたのだった。

ギンガが探していた妹もすでにティアナによって救出されていたため二人は早々に再会できたのである。

ちなみにその執務官がギンガを回収しようと元の場所に戻ると安全確認した場所が天井の崩落で潰されており相当慌てていたそうな。

「そうか？　恐らく、最近は引っ張られる感覚が強いからだな」

「引っ張られるって何がですか？」

「まあ、主に皺とかだな」

さすがに前世の記憶にとは言えないティアナは苦しく誤魔化した。

「皺……って、ティアナさん私より若いじゃないですか！」

「若いって、一つぐらいしか変わらないだろう。そんなことよりも私は早く情報を貰って仕事に入りたいんだが」

ギンガからの追求を強引に断ち切り、ティアナは仕事の話をし始めた。

こうなったらギンガも仕事の話をせざるを得ないのである。

「あ、はい。資料はすでに用意してますが……その……先にもう一人来てまして」

ギンガの歯切れの悪さに疑問を抱いたティアナはその事を問いかける。

「もう一人？　この仕事は私がレジアス中将から直々に受けた依頼のはずだが」

「はい。我々もそう聞いていたからこそ情報を提供するのです。基本的にはライバルですからね……管理局と傭兵は」

いくら協定を結び、災害時には連携するとは言え普段の仕事ではかち合うことの多い局員と傭兵は基本的にはライバルな関係である。

だから普段の仕事では傭兵が陸士部隊から情報を受け取るなんていう事は滅多に無いのだがレジアスと個人的に親交のあるティアナはそれを可能にしていた。

「そうだな。まあ、個人間の親交には関係あるまい。それで誰だ？私の仕事を奪おうとするのは……」

ティアナの静かな怒りに息を飲むギンガ。

それもそのはず、ティアナはプロの傭兵である。

受けた依頼を横から奪われたとあっては信用に関わる問題だ。

今にも爆発しそうな、まるで火薬の如き怒気で辺りが剣呑な空気に包まれ始めた。

そんな中でギンガは恐る恐る答えを告げる。

「ほ、本局の……執務官の方です。休暇でミッドに来て……この件の違法魔導師のことを知ったそうで。俺が捕まえるから情報を寄越せと」

「ちっ、執務官か……厄介だな」

実は傭兵という存在は本局の魔導師に非常に受けが悪い。

何故かというと答えは簡単、彼らが管理局きってのエリート揃いで自身の仕事に強い誇りを持っているからである。

要するに自分達の誇りある仕事を邪魔するな、違法魔導師として逮捕するぞ……てな感じだ。

実際に公務執行妨害や無許可での魔法使用で拘束された傭兵も数多くおり、一種の社会問題にまで発展していた。

「……どうします？」

「どうするも何もこの仕事は管理局からの正式な依頼だ。当然こちらに優先権がある。まあ、あちらの文句は全部中将殿に聞いてもらおう。」

うわぁ、てな顔でティアナを見るギンガはレジアスのこれから来るであろう理不尽な苦労に一人同情する。

そんなやり取りをしている内に約束の時間も迫りつつあった為、二人は少しペースを上げて部隊長室に向かった。

部隊長室の近くに来ると中から男の声が聞こえてきた。

「三佐の声ではないな。という事は例の執務官殿か」

ティアナの呟きにギンガは静かに頷く。

しばらく様子を見ようという事になり、ドア越しに中からの会話を聞くとどうやら揉めている様だった。

「だから……そんな違法魔導師はオレがＨｕｎｔしてやるから情報寄越せって言ってるだろ！」

「いやだから、この件にはレジアス中将が依頼した傭兵が当たることになってるんだ」

「傭兵ぃ？　……Ｈａｍ！　そんなのが来なくてもオレがすぐにでも倒してやるよ。それでＮｏ　Ｐｒｏｂｌｅｍだろ！！」

なんて言うか凄く理不尽というか恐喝みたいな感じですね……

そう、ギンガが話しかけてくる。

しかしティアナは深く考え込みギンガの話を全く聞いてなかった。

「いや……まさか……でも私も……」

「……ティアナさん？」

何かを考え込んでいたティアナが急に顔を上げた為、吃驚したギンガがティアナに問いかけた。

「ティアナさん……どうかしたんですか？」

「ギンガ、中に入るぞ」

「……はい？」

呆けているギンガを尻目にティアナは部隊長室のドアを開けた。

其処にいたのは蒼い生地に稲妻の紋様のあるバリアジャケットを着込んだ眼帯の男。

「やはり……独眼竜……伊達政宗」

「Ａｈ……誰だ、手前ぇ？」

それは時代も世界も遠く離れた地で烏と竜が再会した瞬間だった。

第二話　再会（後書き）

ティアナ、強くしすぎたかな……

第三話　伊達政宗

伊達政宗。

第９７管理外世界出身の魔導師であり、本局所属の執務官である。

高い戦闘能力と豊富な魔力、並びに魔力変換資質「雷電」を持ち、

その実力は管理局内の全魔導師の中でも指折りの存在だ。

だが、その政宗にもあまり公に出来ない秘密がある。

そう、ティアナと同じ前世の記憶を持っているのだ。

他の誰でもない「奥州筆頭」伊達政宗の記憶を。

しかし、彼の場合はティアナと一つ違うところがあった。

今現在の名もまた伊達政宗という名前なのだ。

これはどういう事かと言うと、彼は戦国に生きた伊達政宗の直系の

子孫に当たる伊達家の嫡男である。

かつて家康の開いた江戸幕府で確固たる地位を築き上げた伊達家は

現代も残る名家の一つだ。

今は仙台を本拠とする一大和菓子メーカー「竹雀屋」となっている。

そこで生まれた政宗は生まれつき右目が悪かった。

いや、だからこそ政宗と名付けられた。

つまりは、例え片目が悪くても同じ境遇のご先祖様に肖り(あやか)、それにめげずに立派になって欲しいと名付けられたのだ。

中身はそのご先祖様ご本人だった訳であるが。

そして幼少の頃、彼の両親が支社の視察の為の転勤で引っ越した先で彼は魔法と出会った。

その場所とは……そう、海鳴市。

ちなみに、かのエースオブエース達とは幼馴染みの仲である。

まあ彼の場合、目指して執務官になった訳ではなく自分に出来ることを遣っていたら何時の間にか資格を持っていたのだが。

しかし、その彼が何故このような場所にいるのか？

その答えは簡単。

ただ単に休暇であり、この近くに彼個人の別荘があるからだ。

つまりは別荘でゆっくりしようとした所、この辺りで違法魔導師が潜伏しているという噂を聞き、ならば捕まえてやろうと近くの陸士部隊に情報を貰(うば)いに来たのだった。

そして今の状況に至る。

「……まあ、分からないのも無理はないか」

ティアナは今の自分の容姿を思いながらそう呟く。

例え自身の前世が雑賀孫市であり、その記憶を持とうとも今の彼女はティアナ・ランスターである。

無論、その容姿はかつての孫市とは全く違っていた。

「っと、ランスターか。ちょいと待っといてくれ。今、執務官殿と話を着けるからな」

ゲンヤがそう言ってくるがティアナとしては目の前の男と話がしたい。

そこでゲンヤに提案し、なんとか二人きりなろうとした。

「ナカジマ三佐……一応、私が依頼を請けた当事者だ。ここは私が話を着け、結果この件を担当するものが情報を貰う。これでいいのでは？」

「Ｈｕｍ……お前がその傭兵って奴か。……Ｏｋｅｙ！　取り敢え

ずはそれでいい。おい、おっさん！　どっか二人で話し合える場所を用意しな。差し中っては訓練室なんかがＢｅｓｔだ！！」

話し合いをするのに訓練室に行く必要なんて全くない。

恐らくは自身の実力を見せつけ、この一件を奪うつもりなのだろう。

この男のそんな所は全く変わっておらず、ティアナは思わず薄ら笑みを浮かべた。

「それは構わんが……って、おい！　ここでやり合うつもりか！？……勘弁してくれ、俺がレジアスの旦那にどやされちまう」

「局員が一般人に攻撃魔法を使ったとなれば問題があるが……こちらは傭兵だ。いつもの合同演習、戦闘教練とすればいい。それなら中将殿も文句は言うまい」

「いや、俺が心配してるのはそうじゃなくてだな。あの人、武闘派で通ってるから制裁は体育会系だし、何気に凄いＭｕｓｃｌｅなんだぞ……あっ、感染（うつ）っちまった」

ティアナの的外れな心配に、もう中年の域に差し掛かろうとしているゲンヤが本気の涙目で嘆いた。

ミッドの平和を守るレジアスの依頼した仕事が本局の魔導師に奪われたとあっては地上本部の面目丸潰れだ。

そんな訳だから当然ながら情報を渡す役を仰せつかったゲンヤの責任は重大である。

もし、ゲンヤがティアナに情報を渡せなかったとしたら、あまつさえ本局執務官に解決されたとしたら……

きっとミッドに赤いサイクロンが吹き荒れることになるだろう。

本部の野外訓練場で首だけ地面に埋まった同僚を幾人も見てきたゲンヤにとってそれだけは何としても避けたかったのだ。

「Ｄｏｎ'ｔ　Ｍｉｎｄ！……別に手柄が欲しいわけじゃねぇ。休暇とは言えどある程度は動かないと体が鈍っちまうからな。こんなのはＲｕｎｎｉｎｇと同じだ」

「手柄は寄越すから此処で大人しくしてろと……こちらも舐められたものだな。……三佐、訓練室で構わん……用意してくれ」

どうやら今の遣り取りでティアナは完全に火が入ったようだった。

その反応をみて政宗はむしろ心躍るようだ。

獰猛な笑みがそれを証明している。

「Ｈａｍ！　どうやらＰｒｉｄｅはあるみたいだな。こりゃ違法魔導師よりは楽しめそうだ」

「当たり前だ。請け負った仕事はきっちり果たすのが私の誇りであり生き様だ。今、それをじっくりと思い出させてやろう」

嘆くゲンヤを尻目に完全にやる気になった二人は互いに互いを睨み合う。

ゲンヤはその背後に炎を纏う三本足の烏と雷を纏う独眼の竜を見たような気がした。

陸士１０８部隊訓練室。

貸切にされた、そのだだ広い部屋にいるのはティアナと政宗、そして部隊長のゲンヤとその娘ギンガである。

「一応ルールを確認するぞ。降参するか魔力エンプティで気絶したら負け。それ以外は自由だ。まあ、好きにやってくれ。加減なんかは俺が説明するよりもお互いに分かってるだろう」

もう既に何もかも諦め、審判役を買って出たゲンヤによってルール確認がされる。

まあ、遺恨を残さないようにと殆ど自由になってるのでルールも何

も無いのだが決まりは決まりだ。

二人は聞いてるのか聞いてないのか、終始無言のまま戦闘準備を済ましていく。

そんな中、ティアナは小声で相棒のゼフィロスに話し掛けた。

「ゼフィロス、セットアップしろ。相手は独眼竜。生半可な相手ではない……最初から仕掛けるぞ」

『了解。バリアジャケット展開、ヤタガラス出します』

前世で着ていた戦装束をイメージしたバリアジャケットを纏い、両手に白と黒の二挺拳銃を顕現させたティアナは無言で佇む伊達男に目を遣る。

そこには早く始めろと言わんばかりに片目を大きく見開いた竜がいた。

ゆっくりと刀剣型アームドデバイス「アラストル」を構えて開始の合図を今か今かと待っている。

ティアナもそれを確認し、こちらもゆっくりと構えをとった。

「双方いいな？　では……始めっ！！」

その号令と共に両者は激突した。

まず仕掛けたのはやはりティアナである。

低くした姿勢ままで突撃し政宗に鋭い蹴りを放ったのだ。

当然ながら反応し、蹴りを防ぐ政宗だったが、そこから更にティアナの攻撃は続く。

すぐさま脚を戻し、銃を構えたティアナはこれでもかと言わんばかりに銃撃を浴びせた。

二挺拳銃から放たれる弾はもちろん実弾ではなく魔力弾である。

射撃魔法「シュートバレット」

ミッド式の基本的な射撃魔法の一つだが、ティアナが改良したそれは、もはや別物と言えるものに変貌していた。

極限にまで圧縮、固定された魔力を螺旋状に回転させて放つそれはティアナによって「スパイラルバレット」と名付けられている。

その威力は通常のシュートバレットとは比較にもならない程であり、さらに特筆すべきはその強度と貫通性だ。

生半可なシールドやバリアならいとも容易く食い破り、敵を穿つその弾丸はティアナが最も信頼しているものだった。

政宗もその危険性に逸早く気付き、防ごうとはせず出来るだけ避けて隙を伺っている。

「どうした独眼竜。避けるだけでは私は倒せんぞ」

「手前ぇ、どうしてその名を……それにこの動きは……」

ティアナは政宗の上段からの一閃を銃をクロスさせる事で受け止め、すぐさま弾きながらも狙いを定めるがすでに政宗はそこにはいない。

「Ｙｅａｈ！　ＰＨＡＮＴＯＭ　ＤＩＶＥ！！」

何時の間にか三刀に持ち替えた政宗の空からの強襲をバックステップで交わすティアナ。

置き土産と言わんばかりにスフィアを当たりにばら撒いた。

炸裂自在式火弾魔法「ヒレンジャク」

ティアナのオリジナル魔法である。

政宗の周囲で次々に連鎖爆発を起こし、凄まじい爆炎が辺りを飲み込んでいく。

しかし魔力爆発に巻き込まれた政宗だがティアナにはある確信があった。

奴ほどの男がこの程度で終わる筈が無い、と。

「ＭＡＧＮＵＭ！！」

爆炎を切り裂くように三刀を回転させ突撃してきた政宗を待っていたとばかりに迎撃するティアナ。

なんとか政宗の突撃を捌いたティアナだったが、その顔は驚愕に彩られることになる。

今まで片方しかなかった三刀がもう片方にも握られていたのだ。

「おまけだ！　取っときな！！」

右腕から放たれる三刀の一撃が遂にティアナを捕らえた。

「ぐっ！！」

咄嗟に防御魔法を発動し、何とか致命的な一撃を防いだティアナだったが政宗の攻撃がこれで終わるはずが無い。

「Ｙｅｓ！　よく防いだ！……ＪＥＴ－Ｘ！！」

「……はあっ！」

一撃を受けた混乱から回復したティアナは政宗の連撃を的確に捌いていく。

だが攻撃を受ける度に政宗の魔力によって迸る電撃がティアナにダメージを与えていた。

（まずいな……予想以上に電撃のダメージが大きい。ならば……）

ティアナは襲い来る電撃の痛みに耐え、機を窺う。

そしてその時はやって来た。

この膠着状態に業を煮やした政宗が強烈な一撃を繰り出すため一度溜め込む瞬間を。

「Ｙｏｕ　Ｊｕｓｔ　Ｂｒｅａｋ！！　こいつで終わ……」

「そこだ！！　モードシフト・クロッグミ！！」

一瞬にして拳銃からショットガンへと変貌を遂げたヤタガラスを構え、引鉄を引く。

放出された大量の魔力弾は周囲の空間ごと政宗を吹き飛ばした。

「がぁああッーーー！！」

炸裂した魔力弾の一つ一つは威力が低いもののそれを全身に浴びた政宗は大半の魔力を削られていた。

だがティアナも攻撃を耐えている間、常に電撃に晒され体力を消耗している。

「どうだ、思い出したか……この私を……」

「ああ、思い出した……ん、よっと」

勢いをつけて飛び起きる政宗をティアナは肩で息をしつつ見ている。

交わされる会話にゲンヤとギンガは疑問を持つが二人は気にしていない様だった。

「ふう……久しぶりだなぁ、三代目。元気だったか？」

「ああ、そうだな。久しいな独眼竜」

お互いの得物をぶつけて挨拶を交わす二人。

すでにゲンヤ達は状況に着いていけず困惑していた。

「えっと……お二人はお知り合いなんですか？」

ギンガが代表して質問する。

それに答えたのはティアナだった。

「そうだな……まあ、古い馴染みだ」

「Ａｈ、確かに古い馴染みだな」

政宗も肯定する。

そこでゲンヤが声を上げた。

「二人が知り合いなのはいいが……結局どうするんだ？」

そもそもこの決闘はどちらが仕事を請けるかで行われたものである。

何となく二人がもう戦う気が無い事を読み取ったゲンヤがそう聞くのは当然のことだった。

「オレの負けでいい。そこそこ楽しめたしな」

「私も久しぶりに楽しめた。独眼竜、礼を言っておく」

なんとかティアナに情報を渡せそうで安心するゲンヤ。

娘のギンガはそんな情けない父親を悲しいやら呆れたやらで複雑な顔して見ていた。

「三佐……後で情報を貰いに行くから少々二人きりにして欲しい。積もる話もあるのでな」

「わかった。俺の部屋にいるから終わったら来てくれ。ギンガ行くぞ」

「はい。ではティアナさん、また後で」

ナカジマ親子はそう言うと訓練室を出て行った。

今現在ここにいるのはティアナと政宗だけである。

「ゼフィロス……結界を」

『了解。結界を展開します』

「遮音結界か。相変わらずの用心深さだな」

「好き好んで聞かれたい話でもあるまい」

「まあ、そうだな。じゃあ改めて、久しぶりだな雑賀孫市」

「ああ、伊達政宗。関ヶ原以来か……お前に会うのは」

この二人……否、前世の二人は同じ東軍に属しており戦友と呼べる間柄だ。

最後に別れてから既に４００年近く経っているが、関ヶ原で戦死した孫市は気付いたらティアナへと生まれ変わっていた為、感覚的には十数年振りの再会だった。

ちなみに政宗は関ヶ原の戦いの後も徳川の家臣として老年まで仕えていた為、孫市との再会は数十年振りだったりする。

「取りあえず、今の私はティアナ・ランスターだ。一応覚えておいてくれ」

「Ｏｋｅｙ！　ティアナだな。今度からはそう呼ばせてもらう。オレの名前は変わってないんでお前の好きなように呼んでくれ」

「変わってない……だと。一体、どういう事だ？」

政宗は自身の事をティアナに話した。

生まれの事、名前の事、今までの経歴などを話していく。

それを受けて、ティアナも自身の事を話す。

「成程な……まさか、自身の子孫に生まれ変わるとはな」

「Ｈｕｍ……生まれ変わってもやることが同じとは相変わらずＣｏｏｌな奴だぜ」

互いの情報交換が済んだため今回はお開きとなった。

だが、訓練室を出ようとするティアナに政宗が最後に声を掛ける。

「ティアナ、近々オレの知り合いが部隊を立ち上げるんだが……それに協力してやってくれねぇか？」

「……契約か？　我らは我らを最も評価する者と契約する。それが雑賀衆の誇りであり私の生き様だ。例え生まれ変わったとしてもそれは変わらない。もう忘れたか？」

「忘れてねぇよ。一応言っただけだ。まあ、八神の奴がお前の事を評価するなら契約してやってくれ」

「分かった。だが力で抑えようとするのなら手痛い目にあって貰う。それを踏まえて、その八神とやらに私の事を話すがいい。気が向いたら契約してやってもいいとな。お前の推薦故の特別な配慮だぞ」

「Ｔｈａｎｋｓ！　感謝するぜティアナ！」

「ふふ……ではな独眼竜」

訓練室を後にし、ティアナは部隊長室に向かった。

第三話　伊達政宗（後書き）

戦闘シーンって難しいです……

第四話　依頼（前書き）

オリキャラ注意報が発令されました。

耐性のない方はお気を付け下さい。

第四話　依頼

陸士１０８部隊で情報を貰ったティアナは一日置いて早速仕事に入った。

まあ、これには特筆すべき事は何もない。

数日後、推定ＡＡＡランクと思われる一人の違法魔導師がまるで襤褸屑のような姿で地上本部に引き渡されただけである。

それはさておき。

それから幾日か仕事もなくティアナは久方振りの休暇を楽しんでいた。

「……暇だ」

『……暇ですねぇ』

否、もうあまり楽しんでなかった。

そもそもファッションやショッピング等の娯楽といったものにあまり興味も無く、唯一の趣味と言ったら銃の分解整備か戦闘訓練ぐらいなティアナだ。

始めの頃は疲れをとるために休んではいたが、しばらくしてデバイスの整備や装備の確認に勤しみだし、訓練も軽めながら毎日こなし

て、わずか数日で決壊を迎えたのである。

「ゼフィロス……仕事は無いか？　もうこれ以上は耐えられん。何でもいい……この際、迷子の子猫探しでも構わん」

『無いですよそんなの。最近は管理局も頑張っているお陰か治安もそこそこ良くなってますしね』

どうやら本当に限界のようである。

まあ、ティアナにとって戦いこそが生き様であるため、その戦いが無いというのは苦痛でしかないのだろう。

『むっ……マスター、どうやらお客様のようですよ』

ゼフィロスのその声でティアナは表情を元に戻した。

アジトの廃ビルを囲むように張られたセンサーに誰か反応したのだ。

ティアナのアジトはミッドチルダの首都クラナガンから少し離れた廃棄都市群の中にあり、外見は完全に廃ビルそのものである。

その職業柄か襲撃される事も多々あるティアナは自分のアジト周辺に警戒用のセンサーを張り巡らし、誰かが近づくとゼフィロスが感知するようになっていた。

近づいたのが単なる通りすがりや普通の客なら良いが、招かざる客がきた場合、迎え撃つためにアジトの中には即時発動できる罠が物理的（イジカル）、魔導的（マジカル）問わずに張り巡らされている。

また、周囲のビルもティアナが戦闘しやすいように改造されているため、この都市群そのものが一種の要塞と化していた。

「ゼフィロス……どんな感じだ？」

『スーツ姿の男性が一人です。魔力反応無し。刺客という感じではないですね。まあ、姿形では判別出来ませんが』

「罠は合図ですぐに起動できるようにしておけ。フェイクシルエットとオプティックハイドを発動。警戒しつつ様子を伺う」

ティアナは幻影魔法で姿を消し、自分の分身（デコイ）を発生させた。

このような厳戒態勢をしくのは、かつて依頼人を装った刺客の襲撃を受けたからだ。

ちなみにその時は襲撃に反応し発動した罠の数々で刺客には高い授業料を払って貰ったのではあるが。

『了解。F・S並びにO・H発動……お客様、入ります。3，2，1……』

丁重にドアがノックされ、初老ぐらいの少し太り気味の男が中に入ってきた。

「すみません……太陽(ソル)の烏(レイブン)さんの事務所はここですかな？」

〈ええ……依頼ですか？〉

壁際に隠れたティアナは念話を応用しデコイが喋っているように仕向ける。

魔力消費は高いが質感なども再現してあるため殆ど本物と代わりない程のデコイだ。

この男が刺客なら何らかの行動を起こすだろう。

ティアナはそれを注意深く見ながらも自身の優位な位置に移動する。

「はい……どうか力をお貸しいただけませんか？」

〈その前に……此処の事は誰から？〉

これは意外と重要な質問である。

アジトの場所を知っている者は限られている為、この男の背後関係を知る絶好の情報源となるのだ。

それがティアナの知らない人物だったら刺客の可能性が高いし、逆に知る人物だとしても安心は出来ない。

だが、うまく捕らえる事が出来たら報復の際に優位に立てるので誰の紹介かという質問をティアナはいつも使っていた。

「地上本部のレジアス中将です」

〈ほう、中将殿から。どうぞお入りを、詳しいお話は応接室で……〉

ティアナはデコイを操作しソファーに座らせる。

男も失礼してと一言かけて同じように座った。

〈まずは貴方がどういった身分の方とお聞きしても？　守秘義務は厳守致しますのでご安心を〉

「はい……私はミッドチルダ国立博物館館長のロイス・ロールスと申します。これが名刺です」

名刺を受け取り確認する。

個人認証も付いているＶＩＰ用の名刺だ。

魔導技術を応用したもので指紋・瞳孔・静脈認証等で本人と確認できる最高級品である。

これでこの男が刺客ではなく依頼客だと確定できた。

「成程……あの国立博物館の館長か。仕事で何度か訪れたことがあるな」

突然の背後からの声にロイスは驚き振り返った。

そして後ろにいるティアナの姿を確認し、目の前のティアナと見比べさらに驚愕する。

「失礼……目の前にいるのは魔法で作った分身（デコイ）です。何分、恨みを買う職業ですので最低限の警戒をしました。非礼を謝罪します」

「いえ……成程、あの中将が諸手を挙げて推薦するのも頷ける。お願いです、私に力を貸していただきたい。報酬でしたら相応の物を用意します」

ティアナは分身（デコイ）を消し、それが座っていた全く同じ場所に腰を掛ける。

それは……あたかも時間が巻き戻ったかのような印象を受ける程、完璧な演出であった。

「さて、まずはお話を窺いましょう。受ける受けないはそれからで

す。出来ないことを出来るといって信用を落とすのは嫌なのでね」

「はい……実はある品を悪意の手から守ってもらいたいのです」

「ある品……悪意の手……それで？」

「この様なカードが先日、私の下に届きました」

そう言ってロイスは懐から一枚のカードを取り出しテーブルに置いた。

ティアナは失礼と一言断り、それを手に取り読み上げる。

「【次に月が真円を描く夜、古の玉石を戴きに参上仕る　「桜花絶景」怪盗ラパン】」

「そうです。あの怪盗ラパンです」

怪盗ラパン。

それはミッドチルダを中心に活動する、今、巷で最も話題となっている盗賊の名だ。

年齢、性別、出身世界。

その全てが謎に包まれており、不当に利益を貪る企業や不正を働く官僚、管理局員等を相手取って盗みを働き、そしてそれらを恵まれ

ぬ民衆にばらまいている。
その他にも美術品や貴金属、危険度の低いロストロギアも盗むが比較的、ミッド市民からは義賊として扱われていた。
その盗めるなら例え星の光だろうと盗むとまで言われる怪盗が次の獲物に国立博物館を指名したのである。

「この古の玉石と言うのは？」

「それは来週から開催される古代ベルカ展で一番の目玉となる一品「聖王の涙」の事かと。他にも色々と宝石類はありますがそれに勝る物はございません」

「ふむ……月齢から考えて月が真円を描くのは三日後か。分かりました、お引き受けしましょう。」

「本当ですか！　ありがとうございます！！」

「ああ、あともう一つ。あなたの人となりを信用して分身（デコイ）の事は話しましたが……私の安全の為、出来れば内密でお願いします」

「わ、分かりました。誓って洩らしません」

その後、報酬の話など細部を詰め、ロイスは満足げに帰っていった。

誰もいなくなった応接室でティアナは今回の依頼について考える。

「怪盗ラパンか。だがあの予告状に書かれた「桜花絶景」という言葉は以前どこかで聞いたことが……」

ティアナは思考を深め、己の記憶を探る。

（ティアナ・ランスターのではなく、雑賀孫市の記憶に確か……）

――――絶景かなぁ絶景かなぁ。この春の宵、値千両とは小せえ小せえ。俺が払えば値万両万々両……まあ、そんなに蓄えないけどね……っと、また会ったな孫市！――――

「そうだ、あの男だ……間違いない。怪盗ラパンの正体は……「桜花絶景」石川五右衛門だ」

『石川……五右衛門……ですか？　マスター、それはどういった人物です？』

ゼフィロスの質問にティアナは少し考え込んだ。

おそらくかの人物について、出来る限りの事を思い出しているのだろう。

「石川五右衛門は私の前世、雑賀孫市と同じ時代に生き、天下の大泥棒と呼ばれた盗賊だ。時の天下人「烈界武帝」豊臣秀吉に異を唱え、奴の軍から金や食料を盗み、貧しい民に分け与えていた。覇王秀吉は強力に富国強兵を押し進め、あまり民草を省みることは無かったからな……貧しい者には五右衛門はさぞかし救世主に見えたのだろう」

『典型的な義賊ですね。マスターと知り合いなのですか？』

「何度か会敵したというだけだ。当時、我らは豊臣に雇われていた。その中で奴とは幾度も対峙しているがその度に態と逃がしてやった。豊臣は我らを力で抑えようとしていたからな。まあ、その意趣返しと言うやつだ。性格は見栄っ張りで派手好きだが根は小心者。なかなか女々しい奴だったが強大な豊臣に一人で敵対していた事は素直に評価している」

『なるほど……その五右衛門が今回の相手という訳ですか。しかしマスター、何か対策はあるのですか？　話を聞くになかなかの使い手かと思いますが』

「奴は変装と遁法の名手だ。忍の術も使えると聞く。転生した事でどれだけ使えるかは見てみないと分からないが幻影対策はしておくべきだろう。幸いこちらもある程度は幻影魔法については知識はある」

ティアナは自身の持ちえる知識を確認しながら自信満々で告げた。

「ふふ、待っていろ石川五右衛門……いや怪盗ラパン。今度は逃げる事は叶わぬと知れ」

決戦は三日後のミッドチルダ国立博物館。

その時、更なる出会いがティアナを待っているとはこの時は知る由も無かった。

第五話　怪盗ラパン（前書き）

お待たせしました。

引き続きオリキャラ注意報発令中です。

御都合的な場面もあるかも……

第五話　怪盗ラパン

そして三日後。

月が真円に輝く夜、ミッドチルダ国立博物館にティアナはいた。

来る決戦の時間に向けて準備を整えていた所にロイス館長の寄越した迎えの車が到着し、それに乗ってやってきたのである。

「おお、ティアナさん。ご苦労様です」

案内され、博物館内の特別展示会場と呼ばれる別館にやってきたティアナにロイスは声をかける。

円形ホールのような会場には既に大勢のガードマンらしき黒服が詰め、自身の持ち場を固めていた。

「ロイス館長。この会場にいる者の本人確認は済んでいますか？ラパンは変装の名手です。既に入り込んでるやも知れない」

「ご安心を。ティアナさんに教えて頂いた変装を見破る方法は既に全員に行っております。しかし、案外簡単なんですなぁ。このような方法で幻影魔法を破れるなんて」

ティアナはロイスにラパンが仕掛けるであろう幻影魔法の対策を伝

授していた。

それは指紋等による個人確認と会場内に膝の高さ程まで焚かれたスモークである。

いかに魔法で姿を偽ってもそれはあくまで幻像を着ているだけであり本体はそのままだ。

それでは肉眼による確認は誤魔化せても機械による認証は誤魔化せない。

ロイスはティアナからこれを聞き、すぐにガードを担当する者全ての指紋等を記録させ、そして確認していた。

スモークもについても同じだ。

魔法で姿を消しても存在が消えたわけではない、見えなくても本体はそこにいる。

つまりはスモークが焚かれた状態で動けば生じた気流によりスモークが不自然に揺れるのだ。

これらによってティアナはラパンの幻影魔法による進入を確実ではないが未然に防ごうとしていた。

「一応、私も指紋認証を。しかし、ロイス館長……これらはあくまで予防であり確実ではありません。魔法による変装は防げても物理的な変装は防げないのです。かつての奴の犯行にマスクでの変装が確認されてます。まあ、対策はこうして頬を引っ張るくらいしか無

いですが」

ティアナは自身の頬を思い切り引っ張り確認を行う。

とても痛そうだが全く表情が変わらないティアナを見てロイスは少し寒気がした。

「失礼します！　時空管理局です！！」

外に通じる唯一の扉が開き、年若い女性を先頭に数人が入ってきて名乗りを上げた。

リーダーと思われる女性が辺り見渡し、ロイスを確認すると部下をそこで待たせ脇目も振らずこちらにやってくる。

「ロイス・ロールス館長ですか？　私は時空管理局本局所属ラパン専従特別捜査官ジェニー・ガーター一等空尉であります。どうかよろしくお願いします」

「おお、ご苦労様ですガーター一尉。ラパン捜査の第一人者である貴女が来てくだされば心強い限りですな」

「いえ、恐縮です。それよりこちらの方は？」

ジェニーはティアナに視線を向けロイスに問う。

ちなみにティアナより身長がかなり低いので完全に見上げている状態だ。

「ああ、こちらはティアナさん。傭兵の方ですよ。今回の護衛をお願いしましてね」

「ティアナ・ランスターです。よろしく……ガーター一等空尉殿」

ロイスからの紹介を受け、渋々挨拶をするティアナ。

ジェニーはティアナが傭兵だと知ると鋭い目つきで睨んできた。

「傭兵の方ですか……まあ、見学だけならいいです。決して！　我々の仕事の邪魔だけはしないようにお願いしますよ」

ジェニーはそう言うと部下達の下に戻っていった。

どうやら典型的な本局魔導師らしく傭兵を快く思ってないようである。

ティアナは軽く溜息を吐き、見回りを始めるためロイスに声をかけた。

「ロイス館長、私も見回りを開始します。一尉殿にはああ言われま

したが私にも誇りがあるのでね」

「よろしくお願いいたします。太陽(ソル)の烏殿(レイブン)」

さて、ここで今回の護衛対象である「聖王の涙」について軽く説明しておこう。

「聖王の涙」は古代ベルカ時代の遺跡より発掘された結晶体である。その形は特徴的であり、下に半円の付いた円錐……ちょうど涙型といったら分かりやすいかも知れない。

さらにこの結晶体の特筆すべき所はその輝きであり、なんと虹色に光を放つのだ。

これは古代ベルカに君臨した聖王独特の虹色の魔力光「カイゼル・ファルベ」と同じ色であり先の涙型の造形と相まってこの神秘の石の由来となっている。

古代ベルカ展には他にも数千点以上に及ぶ古代ベルカの遺産が展示されているが、この「聖王の涙」は別格の存在であり専用の展示会場が別館として用意されるくらいだ。

それがこの特別展示会場である。

この会場には特殊な仕掛けがあり、高い天井のある一カ所にのみ円形の天窓が付いてある。

月の軌道上に設けられたその天窓に月が来ると、その光が「聖王の涙」に丁度当たるように計算して設計されているのだ。

これは月の光によって「聖王の涙」の放つ虹の光が更に煌めくためである。

これが古代ベルカ展最大の目玉となっていた。

そして現在、午後九時五五分。

「もうすぐ十時か。ロイス館長が言うには大体十時にあの天窓に月が満たされるはず」

ティアナは天井に唯一設けられた円形の天窓に視線を向けた。

もう月は半分以上姿を見せているが時間になれば天窓の大きさいっぱいに月が輝くという。

ティアナは慎重にいつ来るやも知れないまだ見ぬ敵の気配を探り、念入りに辺りを見回す。

「聖王の涙」の周辺はあのジェニー・ガーター特別捜査官とその部下五人が完全に固めており、不用意に近づくとジェニー一尉が唸りを揚げて威嚇してくるほどだった。

「ゼフィロス、センサーはどうだ？」

『反応はありません。特に進入口となるであろう扉とあの天窓は重点的に精査してますが何もないですね』

「やはり、すでにこの会場内に潜り込んでいると考えるのが妥当だな」

（だとすると……やはり怪しいのはあいつ等か）

ティアナの視線の先にはジェニー達、管理局の一団が存在していた。

（だが、彼らにも機械認証と物理確認を行ったが一切不備はなかった……）

実は、ロイスは管理局にも今回こちらに来る面々の指紋等、個人認証が出来る資料を請求していた。

管理局から届いた資料と彼らの個人データを比較し、確たる本人だと証明したのである。

ちなみにジェニーは自身の知らない幻影魔法の破り方に終始感心していた。

だがロイスが提案のしたのはティアナだと教えるや否や見回りをするティアナを睨み、

「ラパンを甘く見るな！奴にこんなものは通用しない！」

と、何故か急に怒り出してしまった。

どういう訳か涙目でティアナを睨むジェニーに対し、唖然と呆けているティアナの姿がとても印象的だったと後に彼女の相棒は語っている。

それはさておき。

時計の短針が十の数字を指し、真円の月がその姿を全て天窓から確認できるようになって間もなく……

「なっ！？」

辺りは一切の闇に包まれた。

一切の闇。

一寸先も見渡せない完全な闇。

天窓から見える空には輝く月が存在してはいるが会場内はその闇に包まれていた。

「えっ？」

いや、それはおかしい。

先ほど説明を受けたはずだ、「聖王の涙」は月の光を受けてより一層光輝く。

それも目映いくらいに虹色の光を放つのだと。

なのに……会場の中は完璧に闇の中。

拭えない違和感はこの暗黒の世界に光が満ちた瞬間、明らかになった。

誰もが予想したように。

誰もが予想し得なかったように。

「聖王の涙」は接触性のスタントラップが付加されたケースに入れられ、幾つもの感知センサーと見張りの目の網が張り巡らされた厳重警護の台座からその姿を失わせていた。

光が消え、再び灯るまでの僅か二秒間の出来事である。

「……消えた」

誰のものかは分からないがその呟きは小声にも係わらず、静寂が支配するこの空間では嫌にはっきりと聞こえた。

皆が唖然と呆ける中、即座に事態を認識したティアナが大声を上げる。

「全員動くな！！　動けば即座に撃つ！！　ゼフィロス、結界を張れ！　最大強度でだ！」

『了解。封鎖結界展開。消費が激しいです……長くは持ちません』

ティアナの命令によって、ゼフィロスはあらかじめ術式を構築していた結界を発生させた。

これは外からの進入も中からの脱出も防ぐ強装封鎖結界である。

本当はずっと張っていられれば良いのだが、ティアナはこの手の魔法はあまり得意ではなく、また魔力の消費がかなり激しいため、発動させる瞬間はこの時を置いて他になかったのだ。

「構わん。ロイス館長、人員の確認を。消えた者はいますか？」

ティアナはロイスにガードマンの人数を確認させる。
しばし呆けていたロイスはティアナの発言によってようやく意識をこちらに戻し、慌ててガードの人数確認を行った。

「――――――大丈夫です。全員確認しました」

「そうですか」

ティアナが一先ずの安心を得たが、すぐに問題が降って湧いた。
ラパン専従特別捜査官ジェニー・ガーター一尉である。

「ちょっと！！　何で貴方が指揮を執ってるんですか！　我々の捜査の邪魔です！　早く解放しなさい！！」

ティアナは即座にジェニーに銃口を向け、場は一触即発の状態へともつれ込んだ。

「なっ！？　貴方……自分のしていることが分かっているのですか？　公務執行妨害ですよこれは！！」

「悪いが私も仕事だ。むざむざラパンに逃げられる訳にはいかない」

「既にラパンは逃げているかもしれないのに此処で貴方に構っている暇はないんです！　それが分からないのですか！　だから傭兵な

んて連中は……」

互いが互いを譲らず、剣呑な空気が辺りを包み始める。

もう少しすれば銃撃戦が始まってしまうだろう。

無論、ティアナが先に仕掛ける方で。

だがジェニーの部下の一人が声を上げたことでそれは回避された。

「ジェニー一尉……今、外で物音がしました。もしかしてラパンは既に外に」

「本当ですか准尉！？」

「はい、確かにこの耳で聞きました。ラパンは既に外にいます。早くしないと逃げられてしまいます」

「ほら、早く我々を解放して下さい！　ラパンに逃げられてしまうでしょう！！」

部下の一人が外からの物音をジェニーに報告した。

彼女からの報告によりジェニーの口撃はさらに勢い付いていく。

それにより途中から無言を貫いていたティアナは渋々銃口を下に向け、結界を解いた。

「分かればいいんです。今回のことは罪には問いませんから貴方はそこで大人しくしていなさい。皆さん行きますよ！　今度こそラパンを捕まえます！！」

意気揚々と声を上げジェニー達は扉から外へ出て行く。

「ロイス館長、私も行きます。貴方はここに残ってください」

ティアナはそう言うと月が輝く夜空の下へと駆け出した。

別館の外へ出たティアナはジェニー達の一団を発見し、

「逃げ切れるものか。お前はもう既に私の網の中だよ……怪盗ラパン」

したり顔でそう小さく呟いた。

第五話　怪盗ラパン（後書き）

やはりちょっと無理があるかも……

第六話　真相（前書き）

お待たせしました。

怪盗ラパン編は今回を含め、あと二回で終了予定です。

はたして怪盗ラパンの正体とは……

第六話　真相

草木も眠る丑三つ時……という訳ではないけれど、深い夜の闇に包まれた街の一角。

全く人気の無い、ビルとビルとの間に出来た人工的な死角の道を一人の人物が走っていく。

「はぁはぁはぁ……ふふん、此処までくれば一安心だな」

その人物――怪盗ラパンは追っ手がいないのを確認し、一息付いた。

「ふう、あの傭兵とか言う姉ちゃんは何故か懐かしい様な危険な香りがするが管理局の方は全くちょろいもんだ」

ラパンは今はデバイスの格納領域にしまってある今回の獲物を省みた。

そしてその神々しいまでの姿を思い出し、一人悦に入る。

「古代ベルカの秘宝「聖王の涙」。正に私のコレクションに相応しい一品だ」

ラパンは貧しい民衆に分け与える物以外は盗んだ宝を売るなんて事は絶対にしない。

金が欲しいのではなく世界中のお宝を手にしたいというロマンと厳重な警備の中から盗みを働く、その絶対的な緊張から生まれるスリル、そしてそれを成し得た時の爽快感。

それらを求めて盗みを働くのだ。

「さーて、我が愛しのＦＩＡＴ５００【三世代目ＳＰＯＲＴ白】ちゃんのとこまでもう少し。頑張りますか」

ラパンの短い休憩も終わり、隠してある愛車の元へといざ行かんとした瞬間、

「残念だが……お前の逃避行も此処で終焉だ。怪盗ラパン」

と、言う声がすぐ背後から聞こえてきた。

ラパンはその声にすぐさま反応し、後ろを振り返るや否や、目映い光がまるでスポットライトのように周囲を照らす。

橙色のスフィアから指向性の光が出ており、ラパンはその強烈な光に思わず手で目を覆った。

光に目が慣れてきたので手の影からそっと光源の方を覗き、声の正

体を見てみると、
其処にいたのはその懐かしくも危険な香りがするあの傭兵。
「お前は……傭兵の……確か、ティアナ・ランスター」
「その通りだ。怪盗ラパン……いや」
物陰から現れたティアナが出てきて早々に言い放ったのは、
「時空管理局本局魔導師。名前は確か……スピアーノ准尉だったか」
ラパンの正体だった。
その管理局の制服に身を包んだ少女――ジェニー一尉に物音を報告したスピアーノ・マッダ准尉は目を覆っていた手を下ろし、静かにティアナと対峙する。

意図せず作られた街の死角。
表通りにはまだ人々が賑やかにしているのに、この入り組んだ路地

裏では二人の少女のみが存在していた。

「一体何の事ですか？　私がラパンだなんて……私はそのラパンを探して此処にいるんです。変な言い掛かりはやめてください」

「いいや、お前がラパンだよ。私が追いかけて来た事がその証拠だ」

ティアナは自信を持ってスピアーノがラパンだと告げる。

スピアーノは冷静を装いつつも内心冷や汗が流れ続けていた。

「（どうして分かった！？　いやここは何とかして誤魔化さないと……）いい加減にしてください、公務執行妨害ですよ！　この事はジェニー一尉に報告させて頂きますから！」

「私も報告するさ、お前がラパンだとな。それより気にならないか？　どうして私が気付いたのか」

自分は証拠となるものは一切残していないとスピアーノは自負している。

だがそれを破り、このティアナという傭兵は自身の正体へと迫ってきた。

確かに気になるが、それを聞いたら最早言い逃れは出来ないとスピアーノは直感的に悟った。

だから、スピアーノは誇ってもいい。

危険な香りがするとティアナを見た瞬間に感じた己の危険に対する嗅覚を。

ティアナは確かにスピアーノに破滅をもたらす凶鳥だったのだから。

「聞く必要はありません！　失礼します！」

スピアーノは強引に話を終わらせティアナの横を通り抜けようとする。

だが彼女はここで致命的な失敗をしてしまった。

「……たそうだな？」

「えっ？」

なぜ、ここで聞き返してしまったのだろう……と、スピアーノは己を悔いた。

ティアナが呟いたその一言が自身の命を刈り取る魔弾だと分かっていた筈なのに。

「物音が……聞こえたそうだな？」

「そうですよ……だからこそ我々はここにいるんでしょう。ラパンを探しに」

ああ、最早止められない。

次に出る言葉がスピアーノのか細くなった最後の火を消す……魔弾の風。

「そうだな。だが、聞こえるはずが無いんだよ。物音など」

「何で……ですか……私は確かに」

「いや、絶対に聞こえない。何故なら、私が張ったのは封鎖結界だけでなく……遮音結界もだからだ」

「えっ……そ、そんな」

火が今、風で消えた。

ティアナの放った言葉という名の魔弾はスピアーノの心に鋭く抉り

込む。

あの時、物音など聞こえないはずのあの状況で確かに物音を聞いたと証言したスピアーノ。

ティアナはそれを聞いた瞬間、己が勝利を確信した。

「私も初めは判らなかったさ。だが、既に内部に潜り込まれている。そう感じていた」

ティアナは言う。

自分にも誰がラパンか最初は分からなかったと。

「ロイス、十数人のガードマン、管理局員。皆が皆、怪しく思えるあの状況で、私に出来たことは罠を張ることだけだ。それとは分からないように囮まで用意してな」

「囮……あの封鎖結界ですか」

スピアーノ……いやラパンはそう小さく呟く。

戦闘が得意ではない自分が抵抗したところでどうにもならないと彼女は既に悟っている。

得意な転移を行うとしてもそんな隙を目の前の狩猟者は逃すはずも

ない。

もう、完全に詰みであった。

「そう……あの結界はお前を捕らえる為ではなく遮音結界を隠すために張ったものだ。消費は激しいがカートリッジを使えば十分は保つ」

今夜のティアナはいやに饒舌だ。

彼女の相棒ゼフィロスは、己が主人が相当ご機嫌なのだと黙して悟る。

それほどまでに、いつもは多くは語らないティアナの舌は良く回っていた。

「お前は何としても、逸早く外に出なければならない理由があった。私が結界を張り、誰も動くなと宣言した時。お前は相当に焦ったはずだ。何せ、あの時のお前に残された時間など保っておよそ数分と言ったところだからな」

ふと、ラパンは疑問に思う。

どうして、この目の前の少女は自分の隠されたる秘密をスバズバと当ててくるのだろうか。

保っておよそ数分。

魔法しか知らないミッド人には絶対に分からない事実の筈である。

なのにこの少女は……あの時の私の心の内も、どうやって厳重警備の中から「聖王の涙」を盗み出したのかも知っている気がした。

だから、純粋に聞いてみた。

私がどのように「聖王の涙」を盗んだのか？

何故、私が早く外に出たがったのか？

そして……お前は一体何者なのか？

「どうやって盗んだのか。それはお前がいた場所と持ち得る技術（スキル）、後は「聖王の涙」と月の位置を考えれば簡単だ」

ラパンたるスピアーノがあの時いた場所は天井にぽっかり開いた円形の天窓の直線上。

つまりは「聖王の涙」と天窓に挟まれた位置だった。

「お前が「聖王の涙」を盗むに用いた技術（スキル）は……忍法　影渡しの術。己の影の上にある物体を一時的にその影に引き込み手元に持ってくると言う、伊賀忍軍の秘術の一つだ」

それまで会場内を照らしていた照明が消えたことで生じた闇。
そして、対面からの月の光によって伸びたスピアーノの影。
それが「聖王の涙」まで届く事は十分に計算した上で分かっている事だった。
後は仕掛けにより急に照明が落ちた混乱の隙を突き、影の中に一瞬にして獲物を引き込んだのである。
だが、この忍術には一つ欠点が存在していた。
影の中に引き込んだ物体はそのまま保持出来るが、僅か十分程で影から出てきてしまうのだ。
そうなれば幾らスモークによって足下が隠されているとしても、その神秘的な虹の光によってすぐにばれるしまうだろう。
だからこそ、ラパンはすぐにでも外に出たかった。
物音を聞いたと嘘の報告をし、ラパンは既に外に逃げたと思わせて。
だが、ここで誤算が生じた。
そう、ティアナの張った封鎖結界である。
これにはさしものラパンも相当に焦った。
迂闊にも動く訳にもいかず、かといって時間が立てば己の身が危う

くなる。

そこでラパン逮捕に情熱を燃やすジェニー一尉を焚きつけることで事態の打開を図ったのだ。

奇しくもそれがティアナに正体を悟られる原因になると露とも思わずに。

「お前は一体……一体、何者だ！　何故……何故、私の切り札の忍術まで知っている！？」

「私が何者か。それは当のお前が良く知っているはずだ……「桜花絶景」石川五右衛門」

今度こそラパンは本当に驚愕した。

忍術についてはラパンの今までの犯行資料等を、かの無限書庫を駆使して調べれば……まあ、分からないとは言いきれない。

だが、今のは別だ。

それこそが誰にも悟られないはずのラパン最大の秘密なのだから。

しかし、五右衛門は一つ思い当たる。

目の前の少女も自分と同じなのでは……と。

「銃……傭兵……私の前世の名……ま、まさか……お前は！？」

五右衛門は目の前の少女とよく似た特徴を持つ人物を知っている。

それは前世の自分を悉く追いつめた戦国最強の鉄砲傭兵集団の若き長。

ラパンの反応を楽しんだティアナは普段は滅多にしない不適な笑みを浮かべ己が前世の名を言い放った。

「そう……久しいな五右衛門。お前の思った通り、私は……「煙鳥翔華」雑賀孫市だ」

第六話　真相（後書き）

ＦＩＡＴ５００は著者の愛車です。

なので、これからもちょくちょく出てくるかも

第七話　遭遇

因縁は遠く、時間も世界も越えた地で着けられる事となった。

覇王秀吉に異を唱え、彼の軍から盗みを働いた天下の大泥棒、「桜花絶景」石川五右衛門。

その秀吉に雇われていた傭兵集団雑賀衆の長、「煙鳥翔華」雑賀孫市。

その両者の対決は、下馬評通りと言うか当然ながら孫市に軍配が上がったのである。

「くっ……分かりました。あなたの勝ちです孫市。と、言うかいつも態と逃がしてもらっていた私があなたに勝てるはずがないでしょうが。お手上げですよお手上げ」

「ほう、殊勝だな。少しは抵抗するかと思ったが……やはり女々しいなお前」

ティアナはカートリッジをリロードし、ラパンにバインドをかける。

まあ、そんな事をしなくてもラパンは逃げるつもりは更々ないのだが一応の保険だ。

「女々しいも何も、今の私は女です」

「ん、何？　それは変装じゃないのか？」

「違います。この顔は素顔だし、スピアーノも本名だし、きちんと管理局員です。怪盗は趣味です」

それはティアナも疑問に思っていた事だった。

かつての五右衛門は紛う事なき男だったはずである。

ずっと女性局員に変装していると思っていたがどうやら違うようだ。

つまりはスピアーノ＝ラパンは堂々と正面から乗り込んできたという訳である。

どうりで書類に一切の不備がない訳だ……本人なのだから。

何でも生まれ変わった先は女の体で、女としての生活と教育を受けてきて、今は身も心も女なんだそうだ。

だが、男ではなく女好きらしい。

そんな所は変わらないなとティアナは思った。

それはさておき、

「さて、そろそろ「聖王の涙」を出してもらおうか」

「……分かりましたよ。あーあ、欲しかったなぁこれ」

スピアーノは局員用の汎用デバイスではなく懐から出した煙管型のストレージデバイスの格納領域から「聖王の涙」を取り出しティアナに投げ渡そうとする。

「一つ聞くが五右衛……いやスピアーノ。地面の下にいるのはお前の仲間か？」

「……はい？」

ティアナはすぐさま自身とスピアーノの丁度中間地点の地面に銃口を向け、自慢の魔弾を撃ち出す。

その瞬間、地面の下から人影が飛び出してきた。

「嘘っ！　何でばれたの！？」

それは水色の髪に体に完璧にフィットしたボディスーツを纏う少女だった。

ティアナは地面から飛び出し、今は宙にいる少女に瞬時に狙いを済ませ螺旋弾の三点射撃を放つ。

だが、命中したと思った刹那、遙か空から舞い降りた人影がティア

ナの魔弾を弾き飛ばした。

「ぐっ……なかなかの威力だ。油断したな、セイン」

「そーよぉーセインちゃん。見つかっちゃったらこっそり奪い取るという私のプランＡが出来ないじゃない」

「トーレ姉！！　クア姉！！」

夜はまだ終わりそうにない。

空から舞い降りたのは二人組。

長身で紫色の短髪の女と茶髪のお下げで眼鏡の女。

そのどちらも水色髪の少女と同じボディスーツを纏っている。

ティアナは今の攻防で相手の大体の実力を予測した。

名前は……会話から察するに水色髪の少女がセイン、短髪がトーレ姉、茶髪がクア姉と言った所か。

見たところ「聖王の涙」を狙っているがスピアーノの仲間ではなさ

そうだ……壁際で呆けている奴を見る限りは。

警戒をしつつも更に深く思考を巡らし、どうすれば最善かを考える。

そしてスピアーノにさっきと同じ質問を繰り返した。

「スピアーノ……もう一度聞くぞ。奴らはお前の仲間か？」

「ち、違いますっ！　私は単独ですって。それにいくら私が女好きだからだってあのボディスーツはちょっと……」

「そうか……ならば協力しろ。そうすれば逃がしてやらない事もない。あと、そんな事は聞いてない」

即座に否定するスピアーノにティアナは掛けていたバインドを解き、共闘を持ちかける。

スピアーノはしきりに頷き、ここに傭兵と泥棒の最強？タッグが完成した。

「あーもう。二人とも、あちらさんはやる気みたいですわよ。ここはプランBで行きますわ！　即ち、ボコして奪い取れ大作戦開始～。プランBのBは「ボコボコにして簀巻きでポイッ！」のBですわ～！！」

ちなみにプランAのAは「あれ？　無いぞ……何処いった？」のA

である。
それはともかく、どうやら相手も強行手段に出たようだ。
ここは逃げるかべきか、それとも迎え撃つべきか……選択肢は二つ。
「当然……迎え撃つ」
「あっ、やっぱりね……はぁ、逃げ出したい」
いきなりやる気の削がれる声を出したスピアーノを尻目にティアナは戦闘を開始した。
「ＩＳ『ライドインパルス』……はあぁあぁーーー！！」
そんな言葉と共に短髪の女――トーレのスピードが急激に増し、突撃を敢行してきた。
狭いながらも空間をフルに利用し、急速旋回や反転を駆使して肉薄してくる。
高速で移動し、的を絞り込ませない心算なのだろう。
だが、それが通用するのは並の射撃魔導師までだ。
今、此処にいるのは並などを遥かに超越した「凄腕」の銃使い（ガンスリンガー）。

「確かに速い……だが見えない訳ではない。そこだっ！！」

驚異的な動体視力によって動きを読み、すかさず予測射撃を行うティアナ。

放たれた弾丸はまるで吸い寄せられるかのようにトーレに命中する。

「くっ……やるな。なるほど、どうやら並の奴ではないようだ……ならばそれに合わせるまでの事」

（なっ！　更にスピードが上がった！？）

先ほどとは比較にならないほどのスピードで高速戦闘を仕掛けるトーレ。

さしものティアナも音速に迫るほどのスピードは捌ききれず何度か攻撃が掠ってしまう。

頬に流れる血を手で拭い、射殺すかのような目でトーレを睨む。

そして……

「「はぁぁあぁぁーーー！！」」

どちらからともなく再度激突した。

一方、スピアーノとは言うと。

「……もしかして弱い？」

セインに圧倒されていた。

「戦闘は得意じゃないんです。だから逃げたいって言ったのに……シクシク」

「なんか可哀想になってきた……ねえ、古の結晶渡してくれたら帰るから渡してくんない？」

敵からの魅力的な提案に一瞬頷きかけるが思いとどまるスピアーノ。

ここで渡したら天下の大泥棒の名に傷を付ける事になる。

それだけは絶対に嫌だったからだ。

昔、自分の前世が泥棒だと理解し始めた頃のスピアーノは非常にナーバスな状態だった。

しかし、それはそうだろう。

誰だって自分の前世が悪党だったと記憶付きで見せ付けられたら嫌になるに決まっている。

それは断片的な記憶だったが己が悪事を働く姿を夢に見るのは相当に苦痛であり、トラウマとなっていたほどだ。

スピアーノが管理局員を目指したのもこれが原因である。

だが、次々と開いていく記憶のピースについにスピアーノは気付いてしまった。

天下の大泥棒、石川五右衛門の真意。

圧政をしく豊臣から金や食料を盗み、貧しい人々に分け与える義賊の心に。

そうしてスピアーノは怪盗ラパンとなった。

まあ、初めて盗みを働いた時のスリルが忘れられず、ついつい余計なものまで盗むようになり、今では立派な財宝コレクターになったのはご愛嬌ではあるが。

「……渡せない……これは渡せない！　私が私であるためにも「聖王の涙」は絶対に渡せない！」

「そっか……じゃあ腕尽くで。……ん？　「聖王の涙」……？
レリックじゃなくて？」

なんか致命的な間違いに気付いたセインは確認のため、トーレの後方支援をしているクア姉ことクアットロに声を掛ける。

「ねぇ、クア姉ー。ちょっと聞いていい？」

「何なんですの……あの小娘。私のサポートを受けたトーレ姉様の動きに付いていってるなんて……本当に人間？　まさか私たちと同じ……」

全く聞こえてないようだ。

今度は心持ち大きな声で再び声を掛ける。

「クーアー姉ー。無視しないで聞いてー」

「何ですのセインちゃん？　私は今忙しいんですの。また後で……」

ようやくセインが呼んでる事に気付いたクアットロは不機嫌なのを隠さずにセインに応えた。

「こいつが持ってるの「聖王の涙」なんだって……クア姉が言ってたレリックじゃないの？」

「はぁ？　……「聖王の涙」？　あれ……おかしいですわね？　確かにラパンの予告状に古の結晶って」

「私が予告状に書いたのは古の玉石です。古の結晶とは書いてません」

答えは簡単に出てきた。

つまりは……

「てへっ、ごっめんなさ～い」

クアットロの早とちりである。

お互いに逝く所まで逝きそうなほどに戦い合っていたティアナとトーレ。

その二人を何とか宥めた両陣営は異常なまでに疲れ果てていた。

「やるな！　ティアナ！」

ガシッ

「お前こそな！　トーレ！」

その原因である二人は何故か友情を交わらせていた。
どうやら戦いから始まる友情も存在しているらしい。
それはさておき、

「つまりは、そこの眼鏡の勘違い。そういう訳か」

ティアナがクアットロを指差し、結論を述べる。

「め、眼鏡……んんっ、私はクアットロですわ。この度は申し訳ありませんでした……えーと、ティアナさん？」

それに対しクアットロは自己紹介をしつつも素直に謝罪した。
その姿にセインは凄まじく驚愕していたが気にしないでおきたい。

どうせ帰ったらお仕置きされるのだから。

「ティアナ・ランスター。フリーの傭兵だ。で、こっちは……」

「時空管理局本局所属のスピアーノ・マツダ准尉です。趣味で怪盗やってます」

「トーレだ」

「セインさんだよ。よろしくね二人とも」

お互いに自己紹介を済ませ、改めてクアットロが話を纏める。

「本当に申し訳なかったですわね、お二人さん。今日はここらでお暇させていただきます」

どうやらお別れのようだ。

長いこと戦っていたように感じるが、今の時刻は午前零時直前。

まだ二時間も経っていなかった。

「そうか。トーレ、お前と決着を着けられなかったのは残念だが仕方あるまい」

「こちらもだ。再び戦う日を楽しみにしているぞ、ティアナ」

なんかもう暑苦しい二人だった。

そして、何故かスピアーノはセインに頭を撫でられている。

「あっ、そうそう。レリックと呼ばれるロストロギアを見つけたら御一報下さいませ。我々が探しているものですわ」

「レリック？　ああ、分かった。連絡先は……」

ティアナはクアットロ達と連絡先を交換する後ろでスピアーノは何か考え込んでいる。

それが気になったクアットロはスピアーノに聞いてみた。

「どうかしたんですの？」

「いえ、レリックは確か第一級捜索指定のロストロギアだったはずです。それを探して貴方達は何をする心算なんですか？　事と次第によっては貴方達を……」

一応は管理局員であるスピアーノはクアットロに問い詰める。

だが、クアットロはにっこりと笑みを浮かべ、

「ご趣味の事……匿名で管理局にタレこみますわよ」

「調子こいてすいませんでしたぁ」

しっかりと脅しを掛けてきた。

スピアーノ、哀れなり。

今度こそ別れの時間になり、それではと空に浮かび飛び去っていくトーレとクアットロ。

じゃあねと地面に沈むように消えたセイン。

再び二人に戻ったティアナとスピアーノは路地裏から出て国立博物館に向けて歩き出した。

で、結局どうなったかというと……

「スピアーノ准尉、心配したんですよ。何処にいたのですか？　……

……それは！？」

国立博物館でスピアーノを待っていたジェニーは彼女の手にある「聖王の涙」に目を見開き驚愕する。

ジェニーは結局、自身でラパンを見つけることが出来ず、応援と検問の手配に博物館に戻ってきたのが外に出て一時間してからだった。

バラバラに捜索していた部下は連絡を受けて次々に戻ってきたがスピアーノだけが戻らず心配していたのである。

「「聖王の涙」……貴方が取り戻したのですね！　さすがは本局の魔導師。何も出来ないどこぞの傭兵とは違います！」

何も出来なかったのはお前達だろうとティアナは思うが言葉にせず無口を貫いた。

それをジェニー達は悔しくて何も言えないのだと勝手に決めつけ、本局魔導師の素晴らしさを延々と語っている。

「ジェニー一尉、違います。これは私が取り返したのではありません」

スピアーノの突然の告白にジェニー達は驚いた。

その内容は自身の手柄を否定する言葉だったからである。

「スピアーノ准尉、貴方でなければ一体誰が取り返したというのです？」

「ティアナさんです。私は後で合流しただけで何もやってません」

スピアーノの凛とした声に嘘ではないと悟ったジェニーはただ、そうですか、と呟きティアナに向き直る。

まあ、八割くらい嘘なのではあるが、言わないのが華であろう。

「「聖王の涙」を取り返して頂き、ありがとうございます。それで……ラパンは？」

急に態度が変わったジェニーにいぶかしむティアナだったが今は気にせず答えた。

「逃げたよ。私の仕事はそれを守ることだ。ラパンを捕まえることは仕事に含まれていない。それに……それは貴方達の仕事だろう。違いますか？」

「いえ、その通りです。その様な形で決着が付くなど私は納得しません。いつかきっと私の手でラパンを捕まえて見せます！！」

なんか自分の世界に入ったジェニーを尻目にティアナはそっとスピアーノの方に視線を向ける。

「あはっ、あははっ……はぁ」

そこには案の定、乾いた笑いを見せるスピアーノの姿があったそうな。

第七話　遭遇（後書き）

これで怪盗ラパン編は終了です。

次回はついにあのキャラが登場します。

お楽しみに！！

第八話　烏の弟子？（前書き）

ティアナのアジトに突撃する青い影……その正体は！？

ようやくキャラが集まってきた感じです。

第八話　烏の弟子？

「弟子にして下さい！！」

まだ幼さが残るものの力強い声を上げる青い髪の少女は「太陽の烏（ソル レイブン）」ことティアナ・ランスターを目の前にそんな事を宣言した。

此処は廃棄都市群に存在するティアナのアジト。

そのアジトの三階、応接室の床に直に正座し、両手を突き、額を擦り付けるように平伏するこの姿。

人、これを土下座という。

そう、いきなりアジトに入ってきた少女はティアナを前にするなり、その言葉と共に土下座をかましたのである。

この状況はいったい何なんだろうか。

された側のティアナとスピアーノは混乱の極致にあった。

「……とりあえず頭を上げろ」

何時までもこうされたら、まるで私がさせているようだ、と思ったティアナは少女に土下座を止めるよう言う。

だが、この少女はそれを別の意味で受け取ったようだった。

「ありがとうございます師匠！　私、がんばります！」

「スピアーノ……撃って良いか？」

頭を上げろというティアナの言葉を了承の意と捉えた少女は早速ティアナを師匠と呼ぶ。

勿論、ティアナはそんな事を許可した覚えは一切、微塵も、これぽっちも無い。

「そうですね、いいんじゃないですか」

なんか面倒だと感じたスピアーノはとりあえず許可を出した。

欠伸をしながらソファに寝そべるスピアーノの許しを得たことで早速デバイスを展開し、銃口を少女に向けるティアナ。

だが、ここでも少女はこの行為を別の意味で捉えた。

「あっ、修行ですね……分かります！」

何というポジティブシンキング！！

どうやら既に少女の中ではティアナは完全に師匠キャラとして登録されているようだった。

「違う！　ゼフィロス！！　１０８部隊のギンガ・ナカジマに連絡しろ！　今、すぐにだ！」

ティアナは相棒のゼフィロスに檄を飛ばす。

ティアナがすでにキレかかっていると感じたゼフィロスは素直に従うことにした。

『分かりました。なんて伝えます？』

「今すぐここに来て、お前の妹を連れて帰れ！　と、そう伝えろ！」

「あっ、ギン姉来るんだ！　久しぶりだなぁ」

この青い髪の少女の名前はスバル・ナカジマ。

管理局陸士１０８部隊部隊長ゲンヤ・ナカジマの娘であり、最近「蒼き流星」なんて厨二っぽい二つ名までついたギンガ・ナカジマの妹である。

事の始まりは二時間前に遡る。

あの国立博物館の一件から一ヶ月程経過したある日の事。

別の仕事が舞い込んだティアナは颯爽と出かけ、殲滅し、そして帰路に着いていた。

「物足りない。ゼフィロス、次の仕事は？」

最近、ティアナが戦闘狂に思えてきたゼフィロスはスケジュールを確認し、ティアナの質問に答えを返す。

『無いですよ、今ので最後です。あとは二週間後の管理局との合同演習まで何もありません。また休暇ですね』

そうか……と、明らかに落ち込むティアナにゼフィロスは休暇って普通は嬉しい物なのではと疑問に思ったが聞かない事にした。

この一に仕事、二に仕事、三四は訓練で、五に仕事という仕事人間のティアナに休暇は嬉しいですか？　と聞いたところで、絶対にＮＯ！　と返ってくるのが落ちである。

ちなみに前マスターのティーダは毎回休暇となれば嬉しさ全開で愛しの妹であるティアナに朝から構ってと突撃し、罵声と魔弾を喰ら

って寝込むという阿呆な休暇の過ごし方をしていた。

その為、ゼフィロスもそれが普通だと思っていたのだが、そんなものはティアナがマスターになった瞬間に崩れさったのは言うまでもない。

「また前回みたいに大きな仕事が来ればいいが……来なかった場合はどうするべきか」

アジトに到着し、ティアナは三階にある応接室に向けて足を運ぶ。

ティアナのアジトは一階が車庫、二階が武器庫とデバイス整備室、三階が書斎と応接室、四階が生活スペースとなっており、普段は応接室に居ることが多かった。

『これを機に何か前衛的な趣味を持ったらどうですか？　ショッピングとか』

「断る」

即答だった。

一分の隙間も無いほどに。

「私の心は常在戦場だ。そんなものに現を抜かしている暇はない」

時間的な暇ならこれから二週間もありますけどね、とゼフィロスは言いかけたが結局は飲み込んだ。

どう言っても今のティアナには無意味だからである。

そんな会話をしながらティアナは応接室の扉を開けると、

「遅かったですね。あんまり遅いんで寝てました。待ちくたびれましたよティアナさん」

スピアーノがソファに寝転がっていた。

ティアナはそれを確認するや否や、すぐさまヤタガラスを展開し魔弾を放つ。

その魔弾はスピアーノの顔を掠め壁に命中した。

「って、あぶなっ！　いきなり何するんですか！！　当たったら非道いじゃないですか！」

「ちっ、いきなり過ぎて手元が狂った。そこを動くな……今度はきっちり当ててやる」

「やめてください！　冗談です！　さっき来たばかりです！」

「お前がここにいること自体が私の撃つ理由だ。そもそもどうやって入った！？　侵入者殲滅用の罠が仕掛けてあっただろう？」

侵入者捕縛用ではなく殲滅用というのがミソだ。

危険度が段違いである。

「ふふん。私が誰だか忘れましたかティアナさん。私は天下の大泥棒、石川五右……いえ、怪盗ラパンですよ。この程度のトラップなど私に掛かればちょちょいのちょいです」

「ちっ、今度はもっと凶悪なのを作るか……それで何の用だ？」

「うっ……まあ、お願いがあって来たんですけど。その……驚かないで下さいね」

「何だ早く言え。そして帰れ」

情け容赦ないにも程がある。

もう少し優しくしてくれても……と、スピアーノは顔に出さずに思った。

まあ、無駄なのだが。

スピアーノはしばし逡巡していたが決心が付いたようで、凛とはっきりした声で告げた。

「雇って下さい」

「……は？」

「だから……雇って下さい」

ティアナは、何言ってるんだこいつ……という目をスピアーノに向けた。

それもそのはずスピアーノは歴とした管理局員？　のはずである。

「お前、管理局員だろう。仕事はどうした？」

「辞めました。ジェニーさんがあの一件以来、ウザいぐらいにあったやる気が超ウザいくらいにまで跳ね上がりましてね。奴はとんでもない物を盗んでいきました……私の心です！！　とか、休んでいる暇はないですよスピアーノ准尉、出動です！！　なんて言って、毎日毎日引っ張り回されて……怪盗する暇が全く無くなったんですよぉ」

ラパン逮捕に情熱を燃やすジェニー・ガーター一等空尉を更に燃え上がらせる結果になった先の国立博物館事件以来、スピアーノはほぼ毎日、ジェニーに連れ回され捜査を行っていた。

だが、残念ながらラパンは現れず［注：後ろにいます］、疲労だけ

が溜まり、ついにスピアーノは先日倒れてしまったのだ。
それに対し、情けないやら、あの傭兵を見習いなさいやら、過労で倒れている時にまで言われ、ついに我慢の限界を迎えたスピアーノは復帰後、即座にジェニーに辞職願いを叩きつけたのである。

「と、言うわけで雇って下さい。何でもしますから。私が怪盗するための隠れ蓑になって下さい」

「却下だ。帰れ」

情け容赦なか……なくはない。

そんな理由で雇ってくれと言われても断るのは当然の事である。

『すみませんがスピアーノさん。一つ聞きたいことがあります』

「はい？　何でしょう？」

『料理……できますか？』

さっきから会話に入ってこなかったゼフィロスが急にそんな事を言ってきた。

「はぁ、出来ますけど……」

『掃除、洗濯はどうですか？』

「出来ますよ。まだ１４ですけど一人暮らしですから」

ゼフィロスからの質問に是と答えるスピアーノ。

ティアナはいきなりの展開に付いて行けず困惑している。

「ゼフィロス、いきなり何を言いだ……」

『採用です』

「「……は？」」

二人の声が重なった。

どうやら妙な質問に困惑していたのはティアナだけではないようだ。

『ですから採用です。おめでとうございますスピアーノさん』

「あー、ありがとうございま……す？」

「おいゼフィロス……何を勝手に決めている！？　それに何だ、今の質問は」

『何って……毎日毎日、固形の栄養ブロックか戦闘糧食（レーション）しか食べず、

洗濯物は貯めに貯めてから丸ごとクリーニングに出し、掃除は目に付いた大きなゴミしか取らないマスターに対しての当てつけですが……何か？』

ゼフィロスはティアナの相棒を自負するインテリジェントデバイスである。

その彼がマスターであるティアナの体の心配をして何がいけないと言うのだろうか。

そもそも、まだ兄ティーダが存命だった頃はティアナも一応は家事をやっていたのだ。

だが、その兄が亡くなって、一人身になった途端にこのようになってしまった。

ゼフィロスは昔から散々、生活を改めるよう言ってきたのだが、現在に至るまでティアナは全く聞く耳を持たなかった。

そこで雇って欲しいというスピアーノに対し家事が出来るかと質問し、これがティアナの為だと思い採用を決定したのである。

「当てつけって……必要な栄養はきちんと取ってる。洗濯だってプロにやって貰えば良いし、掃除は最低限汚れが見えなければ良いだろう。だから却下だ却下」

ティアナの反撃。

だが言ってる事は年頃の女性にしてはあまりにも酷い内容だ。
そんな反撃で家事が出来る就職希望者を目の前にしたゼフィロスが納得するはずも無く、

『こういうマスターですので宜しくお願いしますね。スピアーノさん』

「はい、分かりました」

「おい！　私の話を聞け！！」

徹底的にティアナの意見が無視された結果、渋々ながらティアナもスピアーノの採用を認めたのだった。

そしてその後、スピアーノが作ったランチを食べ、これから如何するかをコーヒーでも飲みながら話そうとしたときに、

『えっ……マ、マスター！！　接触センサーに反応あり！！　エリアサーチ発動……反応、真っ直ぐこっちに向かってきます！！』

事態は急転換を迎えた。

ティアナのアジトに向かって高速で近づいてくる謎の反応。

それが敵以外の何なのであろうか。
ティアナはすぐさまバリアジャケットを展開し、戦闘体勢を整える。
スピアーノはすぐさま窓を開き、飛んで逃げようとした。
計5発の魔弾がスピアーノの頬を掠めたので結局止めたが。
そんな事をしている内に反応はアジトの下まで辿り着いていた。

「ゼフィロス、罠を作動させろ！」

『罠は全て、そこのスピアーノさんに解除されてしまって動きません！』

「さて、帰りますか……じゃあ、また明日にでも」

「ええい、今日は厄日か！？　って、逃がすかスピアーノ！　お前は囮になれ！　その間に私はお前ごと敵を撃つ！」

「嫌ですよそんなの！　あっ、やめてっ、撃たないで……冗談、冗談ですよ」

『皆さん……反応、もうここの扉の前まで来てますよ』

そんな言葉が聞こえた直後、扉は勢いよく開かれ、

「弟子にしてください！！」

そんな言葉と共に青い影がかなりの低姿勢で入ってきた。

「「……は？」」

「弟子にしてください！！」

「「いや、あの……」」

「お願いします。弟子にしてください！！」

こうしてようやく冒頭に繋がった。

第八話　烏の弟子？（後書き）

スバル登場の回でした。

次回は小狸が出ます。

キャラ設定１（前書き）

取り敢えずこれまでの主な登場人物のキャラ設定です。

多少、ネタバレ要素やおいおいそれはやりすぎだろって要素も含んでますが……

気にしないで！！

キャラ設定１

ティアナ・ランスター　（１５）

本作の主人公。

「太陽の烏（ソル　レイブン）」を名乗る凄腕の傭兵。

容姿はＳｔｒｉｋｅｒＳ本編と殆ど変わらないが、髪型がツインテールから肩に掛かるくらいのセミロングになっている。

実は前世の記憶を持っており、六歳ぐらい頃にその記憶が覚醒した。

前世は戦国最強の鉄砲傭兵集団である雑賀衆の頭領、「煙鳥翔華」雑賀孫市。

性格は幼少の頃は年相応のものだったが、記憶が覚醒してからは誇り高く合理的でリアリストなものに変化している。

その一方で家族や仲間と言うものを非常に大切にしており、心を許した者に対しては多少は甘く接する。

その為か兄の死を罵った相手に対し、激情に駆られた事もある。

使用するデバイスは兄の形見であるデザートイーグル型のインテリジェントデバイス「ゼフィロス」と４４マグナム型の非人格式アームドデバイス「ヤタガラス」の二挺。

戦闘は高圧縮魔力弾や炎熱変換した魔力爆弾等の圧倒的な火力で殲滅する事を得意としており、デバイスを変形させる事であらゆる状況に対応する等、柔軟性も兼ね備えている。

欠点という欠点はないが、魔力の絶対量が少ないのが弱点みたいなもの。

一応、探知系や結界も不得意だが、そこはゼフィロスがカバーしているので本人は気にしていない。

スピアーノ・マツダ　（１４）

世間を騒がせる義賊、怪盗ラパンの正体の少女。

かつては時空管理局本局でラパン専従捜査部隊の捜査官だったが、今は管理局を辞めて傭兵としてティアナに雇われている。

容姿は黒髪ポニーテールで背が高く、スレンダーな体型。

身長が１６０ｃｍ近くもあるが発育がいまいちなのが悩みの種である。

年齢は１４ながら自動車運転免許を持っており、白いＦＩＡＴ５００ＳＰＯＲＴをミッド仕様に魔改造し、愛車にしている。

ティアナと同じく前世の記憶を持ち、五歳ぐらいから記憶が徐々に

覚醒していった。

前世は天下の大泥棒、「桜花絶景」石川五右衛門。

幼少の頃はその前世の記憶の所為で非常にナーバスな状態であり、それを払拭するために管理局員になった経歴を持つ。

だが、記憶の覚醒が進むと共に義賊として心に目覚め、管理局員と言う顔の裏で怪盗ラパンとして暗躍するに至った。

性格は見栄っ張りだが臆病な小心者で、常に「逃げ」の思考をしている。

君子、危うきに近寄らずが信条だが義賊としての誇りを持ち、その誇りが穢れるのを何よりも嫌う。

使用デバイスは局員用の汎用デバイスと個人所有の煙管型ストレージデバイスの二つだったが、局員用デバイスは辞めるときに返還した為、今は煙管型ストレージデバイスのみを使用している。

戦闘はそれ自体が不得意だが、その反面として危機感知や気配察知に秀でており、魔法は結界や転移などのサポート系を得意とする。

また、特異なスキルとして伊賀忍術を修得しており、盗みの時や止むを得ない戦闘の時に使用している。

名前の由来はスズキ・アルトラパンと、そのＯＥＭ車であるマツダ・スピアーノから。

スバル・ナカジマ（１４）

ティアナの弟子を名乗る少女。

ゲンヤ・ナカジマの娘でギンガ・ナカジマの妹である。

容姿はＳｔｒｉｋｅｒＳ本編とほぼ変わりない。

四年前の空港火災に巻き込まれ、絶体絶命の所をティアナに救われた経験を持つ。

その為、傭兵であるティアナに憧れを抱いており、家族の反対を押し切って同じ傭兵になる道を選んだ。

その事について姉のギンガと大喧嘩し、無断で右用のリボルバーナックルを持ち出したうえ家を飛び出している。

結局、そのまま傭兵ギルドに入って一人暮らしを始めたので約二年間家出した状態である。

性格は何事も前向きで明るく、日々を感性で生きているような感じ。

使用するデバイスはリボルバーナックルと引き換えに手に入れた、手甲型非人格寄生式アームドデバイス「アーマー・ピアッシング・シェルブリット」。

セットアップすると右腕自体がデバイスと融合し、一体となる。

前腕部にあるジェットノズルから魔力を噴出させ拳速を加速させるのが最大の特徴である。

また、魔法をタイムラグ無く反射的に使用する事が可能となり、障壁破壊効果がオートで発動しているので格闘戦で無類の強さを発揮する。

戦闘は格闘による接近戦を得意とし、自身の身体能力の高さと潜在する才能、そして上記のデバイスの性能に完全に頼りきったものだが高い水準を誇っている。

だが、その実力に経験が伴っていない為、経験豊富な格上相手ではその猪突猛進な性格を見極められ策略等に陥りやすいと言う欠点を持つ。

また、魔法は身体強化と魔力放出しか覚えておらず、遠距離や空中にいる相手に対する攻撃手段を持たない。

当然ながらウイングロードも使用不可能である。

伊達政宗　（１８）

時空管理局本局執務官を務める青年。

高い魔力と魔力変換資質「雷電」を持ち、「管理局の蒼い稲妻」や「独眼竜」などの異名をとるエリート魔導師。

容姿は戦国ＢＡＳＡＲＡの伊達政宗とほぼ同じである。

第９７管理外世界「地球」の極東の国「日本」出身で代々と仙台藩主を務めた伊達家の子孫であり、老舗和菓子メーカー「竹雀屋」の御曹司。

ティアナと同じく前世の記憶を持っており、物心が付くぐらいに記憶が覚醒した。

前世の名は「奥州筆頭」伊達政宗。

ようするに自分の子孫に生まれ変わったという事。

性格は傲岸不遜で大胆不敵だが、前世で老年まで生きた為か少しは落ち着いた……はずである。

使用するデバイスは非人格式日本刀型アームドデバイス「アラストル」。

これは通常は一刀だが、デバイスの特性として「同一分化」という機能を持ち、同型・同性能の複製を最大六本まで増やすことができるというもの。

それにより前世の戦闘技能をフルに発揮することができ、六爪流の使用も可能となっている。

他にも砲撃魔法や広域魔法などを使用できるが何故か攻撃一辺倒であり防御系は不得手している。

レジアス・ゲイズ　（５３）

時空管理局ミッドチルダ地上本部で首都防衛長官を務める豪傑。

階級は中将であるが地上本部に於ける最大の発言力と権威を持ち、実質は地上本部のトップとして扱われている。

昔から武闘派で通っており、実際に若い頃は「ミッドの赤いサイクロン」と呼ばれて剛腕一本で数々の犯罪者を地に伏せてきた程である。

その後、自身に限界を感じ第一線を引退、後進の育成と地上の地位向上の為に将官を目指すようになった。

親友であるゼスト・グランガイツとはこの頃に出会っており、互いの理想を語り合った末、〇る大捜査線の〇島刑事と室〇管理官のような関係となっている。

地上の人手不足に苦心し、ゼストと共に対策に当たるも中々に芽が出ず、しだいに黒い噂が流れるようになった。

当初は管理局の力のみで事を成そうとしたが、親友の死を受けて考えを一新し、黒い噂を払拭するように精力的に働きかけ傭兵ギルドとの協力体制を作るに至る。

ティアナとはティーダが部下だった時に知り合っており、ティーダが亡くなった時に彼女を引き取るつもりだった。

結局、それは拒否されたがその後も気には掛けており、今はティアナの良き理解者兼後援者となっている。
ティアナの前世の事を知る、数少ない一人でもある。

ギンガ・ナカジマ　（１６）
時空管理局地上本部陸士１０８部隊に所属する少女。
「蒼き流星」という痛い二つ名を持つ陸戦魔導師。
ゲンヤ・ナカジマの娘でスバル・ナカジマの姉である。
容姿はＳｔｒｉｋｅｒＳ本編と変わりなし。

かつての空港火災に巻き込まれ、逸れたスバルを探す為に燃え盛る空港内を捜索するも自身が危険に陥り、あわやの所をフェイト・Ｔ・ハラオウンに救出される。

だが、降ろされた場所が完全に安全確認された場所ではなかった為、自主避難をしようとした所をティアナが発見し、無事にスバルと共にゲンヤの所に戻った。

その為、フェイトとティアナに感謝と尊敬の念を抱いているが、フェイトは少しドジっ子だなと心の中では思っている。

性格は礼儀正しく親しみ易いがさりげなく失礼な物言いを放つ癖が

ある。

使用するデバイスは母の形見である左用リボルバーナックルと魔力駆動のローラーブーツ。

戦闘はスバルと同じく格闘による接近戦を得意とし、ローラーを使った特殊格闘術「シューティング・アーツ」を使用する。

スバルとは違い母親に直に教わった為、遠距離や空中の敵への対処や戦法、ウイングロードも使用できる。

ゲンヤ・ナカジマ　（３８）

時空管理局地上本部陸士１０８部隊の部隊長を務めるベテラン局員。

ギンガ・ナカジマとスバル・ナカジマの父親である。

容姿はＳｔｒｉｋｅｒＳ本編と変わっていないが、環境の変化の為か少し哀愁が漂っている。

レジアス派に属しているので傭兵には協力的だが、出来れば自分たちの手で事件を解決したいと考えており、その手足となる１０８部隊は錬度も士気も高く、その迅速な部隊運用には定評がある。

ティアナとは空港火災の時にティアナが指揮下に入ったのが最初の出会いで、その後、被災した娘二人を救って貰ったのをきっかけに度々と依頼事をするようになった。

現在は家出したスバルを見つけ次第、家に戻すよう依頼している。
他にも八神はやてとは師匠・弟子の関係であり、はやてに地上における人手不足の辛さと部隊運営の基礎を教え込んだ。
はやての小狸のあだ名にちなみ、その親と言うことで周囲から狸親父呼ばわりされるようになってしまったのは本人はたいそう不服であると言う。

ジェニー・ガーター　（２２）
時空管理局本局に所属する魔導師。
階級は一等空尉で怪盗ラパン専門の捜査部隊を率いている。
容姿は緑髪のショートカットで１５０ｃｍにも満たない低身長が特徴的。
性格は公明正大で誰に対しても丁寧口調で話すが、本局魔導師らしく傭兵の事は快く思っておらず、ティアナに対し、最初は高圧的な態度をとっていた。
国立博物館事件の後では態度を改めたようで、何かと意識するようになっている。
ラパン逮捕に並々ならぬ情熱を燃やし、自分の手で捕まえる事に強

いこだわりを持つ。

キャラ設定１（後書き）

名前の横にあるのは現時点（Ｓｔｉｒｉｋｅｓ本編一年前）での年齢です。

第九話　交渉

取りあえず、何とか土下座を止めてもらったティアナ達はギンガが来るまでの間、スバルの話を聞いていた。

「それであの時ティアナさんが助けに来てくれて、それでこう言ってくれたんです。助けに来たよ……よく頑張ったね、偉いよ。もう、大丈夫だからね。安全なところまで一直線だから……って！！」

「そんな事は言ってない！　勝手に捏造するな！」

それは某エースオブエースが助けに来た平行世界の話である。

実際は倒れてくる女神像をクロツグミのチャージショットで粉々に破壊し、破片も全て撃ち落として、

「無事か……ん、どうしたスピアーノ？　何っ、ナカジマ三佐の娘だと！？　ちっ、なら無碍にはできんか。おいお前……取り敢えず私が安全なところまで連れてってやる」

といった感じだった。

所々にツンが出ているだけで結局はあんまり変わらないのは気にしてはいけない。

「それでティアナさんの超絶的に格好いい姿に見事に惚れた私は傭兵になることを決めたんです。あっ、これって運命の出会いって奴ですよね？」

「知らん！　ギンガはまだか……早くこいつを連れていってくれ」

「私の運命の人がティアだなんて……嬉しすぎるーー！！」

「勝手に人の名前を略すな！」

「えー、年も大体同じぐらいなんだからいいじゃない別に」

「弟子にしてくれって頼んできた者の言う台詞じゃないぞ……それ」

こうしてティアナの愛称が決定した。

そしてスピアーノ達がそんな面白い事を聞き逃す筈もなく……

「まあまあ。ティアさんってば、そんなに照れなくてもいいじゃないですか。可愛いでしょ？　自分を慕ってくれる後輩」

『そうですよティアさ……いえマスター』

さりげなくどんどんと広まっていくティアナの愛称。

だが、悲劇はこれで終わらなかった。

「じゃあ、スピアーノちゃんはスッピーで。ゼフィロスさんは片翼の天使って感じかな」

「スッピー……」

『片翼の天使……って、何ですかそれ！？』

「よかったなスッピー、セフィロス……あとでお仕置きだ。覚えておけ」

『「ひぃいいいぃぃーーー！！」』

完全に墓穴を掘ったスピアーノ達だった。

悲劇に悲劇を呼んだ愛称騒ぎから三十分ほど経った頃、控えめなノックが応接室に響いた。

「ギンガです、失礼します」

声の主はギンガのようだ。

どうやら到着したようである。

だが、聞こえた声は一つではなかった。

「はぁー、ここがあの太陽（ソル）の烏（レイブン）の事務所かいなぁ？　えらく辺鄙な所に住んでるんやなぁ」

扉が開かれ、現れたのは二人の少女だった。

スバルよりも若干薄めの蒼髪の少女はギンガ。

そしてもう一人は、茶髪掛かった黒髪のショートヘアで関西弁を喋る少女だ。

第一印象は小狸ってな感じである。

「お久しぶりです、ティアナさん。以前の依頼の件ではご迷惑をお掛けしました」

「気にするな。独眼竜との模擬戦も楽しかったからな。ところでこちらの御仁を紹介してくれないか？」

ティアナは興味深くほぇーと応接室内を見回している少女に視線を向けた。

「あっ、この方は本局所属の」

「ん、ええでギンガ。自分の事は自分で言うさかい。んっんっ……初めまして。本局所属特別捜査官八神はやて二等陸佐です。あの高名な太陽(ソル)の烏(レイブン)さんに会えるなんて光栄ですわ」

そう言ってはやてはティアナに握手を求めた。

ティアナは本局魔導師ということで少し訝しんだが、結局は握手に応える。

「本によろしゅうなぁ。あんたん事を政宗君から聞いて、一遍会うてみたかったんや。あっ、ティアナって呼んでええかなぁ？」

「政宗だと？　ああ、お前が独眼竜が言っていた八神とかいう奴か。新部隊を立ち上げるという」

「そうそう、それやそれ」

扉前で話し込んでいるティアナとはやてを置いてギンガは部屋の奥に入り、スバルに声をかけた。

実に二年振りに妹に再会したギンガは溢れ出る涙を抑えることが出来ず、ボロボロと泣いている。

「スバル……ああ、スバル。今までどこにいたの？　あなたが家出するなんて……よっぽど思い詰めていたのね。お姉ちゃんが悪かったわ。あなたが傭兵になるって言い出して、あなたの決意も知らずに反対してごめんなさい。でも、お姉ちゃん心配だったのよ。傭兵は安全な職業だとは言えないし。勿論、お父さんも心配しているわ。だから、どうか家に帰ってきて。ねえ、スバル……」

「それでね、怪盗ラパンと相対したティアはこう言うわけ。そこまでだ！　この私の目の青い内は盗みなんかさせない！　神妙に御縄に付け！　ってね。それに対しラパンはこう言うの。くっ、流石にこの俺も天下の太陽の烏（ソルレイブン）が相手じゃ歯がたたねぇ。さあ、煮るなり焼くなり好きにしなぁ。だがな、これだけは言っておくぜ。この俺は捕まったが、例え砂浜の砂が無くなったとしてもこの世からは盗人は、決して無くならない……あーはっはっはっ！！　そう、高らかに笑い続けるラパンに対し……」

スバルはスピアーノに先日の博物館事件におけるティアナの武勇伝を話していた。

無論ながら、これはニュースでその事件を知ったスバルの妄想武勇伝なのは言うまでもない事である。

真相を知るスピアーノは乾いた笑いを交えながらそれを聞いていた。

そして健気に妹に語りかけるギンガはその妹に完全に無視されている。

ギンガ、哀れなり。

「で、ティアは……あっ、ギン姉ぇ、久しぶりー」

ティアナの話をするのに夢中になっていたスバルはここでようやく姉ギンガの存在に気付いた。

ちなみにスバルの妄想武勇伝は「聖王の涙」を強奪せんとする謎の集団の攻撃からラパンがティアナを庇い死んでしまうという所で止められた為、スピアーノが、

「私は死んでしまうのですか！？　納得出来ません！　そんな事する位なら逃げます！」

と、かなりの大暴露をしていたが幸いなことに誰も聞いていなかった。

「スバル……ああ、こんなに逞しくなって。もう、私はあなたがやりたいことに反対なんてしないわ。お姉ちゃんが応援してあげる。だから家に……」

「本当！？　じゃあ私、ティアの所で住み込みで働きたい！　ティアの弟子になるの！」

「そう。じゃあ、ティアナさんにお願いして……ん、住み込み？」

「うん、住み込み」

それを聞いた瞬間、ギンガは真っ白になって石化した。

ギンガ、つくづく哀れなり。

「何をしているんだお前達は？　住み込みがどうとか聞こえたが」

はやてと話し込んでいたティアナがギンガ達のいるソファ前まで戻ってきた。

無論、はやても一緒である。

ちらちらと聞こえてきたギンガ達の会話がとても気になったのだ。

だが、ギンガは何故か真っ白になって固まっており、とても話を聞ける状態ではないのが一目瞭然なので、ティアナはスバルに問いかけた。

「ギンガはどうしたんだ。スバル、何があった？」

「さあ？　私がティアの所で住み込みで働きたいって言ったらこうなっちゃった」

「はあ？　だからそれは却下だと」

スバルからの答えに、全く意味が分からないと訝しむティアナだったが、とりあえずスバルの要求を突っぱねる事にした。

だがその時、ギンガの目がくわっと開き、

「お願いですティアナさん！　スバルの願いを叶えてやって下さい！」

と、大声で叫んだ。

そのあまりの突然の大声にティアナとはやては驚き、ソファで眠りかけていたスピアーノは飛び起きて、

「なっ、何事ですか？　敵襲ですか？　私は逃げますよ！　言われなくてもスタコラサッサですよ！」

と慌てていたが……当然ながら無視された。

「なっ、何だギンガ……どうしたんだ急に」

「ティアナさん、スバルの願いを聞いてもらえませんか？　私はスバルがやりたい事を応援するって決めたのです。お願いします……どうかスバルをあなたの弟子にしてやって下さい」

「ギン姉……」

「ナカジマ三佐にスバルを見つけ次第、家に戻してくれと依頼を受けていたのだが……失敗だなこれは。全く、本当に似ている姉妹だよお前達は。分かったスバルを弟子にしよう。と、言っても私が教えられることはそう無いと思うのだが……たしか、住み込みでだったか」

「いえ、家には連れて帰ります。毎日通わしますから」

「ギン姉ぇ～」

こうして「蒼き流星」の妹にして「太陽の烏」の弟子、後に「拳王」と呼ばれる少女の物語が今、ここから始まったのであった。

「いや～、ええ話やったなぁ。私、こういうのに弱いんよ。よかったなぁスバルちゃん！」

無事にスバルの弟子入りが決定したところではやてが声を上げた。

「はい！ありがとうございま……えっと、どちらさんでしたっけ？」

ズゴッ！！と〇本新喜劇張りのズッコケを披露する一同。

やっていないのはボケたスバルと皆が何をしているのか全く分からない真面目なティアナだけである。

「ええわ～。ナイスボケやでスバルちゃん。これは世界を狙える逸材や！　どうや、私と一緒に世界目指さへんか？」

「えっ、遠慮しときます」

「あはは、冗談や冗談。おっと、自己紹介しとこか。私は本局所属の捜査官、八神はやてや。よろしゅうなぁ、スバルちゃん」

「はい！よろしくお願いしま……本局所属の捜査官……本局所属！？」

スバルははやての身分に驚いたようだった。

はやてはそんなスバルに驚きに合点がいったようで、スバルに落ち着くように諭した。

「ああ、びっくりさせてもうたなぁ。大丈夫やで、安心しいや。私は地上本部と傭兵との関係は知っとるからなぁ。別に傭兵には何も含みは持っとらんへんでぇ」

「そ、そうなんですか」

「そうなんや。ちょっと前にな自分らのお父さん、つまりはナカジマ三佐の部隊でお世話になってたことがあってなぁ……その時に知ったんよ。地上部隊の激務とか傭兵の事とかなぁ。いやぁ、あの時はほんまに大変やったなぁ……基本、三徹は当たり前やし下手すりゃ四徹、五徹も……」

なんか急に遠い瞳で語りだしたはやてに一同は胡乱な表情を浮かべた。

仕事大好き人間のティアナと四、五日は徹夜でも全然平気な蒼色姉妹を前にしてその思いは全く伝わってなかったのである。

「えーと、何の話やったかな……ああ、ほんであまり表だって言われへんのやけど、実は傭兵とかの事でレジアス中将のこと結構尊敬しとんねんで、私」

「えぇーーーー！？」

スバルが驚くのも無理なかった。

レジアスは本局では相当嫌われているのだ。

その原因は彼が制定した傭兵ギルド特別法の存在だ。

エリート意識が強い本局魔導師が傭兵を邪魔に思うのもあるが、特別法の中に拳銃等の小型の質量兵器の携行を許可するという記述が

あるのがその主な理由である。

基本的に管理局は質量兵器を嫌っている。

それは同じ管理局である地上本部も一緒だが、本局と地上本部では質量兵器に対する認識があまりにも違っていた。

地上本部は爆弾やミサイルなどの大量破壊兵器を危惧しているが、本局は魔法の力を使わないものは全て危険だという考えなのだ。

つまりは拳銃もミサイルも同じだと言っているのである。

その本局に所属している魔導師が、彼ら曰く「質量兵器推進派」のレジアスを尊敬しているというのは異常とも言えるだろう。

「まっ、驚くのもしゃーないか。あまり人に言いふらさんといてなぁ。まあ、あっちからすれば私なんて魔力が高いだけの理想ばっかり言ってる……世間知らずの小娘みたいなもんやし」

スバルは本当にこの人は本局魔導師かと疑問に思った。

スバルにとっての本局魔導師と言えば、変にエリート意識が高く、全く融通の利かない、頭の固い連中ばかりだと思っていたからだ。

「ナカジマ三佐のとこで地上部隊の激務と人手不足の辛さは身に染みてるつもりやけど、あちらさんは私が生まれる前からその問題に頭を抱え、悩み、そして最善でないかも知らへんが答えと結果を出

しとる。私が尊敬しとるのはそういう所や。政宗君は違うけど、なのはちゃんやフェイトちゃんは全く理解してくれへんのやけどなぁ」

「八神……お前が中将殿を尊敬している事は分かったから、そろそろ本題に入れ。ここに来た理由を私はまだ聞いてない」

はやての話にティアナがストップをかけた。

彼女としては弟子に迎えたスバルがどれだけ使えるのか確認したいので早々に客人達に帰ってもらいたいのである。

「さっき言うたやん、一遍会いたかったって。まあ、確かにそれ以外にも理由はあるんやけど……」

「えっ、そうなんですか？　私ははやてさんが伊達執務官からティアナさんの事を聞いて会いたくなったとしか聞いてないのですけど」

連れてきたギンガもはやてがティアナに一度会いたいからという理由だと思っていた。

だが、どうやらそれだけではないらしい。

「まあ、大体は分かっているが一応聞いておこう。八神、お前は私に何を望む」

「そうやな、じゃあ単刀直入に言うで。「太陽の烏（ソルレイブン）」ティアナ・ラ

ンスター。私と契約して欲しいんや……お願いします」

姿勢を正し、静かに、厳かに。

凛とした声にもティアナを見つめる瞳にも決意と誠意を宿して八神はやては告げる。

だが……

「断る」

第九話　交渉（後書き）

はやての願いをバッサリと切るティアナ。

その理由とは？

次回はマッドな博士が出たりします……お楽しみに！！

第十話　契約

「断る……と、言ったらどうする？」

ティアナはそう返した。

瞬間、場の一同に動揺が広がる。

その返答にギンガは信じられないといった目でティアナをみた。

スバルはどういった状況か分からないため困惑しているようだ。

スピアーノはティアナにとっての契約の意味を知っているため静かに天井を見ていた。

そして、肝心のはやては……

「そっか。ほんま政宗君が言った通りになったわ。一応、何でかって聞いてええ？」

はやてはこの返答を予測していたようだった。

そして、その理由を聞く。

己に何が足らないのか理解するために。

「ふむ、独眼竜……政宗からは私の事はなんと聞いている？」

質問に質問で返され、はやては少しむっとなったがそこに答えが隠されていると思い、素直に話すことにした。

「噂通りの事やで。凄腕の傭兵で、新部隊の戦力として申し分ないから、誘いたかったら誘えってな。ただ、気難しいから色々と注意点があるって教えて貰ったんやけど」

「何ですか……その注意点って？」

ティアナは静かにそれを聞いている。

ギンガは気になるのか、はやてにその注意点について催促した。

「政宗君から受けた注意点は3つや。まず、依頼と契約は違うということ。次に、力で抑えつけてはいけないということ。最後に、太陽の烏（ルイブン）は己（ソ）を最も評価する者としか契約しない。て、言うことや」

ギンガはそれを聞いてますます分からなくなった。

はやては依頼ではなくちゃんと契約と明言しているし、力で抑えつけてもいない。

最後のだって声をかけた時点で評価しているも同然ではないのか？

「八神……お前は政宗にそれを聞いたのは何時だ？」

「ついさっきやで。ナカジマ三佐に新部隊の捜査協力の件でお願いしに来たら、偶然政宗君も来ててなぁ。その時に聞いたんよ。お前、まだ戦力をＳｃｏｕｔしてるんなら、Ｖｅｒｙ Ｓｔｒｏｎｇで Ｕｓｅｆｕｌな奴を教えてやるよ、とか言うてな。そこにギンガに急に連絡が入って、その人の所に行くって言う話やんか。正に渡りに船やったから連れてきて貰ったんや」

「そうですね。伊達執務官は先日騒いだ詫びだ、って言って私の部隊に来たんですけど。偶然と言うよりはやてさんが来るって知って、急遽理由を作って来たみたいな感じがします。ほら、あの人ってそんな事で詫びてくるように見えませんし」

何気に失礼な事を言っている気がするが、ギンガはその流れに間違いはないと保証する。

「ほんでここに来るまでの間にギンガにも色々聞いたし、私自身もちょっとは噂で知っとるからなぁ。部隊の隠し札みたいな感じになって貰おうと思ったんやけど」

そこでギンガは少し違和感を感じた。

その違和感が何なのか分からないが、これが断られた理由だと直感的に悟る。

何か見落としているような気がした。

「私に断られたという訳か。政宗の言う通りだったとは、あいつは私が断るという事を予想していたという事か？」

「予想っていうほどはっきり言ってへんけどな。これから行こかー、って時に政宗君に声掛けられてん、八神、Ｍｏｒｅ ｈａｓｔｅ，ｌｅｓｓ ｓｐｅｅｄ ……だ。急ぎ過ぎたらｍｉｓｓするぜって。でも部隊設立までもう時間もないし、傭兵やったら何時仕事でいなくなるか分からへんから早い方が良いと思ったんや。まあ、案の定失敗してもうたようやけど」

「ふむ……ここまでの流れで私が何故断ったか、分かる者はいるか？」

皆、一様に黙り込む。

スピアーノはずっと天井を見ている。

おそらくははやての間違いに気付いているのだろう。

付き合いもそこそこ長いしな……前世では、とティアナは思った。

「あぁ～、分からへん！なぁ、ティアナ。教えてくれへんか……私

に何が足らんのや？」

「ティアナさん、私からもお願いします。はやてさんは他の本局の魔導師とは違います。どうか教えてもらえませんか？」

はやてとギンガの嘆願にさすがのティアナも意地悪が過ぎたかと思い始めた。

「あっー、分かった分かった。教えるからそんな目で私を見るな！」

「ほんまか！　ありがとなぁ、ティアナ！」

「ありがとうございます、ティアナさん！」

「全く……現金な奴らだ。八神、私は己を最も評価する者としか契約しないと聞いただろう。それで分からないのか？」

「えっ、それって最後の注意点やよね……うーん？」

「あっ、そういう事か……」

ここで予想外の声が上がった。

その声の主は……

「成る程……それでティアは断ったんだ」

そう、スバルである。

皆、驚愕しているが一番驚いたのはギンガだ。

「ス、スバル！？　あなた、分かったの？　脳筋のあなたが？　まさか……信じられない」

「ちょっ、それは酷すぎないギン姉ぇ～」

ギンガはさっきから酷い事ばっかり言ってるが、それがこの場にいる皆も同じ思いであった。

一番分かる訳ないと思っていた人物が真っ先に声を上げたのである。

「まあまあ、取りあえず聞いてみよか。スバルちゃん、どういうことなん？」

「あっ、はい。まずは前提として、ティアは最も自分を評価する人としか契約しない。……でしたっけ、これはいいですよね。そこで疑問なんですが……はやてさんはティアのどこを評価したんですか？」

「えっ、それは……ほら、政宗君とかギンガから凄腕の傭兵って聞いてやなぁ」

「それはその政宗って人とギン姉の評価でしょ。はやてさん自身の評価じゃ、ないじゃないですか。だからティアは断ったんですよ。ティアは己を最も評価するものと契約する。その評価が自身からではなく他人からのはやてさんじゃ契約できないってことでしょ」

ギンガはようやく感じていた違和感が分かった。

はやては確かに噂でとか、誰々に聞いたとしか言ってないのだ。

他人の評価を己の評価として扱うのも有りではあるが、百聞は一見にしかずの格言通り、己の目で見て評価するのがやっぱり確実なのである。

「あっ！？　そうか、そういう事やったんやな。でも何で私がそんなんやと分かったん？　もしかしたら自分で色々調べて、そんで来てるかもしれへんで？」

「それはな八神。お前と私は初対面だろう。色々調べようが、話を聞こうがそれらは所詮は他人の評価だ。お前が私と契約するには……まず、お前自身が私に仕事を依頼し、その結果で私を評価し、契約を持ちかけるというのが正しい道筋だ。政宗にも言われただろう、Ｍｏｒｅ　ｈａｓｔｅ，　ｌｅｓｓ　ｓｐｅｅｄ　……急がば回れとな」

「あっ、あれそういう意味やったん？　単語ならまだしも急に英文で言われても意味分からへんわ。私、最終学歴は中卒やし」

「お前……いいのかそれで」

それが答えであった。

要は近道をしようとしたから断られたのだ。

己の目でティアナの価値を判断し、そして契約を持ちかけていれば今頃は待遇について話し合っていたのかもしれない。

「そうか、急ぎ過ぎて道順間違えた訳やな。なあ、今から仕事を依頼しても無理やろか……まあ、無理やろなぁ。仕事いっぱい溜まってんやろ、ティアナ？」

「ん？　ああ、暇だな。向こう二週間ほど何もない。今なら迷子の子犬探しでも何でもやりそうなくらい暇だ」

ぽかんと呆けるはやて。

そしてようやく今の台詞が理解できたのか大笑いに笑った。

「くっくっ、あはははは……ほうかほうか。なら、仕事の頼もか……くくっ、あぁ、笑った笑った。笑いにうるさい関西人をこないに笑わせるなんて。ティアナ、そっちの才能もあるんとちゃう？」

「うるさい！　早く仕事の内容を言え！」

はやては二、三回ほど深呼吸をして、すっと目を細めた。
おそらく依頼する仕事の内容を吟味しているのだろう。
そして、はっきりと目を開きティアナを見つめる。

「私ら機動六課は特定のロストロギア関連の事件を担当する機動部隊や。担当する案件は二つ。一つはレリックちゅうロストロギアの発見・回収。もう一つは……ロストロギアは関係ないんやけど魔導師連続殺人事件の捜査や。ティアナにはこの魔導師連続殺人事件について仕事を頼みたいんよ」

「魔導師連続殺人事件……だと？」

「そう。大体五年前ぐらいからちょくちょく起こってる事件なんや。陸であんまり知られてへんのは本局が隠しとるからやな。まあ、自分らの膝元でそんな事が起こっているなんて隠したくなるのも無理は無い。市民が不安になるし、陸の良い攻め口実になるからなぁ。被害者の大体は本局魔導師やけど稀に地上の魔導師も含まれとる。こっちは高ランクの違法魔導師との戦闘による殉職って処理されとるみたいやけど」

「違法魔導師との……戦闘による……殉職」

ティアナは何か思い当たるのか深く考え込む。
はやてはそんなティアナの様子を不思議がりつつも話を続けた。

「でな、私が依頼したいのは捜査資料の整理や。今んとこ色んな部隊がバラバラに捜査している事件なんやけど、何でかうちが一括捜査することになってなぁ。ほんで各部隊の捜査資料を請求したら、てんでバラバラのごちゃごちゃになってて全く纏まってないんよ。それを整理してくれたら私らとしてもありがたいし、ティアナも捜査状況が分かって一石二鳥やろ。期限は次の仕事があるまでの二週間あれば十分やと思うけど……ええかな？」

「それは構わないが……それより機密とか大丈夫なのか？こっちもプロだから守秘義務はちゃんと守るがそれで契約するとはまだ言ってない。機密を知ったんだから絶対に契約して貰うとか言ったら……どうなるか分かってるだろうな」

ティアナは一瞬にしてヤタガラスを展開し、はやての額に銃口を押し当てた。

そのあまりの早業に誰も反応できず、近くにいたギンガとスバルは息を飲む。

だが、今にも銃爪を引きそうなティアナの雰囲気に反し、はやてはまるで宣誓するように毅然として答えた。

「そんな事は……そんな事は絶対に言わんし、言わさへん！　機密については確かに問題あるけど……これは私が言い出した事や！何か言われれば全部私が責任を取る！　ティアナに迷惑をかけるつもりは全くあらへん。契約は……そりゃ、私かてティアナには来て欲しい。けど、それを決めるのはティアナ自身や。私やない。私に

出来るんは来てくれるよう祈っとくだけやな」

「そうか……そこまで言うならその依頼を受けよう。済まなかったな八神」

そう言いつつヤタガラスを下げるティアナ。

皆……特にギンガはその遣り取りに見て、ほうと息を付いた。

状況だけ見れば時空管理局本局所属の魔導師、それも二等陸佐にティアナは銃口を押し付けていたのだ。

本来なら罪に問われてもおかしくないだけに……それだけ切羽詰まったものだったのである。

「気にしてへんから別にええで。それじゃ期待しとるからな太陽(ソル)の烏(レイブン)！」

はやては後で資料データ送るからなぁーと、ほくほくした笑顔で告げて帰っていった。

スバルも取りあえず今日は家に帰ることになり、ギンガに引きずられながら出ていく。

応接室に残っているのはティアナとスピアーノだけであった。
二人とも長い時間、沈黙を保っていたが……ふと、スピアーノが声を上げた。

「ティアナさん、魔導師連続殺人事件の事……知ってましたね？」

それは唐突な質問であった。
いや、一応は疑問形にはなっているが、スピアーノにとっては最早断定であるとティアナは感じた。

「……気づいていたのか？」

「あからさま過ぎです。八神二佐も途中で気付いたみたいですし……この分じゃギンガさんも気づいたでしょうね。まあ、スバルさんはどうか分かりませんが。今から五年前……当時話題となった航空隊所属のＡＡランク魔導師が殺害された事件。被害者の名前は確か……ティーダ・ランスター。ティアナさんのお兄さんですね？」

スピアーノは五年前、そして魔導師殺人事件というキーワードから世間で話題となったその事件を思い出し、話す。
そしてその瞬間、ティアナが僅かに動揺したのをスピアーノは感じた。

スピアーノはそのティアナの反応でそれが当たりだと確信する。

「そうよ。確かに私はその事件を知っている。私が傭兵をやっているのもその犯人を見つける為、兄さんの仇を討つ為よ。レジアス中将もそれを理解しているから私に依頼を……特に違法魔導師に関する依頼してくる。本当は止めさせたいのにね。私が止まらないのを分かってるから」

突然ティアナの口調が変わった。

それは今までのどこか冷めている大人っぽい喋り方ではなく、感情を多分に含んだ年齢相応な喋り方だ。

そしてスピアーノは理解する。

これがティアナの本来の姿。

これこそが彼女の本音なんだという事を。

「それがティアナさんの本来の口調なんですね。なーんだ、ちゃんと女の子の喋り方じゃないですか。てっきり、私は女ではない傭兵だ……とか言うのが普通だと思ってましたよ」

例え前世の記憶を持っているとしてもティアナはティアナであり雑賀衆頭領　雑賀孫市ではない。

その記憶に引っ張られる事もあるがちゃんと自己と言うものを持っているのだ。

と、言うよりは記憶がはっきりと理解できるまでは先の性格、口調が通常だったのだが、今となってはあまり表に出ることも無いため、それを知る者は本人を除いてはゼフィロスとレジアスぐらいなのである。

「うっさい！　悪かったわね！　どうせ私は女の子っぽくないですよーだ！　服なんて仕事で使う物以外はここ数年買ってないし、仲良く出かけるような友達もいない。まして浮いた話なんて一つもない。柄じゃないのよ……そう言うの」

勝手に泥沼に嵌り込んで、勝手に落ち込むティアナ。

それを見てスピアーノは苦笑する。

「（何だ、結構かわいいじゃないですか……この人）それじゃあ仕方ないですね。不本意ですが私が付き合ってあげましょう。今度の休みには買い物にでも行きませんか？」

「あんた……確か女好き……やめてっ！　近寄らないで変態！
私にそんな趣味はないわ！」

スピアーノの性癖を思い出して、すぐさま距離を取るティアナ。

素の性格が出ようが動きは凄腕の傭兵そのままだ。

「ティアナさん、それは流石の私も本気で傷付きます……って、違います！　私は純真に女友達として買い物に誘ったのにそんな反応されるなんてあんまりです！」

「えっ……そうなの？　私はてっきり」

「そりゃあ、下心が一切無いかと言われたら否定しませんが。少なくとも今のは違います。なんならスバルさんも連れて行きますか？」

「……それも良いわね。よーし、じゃあこの仕事が終わったら……ぱーっと長期休暇取って温泉でも行きますか！」

「いいですねぇ！　やっぱり温泉と言えば日本ですか？」

「そう言えば、前世の記憶の中に地元で雑賀衆の皆と湯治に行った記憶があるんだけど。なんか山奥にある温泉でね……星が凄く綺麗だったのを覚えてる」

ティアナ達の会話を聞き、ゼフィロスはふと思う。

長らく忘れていた……ティーダが居た、あの頃のティアナがようやく戻ってきた。

スピアーノという対等の友人の存在がそれを思い起こさせてくれたのだと。

やはり……やはり、彼女は前世の記憶とやらに振り回されていたのだろう。

本来はこんな風に笑える、歴とした年頃の少女なのに。

環境が、境遇が、何よりもティアナが持つ誇りとやらがそれを許さなかったのだ。

冷静で大人びた性格も仕事の時はいい。

あれはあれで常に緊張感を持てて、効率良く仕事が出来るのだから。

だが、休暇の時はこうやって友達と喋り、遊び、ゆっくりと心を休めて貰いたかった。

そう思うことは決して罪ではない筈なのだ。

しかし、運命という物もまた、決してそれを許さないものなのだが……

〈楽しい歓談中のようだが失礼するよ〉

「「！？」」

突然その声と共に、空間に通信モニターが開いた。

映り出されたのは肩で揃えた濃い紫色の髪に金色の瞳を持った男の

ようだ。

ティアナ達はすぐさま立ち上がり警戒する。

〈そんなに警戒しないでくれたまえよ。「太陽の鳥（ソル　レイブン）」ティアナ・ランスター君〉

「何者だ？」

〈私かい？　私はジェイル・スカリエッティ。まっ、しがない一端の医者兼技術者だよ。娘たちは親しみを込めてドクターと呼んでくれる〉

その名前にスピアーノは反応した。

ある界隈ではとても知られている名前だからである。

「Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティ。広域指名手配されている次元犯罪者じゃないですか！？　そんな人がティアナさんに何の用なんです！？」

〈ん？　ああ、誰かと思えば次元世界一の大泥棒、怪盗ラパン君じゃないか。何って依頼だよ依頼。必要だから傭兵に仕事を依頼するのは誰にでもある権利さ。無論、犯罪者にもね。それに君だって私と同じようなものだろう？　そんなに過剰に反応される謂れはないと思うのだが〉

「（バっ、バレてる……）お、仰る通りで」

「納得するな！　で、私に仕事を依頼したい……だと？」

〈そうさ、聞いてもらえるかな？〉

この男は油断ならないとティアナは感じた。

だが、そんな男がだからこそ出してくる依頼の内容にも多少興味が湧く。

基本的にティアナは例え相手が犯罪者だろうが差別はしない。

「依頼」を選り好む事はないのだ……まあ、「契約」は別の話であるが。

「内容によるな。今、丁度別件を抱えていてね。片手間に出来そうであれば受けるし、そうでないのであれば後にしてもらう。それで良ければ聞こう」

〈なら簡単だ。片手間どころか手間無しでも出来る。私の依頼は唯一つ。この私に、君の事を最大に評価出来るような、仕事振りを見せて欲しい……だ〉

「何……だと？」

〈ん、聞こえなかったかね？　つまりは、私は君と契約したいと言う事だよ。凄腕と呼ばれる君とね。だからその仕事振りを私に見せ

つける。それだけの仕事さ……簡単だろう？　例えば、さっき受けた魔導師連続殺人事件の資料整理。私が契約したいと望む君ならば……幾許かの事件の真実をある程度は推察する事も出来ると思っている。いや、出来ると私は信じよう〉

「なっ！？　お前……何故」

ティアナはそう呟き、気付いた。

現在、アジトはスピアーノが侵入したせいでセキュリティレベルが格段に落ちているのだ。

〈何故かいつもは堅固なセキュリティが今日に限って著しく低下していたのでね、悪いが盗聴させてもらったのだよ。ちなみに二人の先程の歓談も楽しく聞かせてもらったよ〉

ティアナはその言葉の裏に隠された真意を確信した。

この油断ならない男が只々会話だけを楽しく盗聴していたはずがない。

セキュリティが落ちたということは建物の精密探査も可能ということなのだ。

不幸な事に、この建物の中には色々と公表されたら不味い物が沢山とある。

許可されるはずもない重火器等の強力な質量兵器や管理局を始めとした数々の施設のハッキングデータ、今となってはスピアーノ……つまりは怪盗ラパンの存在もである。

つまり、この男はそれらをバラされたくなかったら依頼を受けろと暗に言っているのだ。

そして、ティアナはティアナ自身の目的のため、今は捕まる訳にはいかない。

故に……受けるしかない。

「……分かった。受けよう……その依頼」

「なっ、本気ですかティアナさん！？」

〈ふふ……やはり、君は理解が早くてとてもいい。では、いい結果を期待しているよ太陽の烏（ソル レイブン）。是非とも私と契約してくれることを楽しみに待っている。ああ、そうだ……一つヒントをあげよう。有効に使ってくれたまえ〉

ジェイルからゼフィロスへと何かのデータが送信され、そして通信が切れた。

重い空気が辺りを支配し始める。

その中でティアナは謝罪の声をあげた。

「私の失態だ。さっさとセキュリティを復帰させるべきだった。力に屈するなど……誇り高き雑賀衆の名に傷を付けてしまった」

『いいえ、ここはデバイスである私が簡易なりにセキュリティを構築しておけば良かったんです。悪いのは私です』

「違います。私が不用意にアジトのセキュリティを解かなければこんな事にはならなかったんです。ティアナさんもゼフィロスも悪くありません。全て私の責任です」

「ああ、そうだ。元はと言えばお前が全部悪い」

『ええそうです。あなたのせいです』

「……あれ？　おかしいな……味方が一人もいない」

ここに来てティアナ達からの裏切りの一撃がスピアーノの心を抉った。

もう既にスピアーノの心のライフはゼロだ。

「お前、一応は分類的には結界魔導師なんだろう。だから責任持ってお前がセキュリティを前以上に強力に作り直せ。こんな事が二度と起きないように。分かったな……スピアーノ」

「……分かりましたぁ。私がぁ、責任持ってぇ、やらさせていただきますぅ……うぅ」

がんばれスピアーノ！

何時かはいい事あるさ……何時かはね。

第十話　契約（後書き）

太陽の烏との契約を願う二人の希望者。

果たして、ティアナの決断は……

あと何話かしたらアンケートを取りたいと思います……お楽しみに！

第十一話　考察

二人の契約希望者との会談の翌日。

朝から元気良くやってきたスバルは早速、ティアナの訓練を受けていた。

ちなみに現在の時刻は午前５時１３分。

早過ぎである。

「まずはお前の基本的な能力を見る。どんな方法でもいい、私に一撃入れろ。あと、一応言っておくが……遠慮など捨てろ。全力で来い」

「はいっ師匠！……あっ、でも」

「ん、何だ？」

「一撃当てるだけでいいんですか？　それで私の基本能力なんて分かるのかな……って思いまして」

「……」

ティアナはスバルに鋭い視線を向ける。

まるで射殺すよな視線とはこういう物を言うのだろう。

その見本となるような視線だった。
そんなティアナの威圧にスバルは少したじろぐ。

「な、何ですか？」

「何でもない。だが、そんな事を言うのは当ててから言え。まあ、当てれたらの話だが」

「むっ、分かりました」

お互いにバリアジャケットとデバイスを展開して相対する二人の少女。

ティアナのバリアジャケットは胸部に黒い軽装甲のボディアーマー。
下はスパッツで腰には左半分に赤いマントを羽織っている。
右の腿には複数のホルスターが吊り下げられ、大型のマグナム・カートリッジが入ったマガジンが収容されていた。
更に腕にはナックルガード付きのグローブ。
靴はどこぞの軍にでも採用されてそうなニースパイク付きのバトルブーツと、えらく実戦的な出で立ちである。
これはティアナの前世、雑賀孫市の戦装束を参考に考えられたもの

だ。

使用するデバイスは両手に構えられた白黒の二挺拳銃。

白がデザートイーグル型のインテリジェントデバイス「ゼフィロス」、黒が４４マグナム型の非人格式アームドデバイス「ヤタガラス」である。

対するスバルのバリアジャケットは動き安さを重視したタンクトップにジャケット、それにハーフパンツとえらくシンプルに抑えられていた。

そして、スバルがおもむろにその右手だけに着けていたグローブを外し、手を前に伸ばす。

その手の甲には青い結晶が埋め込まれており、その結晶が青く目映い光を放った瞬間、スバルの右腕全体にデバイスが装着されていた。

いや、装着というのは語弊がある。

それは肩のショルダーアーマーから始まり、上腕、前腕、手掌、指先に至るまで完全にデバイスと一体化していたのだ。

中でも特徴的なのは前腕であり、形状はフォーミュラーカー、もしくは戦闘機を思わせる。

前腕の近位……肘に近い部分が特に大きくなっており、ジェットエンジンを思わせる噴出口とその外側にのみウイングが付属させられていた。

その異形の腕と言っても差し支えない物をスバルはブンブンと振り回し調子を見ている。

「あー、何というか。凄いな……それ」

「えっ……あー、はい。これが私のデバイスです。本当はお母さんの形見であるリボルバーナックルをギン姉に内緒で持ち出して使ってたんですけど……前の仕事の時に知り合った変なお爺さんに無理矢理改造されちゃいまして」

実は、スバルはここに来る前は傭兵ギルドに所属し、一端の傭兵として既に働いていた。

このデバイスは約一年前に依頼で護衛した老科学者により、スバルへの報酬として作成された物だ。

その名も手甲型非人格寄生式アームドデバイス「アーマー・ピアッシング・シェル・ブリッド」、略してＡＰＳブリッドである。

その最大の特徴は右腕全体がデバイスと融合、一体化する事で魔導師・デバイス間の意志疎通によるタイムラグを極限までに抑える事に成功した点であり、反射的な魔法行使が可能になっている事である。

確かに通常のデバイスでも反射的な魔法行使は可能だ。

だが、術者の反応がデバイスを通し、そして魔法が発動されるまでに若干のタイムラグが存在する。

そのため、刹那の判断や反射行動が生死を分ける事のある格闘魔導師にとってその差は致命的なのである。

また、このデバイスは「徹甲弾」の名の通り障壁破壊の魔法が常時発動しており、魔力による身体強化と相まって格闘戦では絶大な効果を発揮する。

格闘戦による前衛攻撃型（フロントアタッカー）のスバルにとってこれほど相性の良いデバイスはないだろう。

更にこのデバイスにはまだまだ秘密が隠されているが……今はまだ述べないでおこう。

では、最後に制作者のコメントを記載する。

「あのアニメ最高だよネ～。特に成長と共にア〇ターが進化していくってのがサァ！　こう、何かそそられるじゃン！　まだまだ他にも実現したいネタが色々とあるシ、またどこかに良い実験ｄ……んんっ、良いモニターいないかナァ？」

以上である。

では引き続き、本編をどうぞ。

「……何ですか、これ？」

日も明けきらない朝の早くから響いてきた爆音によって、スピアーノは叩き起こされる事になった。

そして何事か確認するために外に出て、目の前の惨状を見て言葉を失ったのだ。

ティアナのアジトである廃ビルの前は、まるで複数の隕石が落ちて来たかの如くクレーターで埋め尽くされ、周囲のビルが二、三個ほど崩れさっていた。

だが、スピアーノが絶句したのはその景色の変わり様ではなく、それを作り出した者達の方である。

スバルの異形の腕から繰り出されるパンチ。

それは何の変哲もない只の正拳突きだ。

しかし、その前腕に備え付けられたジェットから爆発するように放出された魔力によって加速され、音速に近い速度を叩き出している。

障壁破壊効果を持ち、常人を遙かに越えた速度、威力を持って繰り出される恐るべき魔拳。

当たれば生半可なバリア、シールドは意味を成さず文字通りに粉砕され、バリアジャケットの衝撃吸収もどこまで通用するか判らない。

だが、その魔拳を持ってしてもスバルはティアナに一撃も当てることが出来ずにいた。

スピアーノが驚愕したのはクレーターでも崩壊したビルでもなくその光景にである。

「どおぉぉぉぉりゃぁあぁーーー！！」

「……」

躱す。

躱す。

躱される。

ここに来てスバルの焦りは最高点に達した。

実を言うとスバルは、ティアは私の事を随分と侮っている、と思っていたのだ。

スバル的には確かに傭兵としての経験はティアナに遙かに及ばない、恐らく総合的な戦闘力でも負けているとは予測していた。

だが、それでもここまでの差があるとは全く考えていなかったのである。

――――まあ、当てれたらの話だが。

それがティアナが訓練開始前に言った台詞だ。
その言葉にスバルは、
「一撃くらい訳はない……私の一撃がどんなに凄いかティアに教えてあげる！」
と意気込み、開始早々に突っ込んだ。
魔力を爆発させるように放出し、唸りを上げるジェット。
それによって加速された拳は音の領域を侵食する魔拳。
最初の一撃は顔面を狙っただけの単純なもの。
しかし、それでも当たれば一溜まりもない強烈な一撃だ。
だが、ティアナはそれを首を捻っただけで紙一重に避けた。
そして、ただ避けただけならまだしも、合わせるように銃口をスバルのこめかみに充て、無慈悲にも弾丸を放ったのである。
「えっ……」
幸いにも放たれた弾丸は模擬戦用の非殺傷低威力弾だったため、ス

バルには傷どころダメージさえなかった訳だが……心はそうはいかなかった。

「これでお前は一回死んだ。さっさと気持ちを入れ替えろ。次は威力を上げるぞ」

「！？」

次に放たれた一射を反射的に避け、体勢を整えるスバル。

軽やかなステップでティアナを翻弄し、再び魔拳を叩き込む考えだ。

お互いに射程距離だが、スバルはティアナが撃つであろう直前でサイドステップを入れ、上手くティアナの死角に入り込んだ。

「今度こそ！！」

「……悪いが見えている」

ティアナの右サイドからのボディブロウ。

だが、それもティアナが右手に持つヤタガラスより放たれた魔弾が……強制的に魔拳を逸らし外させる。

次いで、左手のゼフィロスを隙だらけになったスバルの額に充て、容赦なく連弾を叩き込んだ。

「がぁっ！？」

「そんなものなのか？　お前の実力は……」

ここからは正に一方的な展開だった。

スバルの攻撃は全て躱され、往なされ、迎撃されて一撃たりとも当たらない。

反面、ティアナの攻撃は的確にスバルを襲い、ダメージを重ねていく。

数多のクレーターや崩壊したビルはスバルの攻撃が全て躱された証拠だ。

もう、既にスバルの心は折れそうになっていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……な、何で……当たらないの？」

「それはだな……」

「う、うわぁぁぁぁーー！！」

スバルが残り少ない魔力を振り絞り、突撃を敢行した瞬間、目の前にいたティアナが消えた。

ティアナお得意の幻影魔法、フェイク・シルエットとオプティック・ハイドのコンボだ。

相手の虚を突くこれらの魔法は初見で見破る手段は殆ど無いに等しいものである。

「っ……消え……！？」

「こっちだ。シフト・クロッグミ、ファイア！」

「えっ、づぁああ！？」

突然にしてスバルの背後に現れたティアナは容赦なく銃爪を引いた。

ショットガンに変形したヤタガラスによる至近距離からの散弾収束射撃。

それを背中から諸に浴び、スバルは前のめりに倒れ込む。

完璧に虚を突かれ、その衝撃はスバルの魔力、気力を根こそぎ奪い尽くした。

もはやスバルには起き上がる力は残されていないだろう。

こうして、初めての訓練はスバルがティアナに一撃たりとも当てることなく、完全敗北で終了した。

「それはだな、お前の攻撃が全て単調でタイミングや軌道や読みやすいからだ……って、聞こえてないか」

「ふへぇ……がくっ」

「あっ、スバルさんが死んだ」

現在、午前６時２０分。

訓練開始から終わるまで、たった一時間と数分だった。

スバルの初めての訓練から数日後、ティアナはアジト三階の書斎にいた。

この部屋は数々の書籍や資料を置いてあることから名目上は書斎としているが、その実質は情報分析室だ。

その部屋ではやてから送られてきた資料データの整理の傍ら、ティアナはあのマッドドクターからゼフィロスに送られてきたデータを調べようとしていた。

「ウイルスのチェックは何重にも行え。心配ないとは思うが用心す

るに越した事は無いからな……いけるか？」

『ウイルスの類は無し。念の為に隔離した端末で開きます。データ移行……完了。どうぞ』

「よし……本当に只のデータ集のようだな。だが、何だこれは？　連続魔導師襲撃事件被害者のプロフィールリスト？　何だってこんなものを」

送られてきたデータはどうやら件の連続魔導師襲撃事件被害者のプロフィールリストのようである。

だが、これらの資料は既に八神はやてによってティアナの手元にあるものだ。

こちらを覗き見していたあの変態ドクターがヒントと称して、わざわざ同じ物を送るはずがない。

従って、これらが只のデータではないのは明白なのである。

「……んっ？　このデータ……おい、ゼフィロス。八神から貰った方の被害者リストを表示しろ」

『了解。こちらです』

ティアナは空間モニターに表示されたはやてのデータと端末のデータを見比べた。

そしてその違いにすぐに気が付く。

「やはりな。このデータ集、明らかに機密深度が深い。被害者達が今まで従事した任務の内容、その報告書、上司の評価等々。他にも魔導師ランク試験の査定表に所有しているデバイスのメンテ記録、職場アンケートの内容に至るまで完全網羅か。こんなもの一般局員じゃ閲覧すら無理だ。全く、プライベートも糞もないな……これは」

『本当ですか！？　しかし、こんなもの一体どうやって』

「さあな。だが、悠々とこんなものを寄越したんだ。きっとこの中に、奴の言う真実への手がかりがある。ゼフィロス、さっさと精査するぞ」

『了解です』

早速ティアナはゼフィロスと共にスカリエッティのデータの洗い出しを始めた。

そのデータは、はやての資料とは違いプロフィールリストだけなのだが、重大機密である情報も掲載されている為、データ量だけでも同等以上の容量を誇っている。

その為、余りにも情報量が多くなかなか把握しきれないようだ。

「ちっ、データ量が多すぎる。ゼフィロス、どうだ何か気が付いた

ことはあるか？」

『いえ、まだです。しかし、これでは何時になっても終わりません。こうなったらスピアーノさんにも協力して貰いましょう。元管理局員のスピアーノさんなら何か分かるかもしれませんし』

何時の間にかやっていた事が逆転していた。

明らかに今のティアナ達はスカリエッティのデータを調べる傍ら、はやての資料を整理している。

「そうだな……量が量だしそうするか。ついでに気絶しているスバルも叩き起こせ。此処に来る前はギルドに属していたらしいからな、ある程度は情報も扱えるだろう。今は人手が多いに越した事はないからな」

やる事がなく暇を持て余していたスピアーノと今朝の訓練でまた気絶したスバルを交え、はやてとスカリエッティのを合わせて膨大なデータを整理していく。

無論、資料そのものは混ざることの無いよう気を付けて分類しているが……時折比較したり、纏めるときの参考にしたりと、どちらをメインで行っているのか分からなくなってきたぐらいだ。

スピアーノはその余りの量に文句ばっかりだったが、ティアナがスバルと共に訓練しようかと問うと、書類作業は楽しいなぁ～、と涙目で整理していた。

その甲斐あってか幾分かは効率が上がり、スムーズに作業をこなしていく。

だが、例え人手が倍に増えても、たった十数人分だけの資料とは言えども、一人一人のデータ量が半端なく多い。

また、ティアナとスバルは訓練でちょくちょく抜ける為、結果としてはやての資料を分類するだけでも四日間も掛かってしまった。

まあ、ティアナ一人で分類・整理したとすれば確かに二週間近くは掛かったであろう。

それをたった四日で分類し終えたのは、紛れもなくスピアーノ達の協力のお陰である。

ちなみに、終わったのは深夜だったのでティアナ、スピアーノ、スバルの三人はそのまま倒れるように寝てしまったのではあるが。

そして、その翌日。

「八神の資料は後は纏めるだけだ。それは私が後日やる。それで、今日はこれらのデータを元に検討をしたい。スピアーノ、元管理局員として何か気付いたことはないか？」

「うーん……私も元本局魔導師ですけどラパン捜査専門の部隊所属でしたからね。この被害者の方達とは直接の面識は無いんですよ。でも、ある程度の共通点は見いだせました」

スピアーノはそう言っていくつかのデータを空間モニターに提示した。

皆、そのモニターを食い入るように見つめ、スピアーノの話を傾聴している。

「八神二佐のもそうですが、スカリエッティのデータの方は正しく機密の塊です。ばれたら即座に捕まるレベルの。それをどうやって手に入れたかは置いとくとして。奴は恐らく真実、もしくはそれに近いものを知っていると思われます。で、共通点なんですが」

ごくり。

スバルのそんな唾を飲み込む音が聞こえるほど……今、この場は静まり返っている。

スピアーノは少し周囲を見渡し、そして声を発した。

「八神二佐からもたらされた複数のデータを照らし合わせて分かったのは、一つは遺体の状態です。全員が全員、同じような状態で発見されています。まず、胸部に大穴。更に体を分割した……所謂、バラバラ死体です。まあ、バラバラと言っても細切れにされている訳ではなく、あくまで遺体の一部が欠損している程度ですが。その一部分も被害者によってまちまちで腕だったり足だったり一定していません。しかし、それより問題なのはその欠損部位が何処にも見当たらない事なのです」

スピアーノは端末を操作し、被害者達の検死報告書を表示した。
確かにその被害者達は、胸にまるで槍で刺突されたような大穴が空いており、その体の一部分がスッパリと切り取られている。
ティアナは、そう言えば確かに兄の遺体からは右腕が無くなっていたな……と、今更ながらに思い出した。

「更に奇妙なのはそれが死亡後になされている点です。また、発汗等の分泌物やリンカーコアの残存魔力値を調べた結果、死亡の直前は極度の衰弱状態であった事が分かっています。つまり、犯人は何らかの方法で被害者の魔力や生命力と言った物を奪い、殺害。その後に死体の一部を切り取って持ち去っていると言うことです」

『「お、おぉ〜〜。」』

待機状態で机に置かれたゼフィロスとスバルが感嘆の声を上げた。
実は、二人ともスピアーノにはあまり期待していなかったので、以外と分かりやすい説明に結構驚いている。

「ふふん！　これでも捜査部隊所属だったんですよ。これぐらいは当然です！　で、二つ目の共通点なんですが……一部を除いて、みな非番時……つまりは休暇中に殺害されています。例外の一部の人ってのは現所属部隊の任務中に襲われたって事ですね」

「『ふんふん』」

「次いで、三つ目。被害者の半分は地上から引き抜かれて本局に移った人だと言うことが分かりました。それで、どうやら結構いざこざを起こしているみたいなんですよ。考え方の違いとかで時には単独行動や命令無視なども行っているみたいですし」

スピアーノのその説明にスバルが酷く動揺を示した。

どうやら、単独行動が好きそうなのはここにも居そうな感じである。

苦笑いでなんとか誤魔化そうとするスバルであったが、後でティアナにこってり絞られるのは確定であろう。

当然ながらティアナはそう言った行動が大嫌いな部類である。

本来、ティアナが最も得意とするのは集団戦だ。

統率が完璧に執れた集団はまるで一つの生き物のように機能し、個人では出来ない力を発揮する。

だが、そこに単独行動や命令を無視する不協和音が混ざると瞬く間に瓦解してしまい、集団が危機に晒される結果となってしまう。

単独での動きも時には大事であろう。

だが、それは集団としての行動に出すべきではない。

ティーダが……その人生の最期に出した結果は賞されて然るべきも

のではあるが、行動はそうではないのだ。

「四つ目が最後の共通点です。これはスカリエッティのデータで分かったんですが……被害者の殆どがある同一の部署に一度配属されています。みな殺害された時に所属していた部隊のいくつか前に」

「ほう……成る程。つまりは墓場と言う訳か。と、言うことは事件の直前に出会っている筈だな……スピアーノ」

「はい、いくつか目撃証言があります。それも……」

「同一人物か？」

「そうです。そしてその部署……あまり公に出来ない部類のものみたいですね。本局に呼ばれる程の実力者が配属されるには部署名が当たり障りなさ過ぎます」

「その部署の名前は何だ？」

「えーと、本局武装隊広報部広報七課です」

「ふむ……広報課ね。何となくだが事件の全貌が掴めてきたな。これはもしかしてもしかするか？」

ティアナはある想像が頭を過ぎった。

そして、どうやらスピアーノも同じ想像に至ったようである。

「私もティアナさんと同じ考えです。各々の資料から読みとれる情報、諸々の共通点。特に最後の物を重視して全体を鑑みれば……それが最も筋が通る結論だと思います」

「ああ」

「えっ、何？　何なの？」

『スバルさんは分かりませんか？　まあ、無理もないでしょうが』

どうやら至ってないのはスバルだけのようだ。

先日の妙に鋭いスバルはティアナ専門のようである。

「恐らく先入観が邪魔をするんでしょうね。ティアナさんは別として、この私も未だに信じられないくらいですから」

「この襲撃事件の犯人……いや、その黒幕と言うべきか。私の想像が正しいならばそれは……」

「「時空管理局」」

一瞬、沈黙が場を支配した。

それ程までにその一言は衝撃的だったからだ。

皆が黙り込む中でスバルが最初に声を上げた。

「か、管理局が黒幕って……どういう」

「言葉通りの意味だ。考えてもみろ……その広報七課に配属された者が二、三と所属を変えた後、みな非番の時に殺害されているんだぞ。しかも、事件の直前にその広報七課に所属する人物に出会っている。どう考えても怪しいだろ」

スバルの疑問にティアナが答えた。

確かに怪しいと思うが、それでも納得がいかないのかスバルは難しい顔で不満を表す。

まあ、それも当然だろう。

スバルは父親も姉もその管理局の職員なのだ。

自身の親類が所属している組織がこんな事件を起こしているなんて簡単には信じられないのだろう。

ましてや管理局は次元世界の平和を守っている組織である。

「お前の不満も分かる。平和を守る組織がそんな事をしているなんてな。だが、管理局はそれだけではない。司法権のみならず管理局法やギルド法等の法律を定立させ執行させる立法権と行政権も併せ持っている。どれだけ強大な権力を有しているかお前にも分かるだろう」

「う、うん……」

「そう言う強大な権力を有する組織には必ず闇と言う物が存在する。それが例え、次元世界の平和維持組織であってもな。この広報七課がどのような事を行っている部署かは分からないが……後ろめたいのは確実だ」

「でも、それじゃあ何でティアのお兄さんは殺されたの……この七課には配属されてないんでしょ」

確かにティアナの兄、ティーダは陸士部隊から首都航空隊に配属され、そのまま被害にあっており、この広報七課とは全く関係していない。

他にも数人が同じ様な感じであり、それが事件を余計にややこしくしていた。

そう、被害者の内の何人かが幾つかの共通点から溢れているのだ。

まるでノイズのような、予定から外れたモノであるかのように。

「もしかして……本当に予定外だったのでは？」

「ん？　どういうことだ……スピアーノ」

「いえ、この広報七課が仮に墓場だと仮定して……違法魔導師を装って暗殺しているにしても殺害方法があまりにも猟奇的すぎます。そう言う風に指示されているならまだしも、これが犯人の嗜好だとしたら」

「成る程。犯人が猟奇趣味の殺人鬼なら……自身の飢えを満たす為に予定された暗殺以外にも事件を起こしている。それも通り魔のように……と、言う訳か」

「溢れた人達はそれで一応は説明できます。ようするに運が悪かったん……あっ」

言って、スピアーノは自身の失言に気付いた。

それはティアナが天涯孤独であるのは運が悪いからだと言っている様なものである。

「す、すみませんティアナさん。そう言うつもりは……」

「いや、気にするなスピアーノ。さて、今日はここまでにしよう。明日は私は八神への報告書を作成するので休みにする。スピアーノ、お前は偶には自分の家に帰れ。スバルは明日も訓練だから何時もの時間に来るように」

「「やった〜〜（えぇーーー）」」

歓声と共に悲鳴が聞こえたがティアナは聞こえなかった事にした。

「五日後は管理局との合同演習だ。スバルはそれまで毎日訓練だからな。訓練の成果はその合同演習で見せてもらうからそのつもりで……以上だ」

さらに大きな悲鳴が木霊する、秋の夕暮れだった……

第十一話　考察（後書き）

ティアナとスバルの訓練風景と事件考察でした。

作中に出てきた部署名は適当に付けています。

次回は管理局と傭兵ギルドの合同演習の話です。

あの人が活躍するよ……お楽しみに！

第十二話　蒼き流星

時空管理局地上本部第三演習場。

ミッドチルダ北部に存在する演習場である。

そこにティアナ、スピアーノ、スバルの三人は管理局地上本部との合同演習兼交流会のため訪れていた。

今回行われる合同演習は傭兵ギルドから選抜されたメンバーと地上本部が誇る陸士部隊、または双方入り交じった部隊での都市戦を想定した模擬戦であり、攻守やシチュエーションを幾度か替えてのポイントマッチとなっている。

そこにティアナは全体的な意見役、スバルはギルド側の戦力、スピアーノは管理局側の後方支援としてそれぞれ協力することになっていた。

「眠いです。何でこんな時間からやるんですか？　まだ朝の六時ですよ」

「こんな時間だからこそだ。災害やテロなんて何時起こるか分からないからな。それに、今回なんてまだいい方だ。前回は夜中の三時だった……」

「バカですね。バカなんですね」

「うるさい。スピアーノ、少しはスバルと他の連中を見習え。見ろ、

誰一人として文句言ってないじゃないか」

朝早くからにも関わらずギルド、管理局双方の熱意は凄まじく、繰り返される怒号と爆音と悲鳴が見事なハーモニーを醸し出している。ちなみに付近には民家は無く、騒音については全く考慮されていなかった。

「というか、何でここにお前がいる？　お前は管理局側の後方支援だろうが……まさかサボリか？」

「ふふん、それこそまさかです。ちゃんと働いてますよ……影分身がね。本体の私はここで安全に戦況を見ているという訳です。感覚は共有してるんで、ここからならあちらさんの動きは手に取るように見えます」

「無駄に高機能（ハイスペック）だな、お前」

「ふふん、いい拾い者だったでしょ？」

この演習場はかつての火災で閉鎖された臨海第８空港の近隣にあり、空港の閉鎖に共に放棄された市街地の一部を管理局が買い取り、演習場としたものである。

ティアナ達がいるのは演習場の傍に聳え立つ旧空港管制塔の真上。

この一帯の建物の中では一際高く、状況を見るのに最適な場所だっ

た。

「ここが、かつてスバルさんがティアナさんに助けられた空港ですか」

「そうだな。あの頃は私も若かった」

「三年前の話でしょうが……あれ、あの大穴は？」

ティアナはスピアーノの指差す方を見遣る。

そこには、綺麗な円形にくり貫かれた大穴が存在していた。

それは、この角度から見るに天井から一階まで一直線に続いている。

「ん？　ああ、誰かは知らんが付近で作業している者もいるのに砲撃魔法を撃った馬鹿がいてな……その痕（きずあと）だ」

「……は？」

「しかも、その時に特に警告等はなかった」

「何それ怖い」

あの時、ティアナが対岸から目撃したのはこの管制塔の近くから放たれた桃色の砲撃。

それは、いくら数多の戦場を渡り歩いてきたティアナを以てしても戦慄を覚えるほどのものであったという。

「これを撃った奴の事を考えるとつくづく魔導師というものが嫌になる。個人の火力でこれだけの事が出来る。と、言うことがな。なぁ、スピアーノ……お前はそれをどう思う？」

スピアーノは一瞬、呆けた顔を見せるがすぐさま自身の所思を述べた。

「はっきり言って、怖い……ですね。これだけの事が出来る人はそういないでしょうが。ですが、絶対にいないとは言いきれません。その力を扱うのが人である以上、その不安は常に付き纏います。知っていますかティアナさん……最近の報告では戦術核クラスの威力を持った砲撃を撃つ魔導師がいるらしいですよ」

「何それ怖い」

ちなみに、この大穴を空けた魔導師とスピアーノが言った魔導師が同一人物であることは言うまでもない。

「さて、無駄話もここまでだ。ゼフィロス、戦況は今どうなっている？」

『今は守り側の管理局が優勢ですね。各防衛拠点の防衛は上手くいっています。ただ、中央は……』

この模擬戦は周辺にある複数の防衛拠点を制圧しつつ、最終防衛拠点を制圧するのが攻め側の、各防衛拠点を守りつつ、相手を拘束するのが守り側の目的である。

そして中央とは、その最終防衛拠点までに至るための最短ルートの事だ。

最終防衛拠点が落とされれば守り側の負けであるため、最短ではあるが最も守りが厚いルートである筈なのだが……

「中央？　あれは……スバルか」

『はい。スバルさん単独による強行突破です』

「うわぁ、人がまるで木っ端のように……」

そこは最早、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

強烈な衝撃で撥ね飛び、倒れ伏す……人、人、人。

一応、誰一人として死んではいないのだが、その光景はまさに死屍累々と言った感じだ。

その最たる原因はこの少女である。

「へっへーん。この調子でみんなぶちのめして行けば私達の勝ちだよね。そしたらティア、褒めてくれるかなぁ？　うん、褒めてくれるよね。むふふ……漲ってきたぁぁーーー！！」

ジェットによる急加速でまるで地面を滑るように駆け抜け、振るう魔拳で次々に人を吹き飛ばしていく少女。

「太陽の烏（ソル レイブン）」の弟子、スバル・ナカジマを誰が止められると言うのだろうか？

「さて、もうこの辺は大体片付いたかな。あとは……むっ」

「まさか、ここまでやるなんてね……泣き虫だった貴方が懐かしいわ。でも、その強行もここまでよスバル」

そんな者は今、この場に於いてはこの女性の他には存在しない。

「ギン姉」

「スバル」

そう、「蒼き流星」ギンガ・ナカジマを於いて他には。

「どぅぉぉけぇぇーーー！！　ギン姉ぇぇぇーーー！！」

「ここから先は行かせないわ！！」

激突する蒼と青。

唸る左腕と右腕。

睨み合う姉と妹。

その最初の邂逅は……両者とも全く譲らずに互角。

鋼の拳と拳が生じさせる火花は、二人の戦いの激しさを物語るかのようだ。

時間にしてわずか四秒ほどであったが、体感では既に何時間も戦い続けたかのように感じる。

このままでは埒が開かない……そう、互いに仕切り直す事を同時に思考し、そして選択した。

「ぐっ……なんてパワーなの。でも、まだまだ。さあ、勝負はここからよ！！」

予想以上のスバルの力にギンガは少々の腕の痺れを感じたが、まだまだこれからだと己に渇を入れた。

「さっすがギン姉！！　まさか、私のパンチを真っ向から跳ね返すなんてね。でも、それを真ん前からぶち抜く……止めてみろぉぉーー！！」

一方、スバルも今までされた事のない、己の自慢の拳を正面から跳ね返され驚愕するも、それを更に破るのだという意気込みと共に魔拳へと魔力を注ぎ込んだ。

そして、再度ぶつかり合う両者。

片や、何時の日か、「拳王」と呼ばれるようになる少女スバル。

片や、今現在、「蒼き流星」と呼ばれる少女ギンガ。

はたして、勝利の女神はどちらに微笑むのか？

「「うぉおおぉぉぉーーー！！」」

今、お互いの進退を賭けた激闘が始まる。

ギンガとスバルの姉妹対決を遙か高く、管制塔の上から見て、スピアーノはティアナにこんな質問を繰り出した。

「ねえ、ティアナさん」

「ん？　何だ、スピアーノ？」

「スバルさんとギンガさん。どちらが勝つと思います？」

スピアーノの率直な疑問にティアナは答えは決まっているかのように即答する。

「ギンガだな」

「へぇ、それまた何でです？　スバルさんの方が力も、瞬発力も、序でに魔力量も上だと思いますけど」

スピアーノの言うことも最もだろう。

基本的にスペックが高い方が有利なのは自明の理だ。

だが、それをティアナは否とする。

「技術、それに経験は圧倒的にギンガの方が上だ。そしてスバルには致命的な弱点がある。それがある限りスバルに勝ち目はないな」

「致命的な弱点？」

「ああ」

「何です、それは？」

「スバルは……空戦が出来ない」

「えっ……でも、それってギンガさんもじゃ？」

確かにスバルもギンガも陸戦魔導師であり、飛行魔法を自在に操る空戦魔導師ではない。

条件的にはスペックの差でギンガがやや不利ではないのかとスピアーノは考える。

だが、それは誤りだ。

陸戦魔導師だろうと空戦が出来ない訳ではない。

やり様に依っては幾つかその手段が存在している。

そして、ギンガはその手段の一つを持っていた。

絶対的なスペックの差を覆す、その手段とは……

「あれを見てみろ」

「ええっ！？　何です、あれ！？」

そこには道があった。

ギンガの魔力光と同じ色をした蒼色の道。

それがスバル達の戦闘区域上空に縦横無尽に張り巡らされている。

その名も先天魔法「ウイングロード」。

それがギンガの持つ、空戦の手段である。

「むぅぅぅ！！　卑怯者、降りて来いギン姉！！」

スバルは遥か上空に逃れたギンガを卑怯者と罵る。

降りてきて、正々堂々と正面で戦え、と。

だが、模擬戦とはいえ仮にも戦場でそれはあまりも滑稽な台詞と言えた。

「教えていないウイングロードを使えないのは当然としても、遠距離に対する攻撃手段が全くないなんて。スバル……あなた、全く魔法覚えてないでしょ」

「ぎくぅ……ソンナコトナイヨ。ヤダナァ、ギンネエ」

完全に図星を突かれたのか片言になるスバル。

その反応を見て、ギンガはさらに推測を立てた。

「おそらく使えるのは魔力の放出のみ。あとは身体能力の高さとそのデバイスの性能だけで戦ってきた……かな。それでは二流には通じても一流には敵わないわ」

「うぅぅ……」

さっきまでスバルに吹き飛ばされていた同僚達を二流呼ばわりした上に、己は一流であると暗に宣言するギンガ。

相変わらず失礼な物言いだが、それはギンガの自己に対する自信の現れだ。

陸士１０８部隊の切り札、「蒼き流星」の二つ名は伊達ではないの

である。

「……あっ。そうだ、今なら目の前、誰もいないじゃん。ギン姉は上だし、全速力で駆け抜ければ振り切れるはず……よし、せーの」

ギンガが目の前にいないのをいい事に全速力で突破を図るスバル。

しかし、それを見逃すギンガではない。

スバルをウイングロードで追いかけながら、さらなる秘策を持ち出した。

「残念ながらその行動は予測済みよ。皆さん、お願いします！！」

「「「「「応！！」」」」」

ギンガのそんな掛け声で飛び出してくる五人の魔導師。

全速突破を図るスバルは邪魔になったその五人の魔導師にむけ、魔拳を振り被った。

だが、ここでスバルは気付くべきであったのだ。

彼らの纏う空気。

それがさっきまで相手にしていた二流達とは、全く別物であること

を。

「どけぇ、邪魔だぁぁぁーー！！　」

「各自散開」

「「「「了解（ヤー）」」」」

スバルの攻撃に合わせ、すぐさま散開する五人。

その動きに全く淀みはなく、それだけでも彼らが只者ではないことが伺い知れる。

そう、彼らはみなストライカーと呼ばれる、ギンガの言う一流の者達である。

「くっ、ちょこまかと……あぐっ、ぐぅぅ……」

「一撃一撃は強力なれど動きは単純。起点を見逃すな。落ち着いて対処すればどうという事はない。ダガー2、3は牽制。ダガー4は私のカバーに入れ。奴を釘付けにするぞ」

五人の内、リーダーと思われる男の的確な指示によって波状的に攻撃を仕掛けられたスバルは下手に動くことも出来ず、一点に置いて縛り付けられていた。

しかしスバルもその天性の嗅覚で本命の攻撃を嗅ぎ分けて殴り落とし、結果として致命的な物は一撃も貰っていない。

だが、このままではジリ貧だと感じたスバルは一発逆転を狙ってリーダーと思われる男、ダガー1に特攻を仕掛けた。

「お前を倒せばぁぁーー……えっ！？」

その瞬間、スバルの動きが不自然に止まった。

ふと足元を見てみれば赤銅色の魔法陣があり、そこから魔法陣と同じ色をした鎖が幾重も伸びている。

「ふ、掛かったな。各員、バインドを発動。これで我々の仕事は終わりだ……後は「流星」の彼女に任せよう」

「「「「了解（ヤー）」」」」

周りから次々にバインドを仕掛けられ、完全に身動きが取れなくなるスバル。

そして、その場から離れたダガー1ことジャズ・フィット二等陸尉は静かに視線を天空へと向けた。

吊られて上を見たスバルはその光景に目を奪われる。

「何……あれ？」

「あれが……「蒼き流星」さ」

天へと昇る蒼の道。

ストライカーの面々が戦闘を開始した時点から、ギンガは急速上昇を開始し、ある報告を待っていた。

すなわち……スバルを抑えたという報告を。

「はい。ありがとうございますフィット二尉。さあ、スバル。見せてあげるわ……蒼き流星を」

上昇を続けていたギンガはその一言と共に天地上下を反転させ、急速降下を開始する。

魔力を振り絞り、十二分に加速を付けた所でギンガはウイングロードの発生を止め、その身を空中へと投げ出す。

そして、その勢いのままスバル目掛けて、跳び蹴り（ライダーキック）を敢行した。

「これが「蒼き流星」の由来よ！！　必殺……シューティングスター・ストライク！！」

「う、うわぁぁぁーーー！？」

スバルは訳が分からなかった。

多重バインドで縛られたと思ったら、姉であるギンガが上空から突然、自分に向けて落下してきたのである。

蒼い魔力光を纏い、遙か天高くから地上へと落ちる様はまさに流星そのものだ。

その強烈すぎる一撃を身動きできないスバルは諸に受け、一瞬にして十メートル程吹き飛び……

「きゅ～」

そして気絶した。

「あれは……まさか！？　カットバックドロップターン！！」

そう叫んだのは戦闘を俯瞰していたスピアーノであった。

ギンガの「蒼き流星」を見ての一言がそれである。

「……知っているのか、スピアーノ」

「はい。ですが、あれを実際にやる人がいるなんて……」

急に劇画タッチの表情になったスピアーノはくどくどとギンガの軌道について説明する。

曰く、最高難易度の技術だとか、映像資料でしか見たことないだとか、誰かリフボードで再現してくれないかなぁだとか言っていたがティアナは全くといっていいほど興味は引かれなかった。

寧ろ、その前のストライカー達が見せた動きこそがティアナが最も見たかったものだ。

「スピアーノ……解説はもういいからさっさと戻れ。状況は終了だ。被害は大きいが今回は管理局側の完封勝利だな」

「むう……分かりましたよ。では、また後で」

風と共に消え去ったスピアーノに、あれほどの技術を持ちながら何であいつ弱いんだろう……と、疑問に思ったティアナだったが、それも一瞬。

すぐさま二回目の模擬戦に向けて思考を傾けた。

二回目の模擬戦からスバルが気絶で抜け、管理局側はストライカー達が不参加を表明した。

まあ、スバルの気絶は仕方ない。

近代ベルカ式には衝撃を魔力ダメージに変換する術式が存在している為、命に別状はない筈なのだが……

その衝撃で十メートルも吹き飛ばされる程の一撃を受けたのだから当然と言える。

では、管理局の方は何故かと言うと答えは簡単。

レジアス中将の鶴の一声で決定されたのだ。

曰く、

「一部の強者のみが活躍しても意味はない。地上部隊全体のレベルアップの為、各隊のストライカーには次の模擬戦への参加は見合わせて貰う。それとも何か……彼らがいないと怖くて戦えないと？……甘ったれるなっ！！　都合の良く高ランク魔導師がいるという状況など、この地上では幻想に過ぎんと貴様等もよく知ってい

る筈だ！！　いいか、貴様等は管理局員だ。市民の平和と安全を守る存在なのだ。それが敵が怖くて戦えませんなどと、守るべき市民を前にして自分は管理局員だと胸を張って言えるのか！！　それに、人生など常に準備不足の連続だ。その限られた状況の中で最善を尽くすのが貴様等の仕事であり、その状況の幅を広げるのが私の仕事だ。より一層の努力を期待する……以上だ」

との事だ。

この演説でやる気が業火になった管理局勢は攻め側に回っても積極的に攻勢に出ていった。

しかし、ギルド勢もスバルが抜けたとは言えまだまだ荒くれ者が多く、最初から士気が高かったのに加えて二回も負けては黙っていられないと言った感じだ。

計五回の模擬戦の勝敗は2対3で管理局が僅かに抜き出たが、それでも一進一退の五分と言うべきもので、結果としては良い演習になったと思われる。

こうして、早朝から始まった合同演習も午後に差し掛かる頃にようやく終わりを迎え、次いで交流会が始まった。

第十二話　蒼き流星（後書き）

お姉ちゃん大活躍の回でした。

取り敢えず、もっとかっこ良いおっさんをもっとかっこ良く書きたい。

さて、次回はついに選択の時。

いろいろとアンケートも取りたいと思ってます……お楽しみに！

第十三話　天下分け目の時　前編（前書き）

結構長くなってしまったので前後編に分けました。

アンケートも次回になります。

力量不足で申し訳ないです。

第十三話　天下分け目の時　前編

時刻は午後に差し掛かったばかりの頃。

白熱した模擬戦が終わって、演習場内の広場に仮設された交流会場に両陣営の面々が続々と集まってきた。

交流会は各員が入り交じって食事や会話を楽しみつつ、互いの健闘を讃え合ったり、意見を交換したり、親交を育んだりとするのが目的である。

つまりは連携強化の一環ではあるが、出される食事が立食形式……と言っては聞こえが良いが、ようするにバーベキューなのでこちらを楽しみに毎回参加する者も多くいる。

そんな中、まずは開会の挨拶のため、今回の合同演習を企画した管理局を代表してレジアス中将が壇上にあがった。

「うぉほん……地上本部のレジアスだ。皆、早朝から御苦労だった。さて、今回の演習は都市戦を想定したものだが、それは即ち我らが最も経験する現場である事は言うまでもない。この演習場では関係各員以外に誰もいないが、実際の現場では市民の避難誘導、事件区域の封鎖などを迅速に行わなければならないのだ。これらの事を踏まえ、各員、弛まぬ精進を続けてもらいたい。諸君等のこれからの活躍に期待する。……ふ、長話は嫌われるからな。これぐらいにしておこう。では、これより時空管理局並びに傭兵ギルドの交流会を開会する。一応、無礼講という事だが、みな節度を守って楽しむように……以上だ」

レジアスの開会の挨拶が終わり、我先にと方々に散っていく傭兵ギルドの者達の顔は、文字通り肉に餓えた獣のように見えた。

この交流会の食事代は完全に管理局持ちなのでそれも仕方ないのだろう。

そのような場でティアナは食事もそこそこに、一人ビルの壁を背に佇んでいた。

「しっかし、あん人はほんまにカリスマやなぁ。部下の心って奴をよう知ってるわ。流石は地上本部にその人ありって言われるだけのことはあるわな。なぁ、そう思わへん……ティアナ」

唐突にそんな関西弁がティアナの耳を打った。

ふと、目を声の方に向けるとそこにいたのは、

「……八神か。わざわざご苦労だな。こんな所まで来て他の連中に睨まれても知らんぞ」

「もう睨まれたから別にええよ。それよりもええもん見させて貰ったし、聞かせて貰ったからプラスの方が上や」

「そうか、それは上々だな。それで……私に何か用か？」

「送られてきた資料、読ませてもろたで。ほんま完璧やな。めっちゃ解りやすかったわ。時系列順に並べ、それぞれの事件の特徴を挙げ、現場の状況や被害者の……あっ、その、堪忍なぁ……お兄さんの事、知らへんで私……」

はやては急にばつの悪い顔になり、ティアナに謝罪する。

事件の被害者の中にティアナの兄がいる事を知らずに、このようなティアナの悲しみを掘り起こすような仕事を頼んだ事にはやては言いようのない罪悪感を抱いていた。

「気にするな」

「へ……」

「気にするなと言ってるんだ。お前が気にしたところで兄が帰ってくるでもなし。当事者がいいと言ってるんだ。素直に聞いておけ」

「そっか。おおきになティアナ」

ティアナのその凛とした声にはやては気を持ち直したようだ。

「でな、その……契約のことなんやけど」

「ここにいたのか……ランスター」

突然、二人の会話に入ってきたのは威厳と貫禄に満ち満ちた人物だった。
その人を確認するや否やはやては即座に最敬礼し、件の人物の名を呼んだ。

「ご苦労様です。レジアス・ゲイズ中将」

「ん……ふん、本局の小狸ではないか。背が小さすぎて見えなかったわ。で、貴様が何故ここにいる？」

はやての身体的特徴を諸に捉えた皮肉が突き刺さるがはやては気にせず自分が来た表向きの理由を述べた。

「はっ、この度の部隊設営に伴う諸々の準備と挨拶をと思いまして」

「それで、真っ先に私に声を掛けてきたのか」

「ほう、ランスターに声を掛けるのが貴様の言う準備か。それとも儂よりも先にランスターに挨拶か。儂も随分と舐められたもんだな。なあ、ランスター」

「くくっ……ええ」

ティアナは突然のレジアスの振りに苦笑しつつも是と答えた。

しかし、流石は本局嫌いの筆頭と言うべきレジアスの皮肉である。
どうやらレジアスも日々の仕事で相当にストレスが貯まっているようだ。
矛先にされたはやては堪ったもんではないだろう。
既に心のライフはゼロに近くなっている。

「と、とんでもないです！　もう、ティアナ……なんちゅう事言ってくれんの。ちょっとは私の立場ってもんも考えてえな」

「くくっ、すまんな八神。中将殿、彼女は私を勧誘しに来たんだ。契約してくれってな。まあ随分と熱心に誘ってくれている。まだ決まった訳ではないがな」

「ほう、お前との契約を？　ふん、成る程な……考えたな小狸。確かにランスターならば実力は申し分ない。それに局員でもないから魔導師ランクの保有制限も引っかからないと言う訳だ。だが、儂は正直貴様が気に入らん。だから楔を撃ち込ませて貰うぞ」

「へ……」

「ランスター、仕事の依頼だ。もし、お前がこいつに付くならこいつの部隊を監察し、儂に逐次報告しろ。どんな些細な事でも構わん」

レジアスが撃ち込んだ楔。

それはティアナをスパイとして送り込む事であった。
その突然の依頼にティアナは一瞬唖然としながらもすぐさま意図を理解し、そして了承する。

「ふむ、了解した中将殿。ま、そう言うことだ八神。私を抱え込むデメリットが一つ増えたな。これでなお、私との契約を望むか？」

「当たり前や。悪いけどその程度じゃあ諦めへん。明らかにメリットの方が大きいからな」

「だ、そうだが中将殿」

「ふん……この程度で諦められたらそれこそ拍子抜けだ。もし、そうであったなら儂が潰すまでもなくこいつの部隊は壊滅するであろうよ」

言いたい事を言い尽くし、レジアスはその場を後にした。
はやては今の事を含め、改めてティアナに誘いを掛ける。

「まあ、こうやって楔を撃ち込まれた訳やけど……でも私はどうしてもティアナに来て欲しいんや。お願いします」

そうやって、再度頭を下げるはやて。

自分の部隊が不利な状況に陥ってもティアナを欲するのは彼女を高く評価している現れだろう。

だが、ティアナにはもう一人……契約を希望する者がいる。

Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティ。

彼はティアナの望み……兄を殺した仇の情報を、真実を知っているかも知れない。

ティアナの心は揺れていた。

「八神……すまんが答えは少し待ってくれないか。実はもう一人、私と契約したいと言う者がいる。そいつもお前同様に私に依頼してきた者だ。どちらの評価がより高いか……そいつと話をしてから改めて決めようと思う。結果がどうなるにしろ一度連絡をいれるからそれまで待っていてくれ」

「そうか。けど、誰なん？　その契約希望者」

「悪いが守秘義務だ。お前、分かってて聞いてるだろ」

「あは、バレたか。ええよ、待ってるわ……吉報をな」

「ふん、ではな八神。独眼竜によろしく言っておいてくれ」

そう言って、ティアナはスバル達を探すため、その場を離れようと

した。

その後ろ姿を見て、はやては誰にも聞こえないような小さな声でこぼした。

「今更なんやけど……ティアナ、何で政宗君の事を独眼竜って呼ぶんやろ？　それにあの二人、なんや昔からの知り合いって言ってたけど、何時知り合ったんや？　政宗君の秘密……ティアナは知ってるんやろか。なんやろ……なんか胸がムカムカするわ。仕事忙しいしストレスかなぁ……」

午後三時を回って、人も疎らになってきた頃。

暴飲暴食の限りを尽くしていたスバルを彼女から離れまいとするギンガから無理矢理に引き離し、スピアーノの運転するＦＩＡＴ５００ＳＰＯＲＴの助手席に乗り込んで帰路についたティアナはもう一人の契約希望者、Ｄｒ．スカリエッティの事を考えていた。

今思えば、彼には力押しに依頼と契約を持ちかけられたので、彼の目的やその契約内容を全く知らないのである。

普段はそういった事にはあまり関心を寄せないティアナではあるが、相手が相手だけに多少の興味を覚えるのは仕方のない事だろう。

お腹が一杯になって幸せそうに後部座席で寝ているスバルを微笑ましくも恨めしく思いながら、ふとティアナの耳に覚えのあるメロディが流れてきた。

何やら百合百合しく二人の女性が歌う曲だが、どうやらゼフィロスの通信の着信メロディのようである。

「なんで秘〇ドールズ……」

「うっさい！　悪かったわね！　個人的に好きなのよ中〇麻衣。声も似ているし」

ちなみに、月村さん家（ち）のすずかさんも同じ着メロを使ってるのは言うまでもない。

閑話休題（それはさておき）、

「で、誰から？　ゼフィロス」

『えーと、クアットロさんですね。繋げますか？』

「クアットロって……ああ、あの三人組の。まだレリックとやらは手に入れていないんだけど何だろう？　まあいいわ、繋げて」

掛けてきたのはどうやらあの夜に出会った三人組の一人であるお下げ眼鏡のクアットロであるらしい。

一体全体何の用なのかと、あれこれと考えながらティアナは通信に出る。

空間モニターが開き、少し間延びした、後ろで寝ているスバルと割とよく似た声が聞こえてきた。

モニターには映像は出ず、ミッド語でサウンドオンリーとのみ書かれている。

〈もしもし、ティアナさんですかぁ。クアットロさんでぇーす。お久しぶり〜〉

「ああ、私だ。久しぶりだなクアットロ。トーレは元気か？」

即座に仕事用の口調に切り替えて喋るティアナ。

最早、二重人格だと言われても納得してしまう程の変貌だとスピアーノは顔に出さずに思った。

〈はいー。元気すぎて困っちゃうくらいですわ〜〉

「そうか、それは上々だ。で、何の用だ？　レリックはまだ見つかってないぞ」

〈いえいえ、今日はその事では御座いませんの……今、お一人ですか？〉

「いや、スピアーノともう一人いる。聞かせられない話か？」

〈ちょっとお待ちを……ええ……はい……では、宜しいのですね……分かりました……〉

どうやらクアットロは通信の向こうで誰かと話しているようだった。これから言う事をティアナ以外に聞かれてもいいかというのを確認しているのだろう。

声の反応を見るに許可が下りたようだった。

〈お待たせしましたわねティアナさん。では、ドクター……どうぞ〉

「ドクター……だと？」

〈そうさ。久しぶりだね太陽（ソル）の烏（レイブン）。元気だったかね？〉

聞こえてきた声は先ほどからティアナの思考に上っていた人物のものだった。

と、同時に今まで何も映していなかったモニターに映像が入り、その正体を露見させる。

そこにいたのはやはり、希代の天才にして狂科学者（マッド・サイエンティスト）、Ｄｒ．スカリエッティであった。

「なっ、ジェイル・スカリエッティ！？　何故、お前がそこにいる！？」

〈ふふっ、驚いてくれたようだね。いやまあ、私も君と娘達が知り合いだった事には結構驚いたんだが……いやいや、人の縁という物は分からないものだ。何しろ、どうやって君と連絡を取ろうか考えていた時にまさかトーレから君の名を聞くとは思わなかったからね〉

「娘だと！？　トーレが……と言うかあの三人がか？」

〈彼女達だけではないさ。私の子供達はまだまだ沢山いる。今度紹介してあげよう。それにトーレも君との再会を楽しみにしていたよ。相当、君にご執心のようだね。今も君との再戦にむけてトレーニングの真っ最中だ〉

「相変わらずだなトーレは……で、悠々とお前が出てきたという事は用件は契約についてか」

彼とティアナの直接的な接点はその事をおいて他にない。

まあ、トーレ達の事も接点と言えば接点ではあるが。

「ククク、ご明察。では早速答えを聞こうか。君はあのデータから何を読み取ったんだい？」

「……魔導師連続殺人事件は管理局が引き起こしていると言う

事か」

「ふっ……ふはははは、流石は太陽の烏（ソル レイブン）だ。やはり私が望んだ通りの優秀さだ」

「ふん、別にこれは私だけで出した答えじゃない。スピアーノも後ろで寝ているスバルも手伝ってくれたからな。あえて言うなら私達のチームで突き止めた事だ」

〈ほう、そうかね。じゃあ、契約するならチームでの方が良い。君とラパン君と……もう一人は知らないがなかなかに優秀なのだろう？〉

そのティアナの言葉で運転中のスピアーノは感涙に噎いた。

それはティアナから確かな仲間だと認められたと言うことなのだから。

涙で少し滲んだ目ではハンドル操作が荒くなるのも……まあ、仕方ないと言えるだろう。

時間的なものか閑散としたハイウェイをフラフラと蛇行するＦＩＡＴ５００ＳＰＯＲＴ。

いくら閑散としているとは言え、他の車が全く無いと言う訳ではない。

よく事故らないものである。

「スピアーノ！　危ないからちゃんと運転しろ！」

「……うぇ！？　あっ、はい！　すみませんティアナさん」

「全く……で、どうなんだドクター？」

〈うん？　ああ、依頼の答えかい？　正解だよ。君の言う通り管理局が魔導師連続殺人の黒幕さ。流石に実行犯までは私でも分からないがそれだけは確実だ。しかし、まったく本当に厄介な組織だよ……管理局は〉

スカリエッティの心底嫌だと言う表情を見てティアナは何となく彼が何を求めているのか分かったような気がした。

ようするに彼は、

「成る程。それで私との契約を望むか。要は管理局と一戦交えたい……そうだなスカリエッティ」

〈そう。まさしくその通りだ太陽の烏（ソルレイブン）。私もいい加減鬱陶しいのだよ。私はただ平穏に……誰にも邪魔されず思うがままに自分の好きな事を研究していたいだけなのに〉

もの凄く不穏な感じがするが、それがどうやらスカリエッティがティアナを求める理由のようだ。

彼の動機が見えた事ではやてかスカリエッティ……どちらに付くべきか本格的に詰める必要があるとティアナは考える。

「お前の理由は分かった。今の段階で断定することは出来ないが、熟考した上で答えを出す事を約束する。決まったら追って連絡するから今日はこれで切るぞ」

〈ふむ、もう少し話したかったのだが仕方ない。今日の所は諦めるとしよう。では、吉報を楽しみにしているよ太陽の烏（ソル レイブン）〉

そういって通信が切れ、車内に静寂が戻ってきた。

ずっと二人の会話を聞いていたスピアーノが何か言いたそうにしているのを感じて、ティアナはそれに先んじて口を開く。

「スピアーノ……取りあえず今はアジトに急いでくれる。あとで話があるわ」

「えっ……はい！　ティアナさん、しっかり掴まっててて下さいねぇ……飛ばしますよー！」

ギアをセミオートからマニュアルに変更し、巧みなシフトチェンジとハンドル捌きで公道を爆走するスピアーノ。

明らかに制限速度を超えているが良い大人は真似しちゃダメだぞ。

まあ、その甲斐あってか日が沈み切る前にアジトへと辿り着いた。

「スバル、起きて……起きなさい……起きろぉぉーーー！！」

「うぇ！？　はいぃーーー！！」

「着いたから起きろスバル」

「えっ、はい降ります……けど……その……ティアが降りてくれないと私……降りれないんですけど」

ＦＩＡＴ５００は３ドア式なので助手席の人が降りないと後部座席の人は降りれないのである。

その言葉にはっ、と己の失態に気付いたティアナはばつの悪そうな顔をして、すぐさま助手席側のドアを開けて車外に出た。

「ゴメンゴメン。ほら、これで降りれるでしょ」

「うん！　ん……あれ？　なんかティアの喋り方がいつもと違うような……」

スバルはティアナの喋り方に違和感を感じた様だった。

それを見てティアナはアジト一階の車庫に愛車を駐車して出てきた

スピアーノに食事の準備をお願いし、スバルに素の口調で話しかける。

「いつものは仕事用の話し方。素はこっちよ。まあ、あんたにこれで話しかけるの初めてだから違和感バリバリでしょうけど」

「うーん……まあ、なんて言うかすごく新鮮な感じ」

「……やっぱ止めるわこの喋り方。あんたにはどうやら不評みたいだし」

「わーーちょっと待って！？　全然！　大丈夫！　すごく可愛い！！」

「可愛い……って、そんなの私の柄じゃないから」

必死に自分のキャラじゃないと否定するティアナだが既に顔が真っ赤になっている。

スバルの思ったままに出る真っ直ぐな言葉は変に飾らない分、物凄い威力を持ってティアナに届いたようだった。

パンチでも言葉でも威力が一番高いのは正拳突きなのである。

「そうかなぁ？　ティアってば普通に可愛いと思うけど」

「恥ずかしいからもう言わないで……ご飯食べてから皆で話し合う

事あるんだからあんたも来なさい。ギンガには私から連絡しておくから」

「へっ……ゴ、ゴチになります！」

既に辺りには良い匂いが漂ってきている。

それを嗅ぐや否やスバルは全速力で階段を駆け登っていった。

第十三話　天下分け目の時　前編（後書き）

次の話でどちらの勢力に付くか決まります。

ですが、そろそろ戦国ＢＡＳＡＲＡ３宴が発売されるので更新が遅れるかも。

しかしその分、宴に出たネタも入れていきたいと思ってます。

お楽しみに！！

第十四話　天下分け目の時　後編（前書き）

本当にお待たせしました。

第十四話　天下分け目の時　後編をお送りします。

この後にアンケートもありますのでご協力下さい。

第十四話　天下分け目の時　後編

昼にバーベキューを食べたティアナとスピアーノの二人はあまり重い物を食べたいと思わず、結果夜はあっさりとした和食が中心だった。

なんだか物足りないと感じていたスバルはお茶碗をそっと出しどころか元気良く突き出した五杯目のお替わりでようやく満足したようで、

「やっぱ日本人はライスにミソスープだよね。特にご飯のお供は南高梅に限るってお父さんが言ってたなぁ……ところでナンコウウメって何だろう？」

と、随分と突っ込みがいのある事を言い放った。

それに透かさず反応したのは驚くべき事にティアナである。

「いや、あんたバリバリのミッド人でしょうが。そして！　南高梅は至高のご飯のお供！　個人的には『焼き梅』がベストよ。覚えておきなさい」

「いやいやティアナさん。ごはともは誰が何と言っても酒粕漬けが一番ですから。肉でも魚でも野菜でもいける万能振り。あれこそ究極のごはともですよ」

前世が日本人の二人は、どっちのごはともが至高だの究極だのと言い争っていたが、スバルのどっちも食べたいという声で取りあえず通販で買ってくる事が決定した。

それはさておき、

食事も済み、後片付けも終わった三人はこれからの事を本格的に話し合う為に三階の応接室へと入った。

「さて、取りあえず今日はご苦労様。今回の合同演習はなかなか良かったわ……と、一応は言っておきましょう。でも、スバルは一回戦目でギンガに気絶させられて終了。スピアーノは影分身に任せっきりで本人はほぼサボり。これでは連れてきた私の立つ瀬もないので後でお仕置きするとして……」

応接室に備え付けられた来賓用のソファにどっかりと座り込んだスピアーノとスバルに対し、ティアナは今日の二人の評価を述べた。

そのあまりの評価にまずはスピアーノが立ち上がり、ビシッとどっかで見た事のあるポーズを決めて反論する。

「異議あり！　対外的には私はしっかりと働く有能な後方支援と認識されてる筈です！　決してサボっていた訳ではありません！！」

「異議を却下。二回戦目以降、私の目の前でのほほんと煎餅と宇治茶を食していた時点でアウト。判決は有罪。スピアーノには反省文

の提出と最低一週間の訓練強制参加を申しつけます」

「そ、そんなバカな……」

がっくりとうなだれるスピアーノ。

その姿を目にし、スバルは恐る恐ると言った感じで立ち上がった。

「あの、その……ごめんなさい。ティアが折角訓練してくれたのにこんな結果になっちゃって……」

「スバル、今の自分の強さがどの程度なのか実感できた？」

「うん……」

「そう。ならこれから自分がすべき事……分かるわよね？」

「うん。私、もっと強くなりたい。どんな相手が敵でも負けないくらいに強く、強く。その為にもまずは自分の短所を克服するつもり」

「グッド。まっ、頑張んなさい。じゃあ、この話はここまでにしてこれからの話をするわ。まずは……」

そう言うとティアナは大きな空間モニターを開き、そこに議題１「チームについて」、議題２「契約について」と書き込んだ。

「今日話す議題は二つ。そのまず一つ目がこれよ」

「「チーム？」」

「そう。これから私達でチームを組みます。無論、ソロでの活動もするけど概ねは一つの依頼にチームで当たると思っといて。で、その時にチーム名が必要なのよ。別に何でもいいんだけどね。一応、案としては『三本足（トライクロウ）』なんて考えてるんだけど……もっと良いのがあったら言ってね」

『流石はマスター。こう書いてこう読ますなんて実に厨二っぽいネーミングセンスです。それでいてちゃんと自分達の事を表していますし……正直言って脱帽ですよ私は』

ゼフィロスの褒めているんだか貶しているんだか分からない言葉にティアナはうっさい！　と返す。

そうしている間に高々と声が挙がった。

「はーい！」

「はい、スバル君！」

元気良く手を挙げたのはスバルだ。

ここは小学校か！　と、本来なら突っ込むべき所であるが、割とティアナもノリノリでそれに付き合う。

ティアナはこの三人でいる時は出来るだけは素の自分でいようと思っていた。

「はい、私は『ティアと愉快な仲間達』が良いと思いまーす」

「うーん、ベタね。悪いけど却下」

「う～、残念」

「はい」

「……スピアーノ」

「はい、私は『幻影旅……」

「却下。あんたのはどうせネタでしょうが」

「シクシク……」

さめざめと涙を流す……振りをするスピアーノを尻目にティアナは呆れた様な仕草で溜息を一つ吐く。

そんなに詳しいわけではないティアナであってもスピアーノがネタを言ってるのが分かるくらい彼女の事を理解してきていた。

「もう『三本足（トライクロウ）』で決定するわよ。なんかアンタ達からマトモなの

が出てこないような気がするし。さて、次の議題ね。次は……」

「あのっ！！」

ティアナが次の議題に移ろうとした時、それを遮るかのようにスバルが大声を上げた。

「ん、何、スバル？」

「えっと、あの、その……実はちょっと話して起きたい事があるんだけど……いいかな？」

「別にいいけど……何？」

「その……私の体の事。折角さ、チームになったんだから知ってて貰いたいんだ……ティアに」

「あの……いつも思うんですがスバルさんって私の事嫌いなんですか？　なんか意図的に無視されてるような気がするんですが」

「スッピーの事が別に嫌いって訳じゃないよ。ただ興味がないだけで信頼はしてるから」

「いや、信頼してくれてるのは嬉しいんですけど……そんなにはっきりと興味ないって言わなくてもいいじゃないですか」

嬉しいと悲しいの両方の感情が混ざったスピアーノの表情は非常に

微妙な感じで、虚ろな目をスバルに向けた。
そのスバルはいざ話すとなると中々に踏ん切りが付かないのか、顔を下げて悩んでいる。
その様子は自分の秘密を知って、ティアナに嫌われたらどうしようと言った感じだった。
やがて決心が付いたのか、見開いた瞳には決意が込められていた。

「ティア……私ね、戦闘機人って言うサイボーグみたいなものなんだ。純粋な、生身の、人間じゃ、ないの……」

「……はっ？　えぇ！？　いや、ちょっと待って下さい。戦闘機人ってもしかしてあの……」

「……知ってたわ。アンタが……そうだってね」

「って、ええっ！？　知ってたんですかティアナさん！？」

「そりゃ、一応曲がりなりにもスバルの師匠なんだから弟子の体について知っとくのは当然でしょう。それに合わせて訓練メニュー考えなければいけないんだから。とっくにナカジマ三佐から聞いてるわよ」

スバルのまさかの正体に目を剥いて驚くスピアーノだったがティアナはどうやら以前から知っていたようだ。

まあ、スバルの師としてある以上、弟子の体調管理もその仕事の内であるので、それも当然と言えば当然なのだろう。

「やっぱ知ってたんだティア……だよねぇ。じゃなきゃ拳だけでビル一棟を破壊しろだとか、殺傷設定の弾幕をひたすら回避し続けろだとか……普通の人間じゃ死ぬような訓練やらないよね」

「事ここに至ってリアクションがそれですか！？　もっと他にあるでしょうがそれっぽいのが！　ほら、ティアナさんも何か言って下さいよ」

「いや、この後スピアーノにも同じ様な事をやらせるけど」

「ほらっ！　私、詰んだ！！」

あっけらかんと答えるスバルにスピアーノは納得できないのかティアナに援護を求めた。

だが、そんな彼女に返ってきたのは致命的な一言である。

戦闘機人のスバルが気絶までするようなティアナの訓練なのだ、その凄まじさは筆舌に尽くし難い。

まあ、そんな瑣末事は置いておくとして。

「けど、私もさ……スバルの告白を受けてって訳じゃないんだけど、ここは私達の事も話しておくべきじゃないかなと思う訳よ？　どう、

スピアーノ？」

「えっ……ああ、まあいいですけど。確かにスバルさんばかりに秘密を喋らせるのも難ですしね。チームとなったからには共有ぐらいしてもいいのかもしれません」

「へっ？」

決意の篭もった状態から通常に戻った瞳をぱちくりと瞬きさせて、スバルは首を傾げた。

「スバル、実は私さ……」

「スバルさん、実は私は……」

ごくっ、とスバルの唾を嚥下する音が聞こえ、二人は己の秘密を言い放った。

「前世の記憶があるの」

「怪盗ラパンなんです」

ゴチンと、スピアーノが身を張った渾身の暴露（ボケ）を披露した直後、彼女は後頭部に強い衝撃を受けて意識を失った。

「……と、まあそんな感じでかつての私、雑賀孫市は天下分け目の関ヶ原の戦いで死んで、この世界にティアナ・ランスターとして生を受けたわけね。スピアーノも同様。つーか、前世で知り合いだったしね。敵だったけど」

スピアーノが目を覚ましたのはティアナがスバルにかつての自分の事を説明している所であった。

「あれ、私は……何で頭が痛いんでしょう？　何かとても大事なことを言い放った筈なのに思い出せません」

「あっ、起きたのスピアーノ……もっと寝てればいいのに」

「ティアナさん……？　ああ、そう言えば前世の事を話すんでしたっけ？　えっと、どこまで話したんですか？」

「大まかには全部話したわ。今はアンタとはお互い敵同士だったって事を話してたのよ」

ぼそっとティアナがこぼした言葉に気付かず、何故急に意識を失ったのか分からないスピアーノは消失直前の記憶を辿るが、後頭部に鈍い痛みを覚え、それを放棄した。

そして、ティアナによる第一回転生講座〜かつての私〜を聞き終えたスバルは目をキラキラと輝かせている。

まあ、それも仕方がないだろう。

時は戦国……数多の粋な英雄達(スタイリッシュヒーロー)が野望や夢、力や知謀を引っ提げて、遙かな頂きを目指し戦い合った群雄割拠の時代だ。

その時代を誇りを以て、戦いに生きた雑賀孫市という人物の生き様は、現代(いま)に生きるスバルにとって凄まじく鮮烈な印象を抱かせたようである。

「敵って言いますか、単なる雑魚でしょうが私は。実際、豊臣と雑賀の契約が切れた後、孫市いないなら余裕余裕って油断して捕まりましたしね。その後、京都の三条河原で生きたまま釜茹での刑ですよ。生まれ変わった今でさえ熱いお湯とか苦手なんですから」

「い、生きたまま釜茹で……」

スピアーノの前世の悲惨な死に様を聞いてスバルが若干顔を青ざめるが、ティアナはまた違った感想を抱いた。

「道理でアンタが入った後のお風呂、必ず微温(ぬる)いと思ったわ。つーか、どうすんのよ休暇で温泉……そんなんで大丈夫なの？」

「無論行きますとも。温泉は日本人の心ですからね。大丈夫大丈夫。草津とか勘弁ですけど」

「体はミッド人だけどね……今更か」

「休暇で温泉！？　私も行きたい！！」

「はいはい。ちゃんとスバルも連れていくからご心配なく。さて、最後の議題に入る前に……スピアーノ！　私もスバルもアンタが気絶してる間にお風呂入っちゃったから。アンタが最後なんで早く入ってきて。あっ、洗濯もよろしくね」

更けるのが早まってきた秋の夜。

だが、スピアーノの心は既に冬の様だった。

それから一時間ほど経って、時刻は午後十時を少し越えた頃。

嘘泣きしながら入浴を終えたスピアーノがティアナに渋々経費で買わせた最新の斜め型ドラム式洗濯乾燥機に皆の洗い物を詰め、スタートボタンを押して応接間に戻ってきた。

途中、給湯室へ寄ったのか、手には澄んだ青緑色の飲み物が入ったコップが握られていた。

そして、ソファにどっかりと座り込むとその飲み物をコクコクと飲

み始める。

「ねえ、スッピー。それってジュース？　私にも飲ませてよ」

「えっ、構いませんけど。でも、これはジュースじゃ……」

スピアーノの話の途中にも関わらず、スバルは許可を聞くや否やコップを取り、一気に呷った。

だが、スバルのジュースを楽しみにしていた顔は一転して渋い顔へと変貌する。

「うぇぇ……つ、土の味がする。何……これ？」

「私の話を最後まで聞かないからですよ。これはごぼう茶です。最近ハマりましてね、美容と健康に良いんですよ」

涙目のスバルからごぼう茶のコップを受け取ったスピアーノはそれを最後まで飲み干し、応接間に備え付けられている簡易の流し場へと片づけた。

「はいはい、雑談はそれくらいにしてさっさと話を終わらせて寝るわよ。それとスピアーノ、美容と健康を気にするなら煙管吸うの止めなさいよ。アンタ、未成年でしょうが」

「いや、これは本物じゃなくて電子煙管です。アロマ成分入りで癒し効果もあるんですよ」

また同じようにソファに座り直したスピアーノはティアナの苦言にそう返した。

未成年の喫煙、ダメ。ゼッタイ。　……である。

「まあ、いいわ。さて、話は今度の契約についてよ。スピアーノ、データ出して」

「はい。これですね、どうぞ」

ティアナの指示を受け、スピアーノは諸々のデータを空間モニターに表示させた。

これらはスピアーノがティアナに頼まれ、前々から準備していた契約希望者達の調査データである。

ティアナはそれらを参照し、これから自分達が執る針路を決めようと考えていた。

「まず、第一の契約希望者は時空管理局本局の八神はやて二佐。契約内容はこれから作られる彼女の部隊に参加する事です。ティアナさんを部隊の切り札ではなく隠し札に迎えたいと言ってましたし、どうやら色々と裏事情が込み合った部隊のようですから表だっての

戦力ではなく裏方、もしくは保険と言ったところでしょうね。もしくは情報面での実力も見せつけたので捜査関係を任されるかもしれません。魔導師連続殺害事件はティアナさんにも関係ある事件ですし」

やはりこう言うプレゼンの場ではスピアーノの本領が発揮されるのだろう。

収集分析した数々のデータを元に、チームが八神はやてに組みした場合の予測を立てた。

その予測が自分とほぼ変わらない物である事を理解したティアナはスピアーノの予測に補足を付ける。

「ええ、私もそう考えてるわ。表の戦力は相当色んな所からコネで集めたみたいね。彼女の親友である「白い悪魔」と「金色の閃光」、ミッド地上の天才スナイパー「鷹の目」、それに固有戦力の「ヴォルケンリッター」。恐らくこの辺りが彼女らの切り札でしょうね。問題となる魔導師保有制限も各人にリミッターを付けることで回避してる。それでも奇跡を通り越して異常と言える程のとんでもない戦力よ。何処ぞと戦争でもする気かっつーの」

リミッターとは魔力量を制限させ、相対的に魔導師の力を落とす事ができる物で元々は高ランクの違法魔導師を拘束する為に開発された装置である。

八神はやてはそのリミッターの出力を調整し、任意のランクまで魔

力を落とすという裏技で、普通では有り得ない程の戦力を集める事に成功したという事なのだ。

「隊長陣はあくまでも切り札。平時は芽のある新人を訓練し、非常時に即出動してこれに当てる。事件に即応出来る独立部隊の運用……その実験部隊と言ったところでしょう。そうなると新人の訓練時における仮想敵になるのも仕事の内ですかね」

「まあ、そうなるでしょうね。あっ、そうなったらついでにスバルも鍛えて貰おうか。私だけじゃどうも教え方に偏りが過ぎるし、向こうには本職の教導官もいることだし丁度いいわ」

「ええぇーー！！　ティア以外は嫌ぁーー！！」

「ああ、あと私個人にレジアス中将からこの部隊の内偵依頼も入ってるんだけど……スピアーノ、他に何かある？」

スバルの不満の声をさらりと流したティアナは、スピアーノに次を促した。

うぅ……と、スバルの声が涙声になるがスピアーノと違い、彼女の場合はガチ泣きである。

「いえ、現状分かっている事はこれぐらいで……って、ああっ！！　すいません一個忘れてました。えーと、この部隊……機動六課ですね。一応、遺失物管理部の機動部隊と言う事なので基本的にはロストロギア関連の事件を担当するんですが……実はある特定のロス

トロギアの対策専門の部隊でしてね。その特定のロストロギアってのが……実はレリックなんです」

「そう言えば八神が最初にそんな事を言っ……ん、レリック？　……あっ！」

「はい。物の見事にかち合いましたね……彼らに」

「て、言うか私達が組みした方の逆側と敵対するって訳じゃない。あまり好きな言い方じゃないけど運命感じるなぁ、いやホント」

「えっ？　えっ？　どういう事？」

完全に話に置いて行かれているスバルの様子でティアナは彼女にスカリエッティの事を話していない事にようやく気が付いた。

てっきりデータ整理の時に話したと思っていたのだが、すっかりうっかり忘れていたようである。

「あー、スバルには言ってなかったっけ？　実はもう一人契約希望者がいるのよ。スピアーノ、八神のはもういいから次のを出して」

「はい。えー、続いて第二の契約希望者。広域指名手配を受けている次元犯罪者、Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティです。契約内容は管理局と一戦交えるから手伝ってくれって言うところですかね。正直、彼がどれほどの戦力を持っているのか全く分からないのが難点ですが、あの熱心な誘い様から見ると戦力としてはメインに置いてくれるかもしれません。まあ、トーレさんの戦闘力がティアナさん

とタメを張れるぐらいの物ですし、あのクラスの実力者が何人もいるならそれも分かりませんが」

「そうね。そう言えばアイツ……娘はまだまだ何人もいるとか言ってたっけ？　と、言うかトーレ達が娘って事は、結婚していて奥さんがいるって事？　ぶっちゃけ想像出来ないんだけど」

「ええ、それに関してなんですが……ん、どうしましたスバルさん？　そんな呆けた顔をして」

スバルはポカンと大きく口を開けたまま呆けており、先ほどからのティアナとスピアーノの会話は全く聞いていないようである。

「スバル、取りあえず話はしっかり聞いてなさい。後でちゃんと説明してあげるから」

「あっ、うん。でも、スカリエッティってもしかして……」

ティアナの声で意識をこちらに戻したスバルは多少の驚きを覚えつつも話を聞こうと耳を傾ける。

小声で何かを言ったようだったがティアナには聞こえなかったようだ。

「続けますよ。スカリエッティは遺伝子工学と生体工学の権威であらゆる人工生命の父とも呼ばれる程の人物です。そんな彼が己が娘

と呼んでいる存在。それは恐らく彼が作り出した者達の事でしょう。例えば誰かのクローン体、強化人間、人造魔導師、後は……戦闘機人とかですかね」

「っ、スピアーノ！！」

「あくまで推測です。ですが、私は一番それが正解のような気がしています。彼の持つ遺伝子工学と生体工学の知識の集大成が戦闘機人なんです。人並み外れた身体機能、ＩＳと呼ばれる特殊能力、コストは掛かりますが安定して供給できる生産力。倫理さえ無視できれば非常に優れた生体兵器です。スバルさんには悪いですけど……スバルさん？」

「ふぇ？　何？」

戦闘機人を生体兵器と評したスピアーノはその戦闘機人であるスバルの反応が気になって、ふと空間モニター向こうに見える当人に目で向ける。

だが、そこにいたのはきょとんと首を傾げているスバルであった。

「いえ、何かこう……ショックとかないんですか？　結構酷いこと言ってる自覚ありますよ……私」

「え？　何で？　事実じゃん。むしろ私としてはティアとスカっちが知り合いだったと言う事の方がショックだよ」

「「はぁ？」」

その言葉を聞いた瞬間、二人の表情から一切の感情が無くなった。
そして僅かの間を置いて理解の後、それは驚愕と言う形で返ってくる。

「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！！！！？？？？」」

本日最大の絶叫であった。

スバルの大暴露、「実はスカリエッティとは知り合い」をブチかまされたティアナとスピアーノの二人は意識がどこかの世界に飛んで行ってしまった為、大本の原因であるスバルはそんな二人が現世に戻ってくるのをお茶を飲みながら待っていた。

勿論、飲んでいるのはごぼう茶ではなく普通にペットボトルのお茶である。

名前が「午前の玄米茶」なのが非常にアレなのだが……

「うぅ、私は一体……はっ！」

「また詰まらぬ物を……はっ！」

「あっ、二人とも起きた？」

ようやく目を覚ましたティアナはすかさずスバルに詰め寄り、展開したゼフィロスをスバルの額にを突き付けた。

その突然のティアナの強行にスバルは全く反応できず、見る者が底冷えしそうな形相と共に詰問が開始される。

「なんで貴様があの狂科学者（マッドサイエンティスト）と知り合いなのか……しっかりはっきり説明しろ。でないと……」

「え、えーと、私のデバイスを作ってくれた人が同じ狂科学者（マッドサイエンティスト）で、偶にデバイスの調整に行ったら三回に一回ぐらいの割合でスカっちが遊びに来てて、いっつも二人で専門用語たっぷりの議論を酌み交わした後、ジャパニメーションの話とかで盛り上がるの。その時に私も混ぜてもらってお話したり、私が戦闘機人だって教えたらは娘達の調整の参考になるからってタダで体診て貰ったりしてたんだ。うん、そんな感じ……かな」

スバルの答えを聞いたティアナはゼフィロスを待機状態に戻し、凄く疲れた様子で自分の椅子に深々と座り込んで大きく溜息を吐いた。

その姿はまるで倦怠期に突入した３０代のＯＬのようで、酷く哀愁

が漂っている。

「……ごめん、スピアーノ。私……もう、どこから突っ込んだらいいのか分からない」

「はあ、ティアナさんはまだ彼女に突っ込もうとか思ってたんですか？　生憎ですが私はもうとっくに諦めてますよ。ハハハ……」

「アンタもどっちかと言うとボケの方でしょうが！！」

まあ、どっちもどっちである。

何はともあれ、

「もう何かどうでも良くなってきた……早くどっちに付くか決めて、さっさと寝よう」

「そうですね。私個人としては管理局側がいいと思うんですけど……スバルさんは？」

「私はやっぱスカっちの方かな」

「へえ、一応理由を聞きましょうか」

スピアーノとスバルの二人はそれぞれの意見を述べた。

ティアナはその理由を聞き、どうやらそれで決に入るようである。

「私の理由ってのは、ずばり敵を騙すにはまず味方からってやつです。我々は既に事件の黒幕が管理局である事を掴んでいます。それがどの辺の位置に存在する奴らかは分かりませんが調べている内に確実に接触し、そして消そうするでしょうね。何せ自分達を追う者なんですから。そこを反対に一網打尽するってな訳です」

「ふむ……八神に付く場合のメリット、デメリットは？」

「この場合、メリットは管理局の組織的な協力が得られる事と、契約満了の後に社会的立場が保証される事ですね。デメリットとしては基本的に管理局は逮捕前提なのでティアナさんが仇を見つけたとしても討つ事は出来ません。それに普段の訓練や捜査、内偵であまり自由な時間が取れないと言うのもありますね。私からは以上です」

スピアーノの説明にティアナは頻りに頷き、次いでスバルに理由を問いた。

「スバルは？　何でスカリエッティの方なの？」

「んーとねぇ、スカっちって話してみると案外良い人でね。何か、上が言うから仕方なく人造魔導師とか研究してるのに、それが原因で管理局に追われる事になってホントに嫌になる……って言ってたから、どうにか協力してあげられないかなって。それでスカッちにティアの事を話したらもう絶賛しちゃって！」

「やっぱり貴様かァァァーーー！！　あの狂科学者（マッド・サイエンティスト）が私に興味を示したのは貴様のせいかァァァーーー！！」

またもや飛び出したスバルの暴露に、ティアナはもう幾度目となる怒声を言い放った。

怒られているスバル本人は何でティアナが怒っているのか全く理解できてないようである。

もうこのやり取りに慣れたスピアーノはすかさずティアナを宥めた。

「まあまあ、ティアナさん。一応、スカリエッティに付く場合のメリットは彼が幾分かの真実を知ってそうなので仇を見つけ易いし、討つのも自由。それにティアナさんとほぼ同等の戦闘力を持つトーレさんとかが味方になる事です。反対にデメリットは管理局に敵対する事で追われる身分になるのと、それが原因で今後の活動が難しくなる事ぐらいですか」

「……むぅ」

「強いて言うならば……雑賀孫市としては管理局に、ティアナさん個人としてはスカリエッティに味方するのが良いかと。まあ、どっちを選んだとしても私達は貴方に付いて行きますよ」

「うん。ティアの好きな方でいいよ。どっちでも私、頑張るから」

二人の言葉を受け、ティアナは静かに目を閉じ、深く深く思考を深

めた。

八神はやてとジェイル・スカリエッティの言葉、思想、評価。

ティアナ自身の思い、誇り、そして願い。

その全てを一本の線に繋ぎ……答えを導き出した。

そして、ティアナは閉じた時と同じ様に静かに開眼する。

「……答えは決まったわ。私達は……」

第十四話　天下分け目の時　後編（後書き）

ティアナが選ぶ道とは……

てな訳で、リリカル本編一年前の話はこれにて終了です。

ここまで書けたのは皆様の応援があってこそだと思ってます。

次回はついにリリカル本編に突入……する前に何個か短編を書きたいと思ってます。

温泉旅行とか、スバルの訓練とか、ある休日の風景とか……お楽しみに！！

アンケート結果発表（前書き）

実施していたアンケートの結果発表です。

皆様のご協力に心からの感謝を……

アンケート結果発表

どうも、作者の班斗です。

皆様にお願いしていましたアンケートですが、この投稿を持って締め切りとさせて頂きます。

ご了承下さい。

それでは結果を報告したいと思います。

?:所属勢力

豆っ子狸陣営：２２

スカっち陣営：２４

てな感じでした。

所属勢力はかなりの接戦でしたがスカリエッティ陣営に決定致しました。

いや、本当は今日の零時に集計したんですが、その時点ではどっちも１７票と全くの同票でしたので一日待つ事にしました。

皆様、投票ありがとうございます。

?:出場権

前田利家：２

まつ：２

直江兼続：１

風魔小太郎：４

武田信玄：１

真田幸村：１０

本多忠勝：５

徳川家康：８

織田信長：３

上杉謙信：２

お市：７

前田慶次：７

松永久秀：１
天海：２
石田三成：１
長宗我部元親：２
立花宗茂：１
黒田官兵衛：１
島津義弘：１

さて、続いては出場権です。

結果は……

一位：真田幸村　１０票
二位：徳川家康　８票
三位：前田慶次　７票
三位：お市　７票
五位：本多忠勝　５票

と、なりました。

真田が首位を独走し、次いで本多や風魔が序盤に来ていましたが徳川、慶次の後半の追い上げが本当に凄かった。

一時期、徳川が真田と並びましたし、やっぱ主人公勢は強いって事なんでしょうかね。

まあ、何はともあれ。

この結果を踏まえ、さらに妄想を重ねて話を書いていきたいと思っています。

今回はご協力、本当にありがとうございました。

現在、閑話を書いてますが師走ということもあり、仕事が忙しくなってきています。

ですので、次の投稿は遅れるかもしれません。

気長にお待ちください。

閑話1　スバルの訓練風景（前書き）

閑話１　スバルの訓練風景

「じゃあ、次はウイングロードの展開の仕方ね。術式自体はインストールしてあるけど制御はそこそこ難しいから気を付けてやってみて」

時空管理局陸士１０８部隊野外演習場。

ティアナからの命を受けて研修と言う名目でそこにやって来たスバルは部隊のストライカーである姉、ギンガから即座に実戦で使える魔法を教わっていた。

スバルは今まで魔導教育と言う物を一切受けずにいたので本来ならば基礎的な物から始めるところであるが、傭兵として生きていく上である程度……まあ、最低限中の最低限ではあるが身に付けていた為、急遽こう言う形になったのである。

「そう、シールドで足場を作る感覚でゆっくり、ゆっくりと伸ばしていくの。最初は構成をしっかり意識して。空中での大事な足場なんだからしっかり保たないと墜ちるわよ」

「っとと……こう、かな？」

「うん、いい感じ。まあ、こんなに遅くちゃ単なる的だけど、最初はそれで良いよ」

今、訓練している「ウイングロード」は自由自在に道を造る魔法であり、スバル・ギンガの母親であるクイントの家系に伝わる先天魔法である。

先天魔法とは特定の血筋や特殊な資質を持つ者のみが使用を可能とする魔法の事で、ある種の稀少技能（レアスキル）の一つとされていた。

まあ、他の者にはただ難易度が高いだけで、設備や実力がしっかりしていれば使用できる物もいくつか存在している。

因みに、ウイングロードもそう言った類の物であった。

「常に自分の行きたい方向を考えるの。構成をしっかりと保ちながら戦闘もこなしつつ、さら移動先や戦術も考える。構成の単純さの割に制御が難しいのはこれが原因よ。インテリジェントデバイスを持っているとかマルチタスクの使い手ならまだしも、普通の魔導師なら同時に三つ以上の事を思考しなければならないわ。構成維持、移動展開、戦闘行動、戦術思考……それらを素早く確実にこなしてこそ、この魔法は完成するの」

「ふへぇ……そんな難しそうなの、よくギン姉もお母さんも平気で使えるよね。なんかコツでもあるの？」

聞いてるだけで難しそうな内容にスバルは顔を顰めつつ、何かコツはないのかとギンガに問うた。

ギンガは自身も通ってきた道程を懐かしみながらスバルの問いに答

える。

「ない……って言ったら身も蓋もないかな。私達を含めたお母さんの家系はね、何がどう作用しているのか知らないけど構成維持を無意識に行えるの。それが先天魔法の先天魔法たる所以ね。今は意識してやってるけど、もう少し慣れてきたら殆ど手放しで出来るようになるわ。それまで毎日訓練だから、結構きついだろうけど頑張りましょ」

「うん！　……でも、命の危険が無い分、ティアの訓練より随分とマシな筈なんだけど、何か物足りないと感じるのは何でだろう？」

「ん、何か言った？」

「んー、何も」

本人が気付かないまでも、スバルも段々とティアナ達に染められてきている様である。

訓練も二週間目に突入するとスバルの技量もだいぶ上がったようで、

「ねぇ、ギン姉！　どう？　結構上手くなったと思わないかな？かな？」

と、ウイングロードで華麗なアクロバット走行をギンガに披露していた。

スバルのその不可思議な言葉使いに、何故か鉈を持ったティアナが脳裏を過ったギンガであったが気のせいと言う事にしておく。

それはさておき、

「うん。構成もしっかりしているし、展開も早い。ホントはまだまだだけど十分よ。じゃあ、ちょっとおさらいしてみよっか？　スバル、降りてきて」

「うん？　はーい」

ギンガの呼び掛けにスバルは地上約１０ｍ付近の位置に展開されていたウイングロードから一息に飛び降りた。

そんな行動は普通なら大惨事となるが、別段ギンガも取り乱す事は無く平然としている。

それもその筈。

スバルが地面に激突する瞬間、突き出された異形の腕、スバルのデバイスであるＡＰＳブリッドがその衝撃を全て吸収してしまったの

である。

最初にこの着地を見たギンガは酷く狼狽していたが、それが三回を越えた辺りでもう驚かなくなってしまった。

本当に慣れとは恐ろしいものである。

「よっと……ギン姉、呼んだ？」

「ええ、呼んだわ。そろそろ研修も期限だし、おさらいも込めて模擬戦でもしない？」

「模擬戦？　うん！　やるやる！　よーし、今度は負けないよ」

以前の合同演習で戦い合った二人であるが、結果はスバルがストライカー達の多重バインドに絡め取られ、そこにギンガの必殺技「シューティングスター・ストライク」によって派手に吹き飛ばされて気絶すると言うものであった。

その直前のぶつかり合いでもギンガのウイングロードの前に攻撃手段がなく、文字通り手も足もでなかったスバルであるが今は同じウイングロードがある。

基礎の防御魔法三種に遠距離攻撃用に射撃魔法も覚えたし、今回こそは……と、スバルは息巻いていた。

かなりの気合いを入れている妹に対して、姉であるギンガは反面、至って普段通りであった。

確かに最低限だったスバルの魔導師としての力もこの二週間で劇的に上がった。

だが、たった二週間なのだ。

それぐらいで自分が今まで築いてきた努力と言う名の塵の山を崩せはしないとギンガは思っていた。

しかし、その考えは脆くも崩れさる事になる。

ギンガは知らなかったのだ。

スバルが黙って持ち去ったリボルバーナックル。

その代わりに使っているデバイスが、一体どう言った物であるかを。

「制限時間は１０分間。ルールはＤＳＡＡ公式ルールに則りましょうか。あっ、ダメージカウンターのアプリ持ってる？　無かったら転送するから」

「えっと……持ってないや。ポート解放……障壁（ウォール）の一部を下ろしてっと……うん、受信準備完了だよギン姉」

今更ながら言わなくてもいいような気もするが、スバルとギンガの二人は戦闘機人である。

そのような存在である彼女達の中にもデバイスと同様に記憶媒体が

あり、そこにデバイス用のアプリケーションを入れても使用出来るという裏技が存在した。

本来なら記憶媒体は様々な情報や予備の魔法術式を記録しておく為の物であるが、アングラの掲示板でＪ．Ｓなる者が報告したこの裏技によって、数少ない戦闘機人達の数少ない楽しみが増えた事は言うまでもない。

「ＯＫ、転送準備完了。じゃあスバル、転送するから手を合わせて」

「お肌の触れ合い回線ですね。わかります」

「何……それ？」

「ガ〇ダム」

「……転送終了。手、離すね」

スバルの言っている言葉の意味を理解できなかったギンガは、そそくさと合わしている手を離した。

家出から帰ってきた妹の事が、少し分からなくなったギンガであった。

それはさておき、

諸々の準備を終えた二人は適当に距離を取り、そして構える。

起動させたダメージカウンターが自分と相手のライフポイントを視界に表示させ、次いで開始のカウントを取り始めた。

「さーて、行っくぞー。ギン姉、覚悟はいい？」

参……

「それはこちらの台詞。格の違いって奴を見せて上げるわ」

弐……

「「じゃあ、いざ尋常に……」」

壱……

「「勝負！！」」

零！！

轟音。

一拍置いて、また轟音。

激突しあう蒼と青の軌跡は次第に舞台を上空へと移していく。

少しだけ色の違うウイングロードを展開しあい、複雑な軌道で擦れ違い様に攻防を繰り返すこと十数合。

スバルにとって空戦という物は殆ど初めてであったが、随分と様になっているようであった。

「そうよスバル！　シールドで受け止め、バリアで弾く。その見極めをしっかりと！　受け止めるべき物を弾いたり、弾くべき物を受け止めたら大きな隙になるわ。一瞬の判断ミスは格闘魔導師には致命的よ……そこっ！！」

「がっ！　くっ、そぉぉおおお！！」

今現在、戦闘を操ってるのはギンガだ。

一部隊のストライカーを張れる程に積み重ねた努力は伊達ではなく、非常に巧いのである。

スバルの放つ打撃の性質……牽制、騙し、本命を確実に見極め、それに合った防御法を実践している。

それは、自分の防御魔法ではスバルのデバイスの前では無意味と瞬時に把握した上で、往なしや躱しと言った体術を駆使したものであった。

だが、スバルも負けてはいない。

常に前向き思考である彼女は、「何故」と考える前に「何としても」と考える性分(たち)だ。

避けられるのなら避けれない様に速く、往なされるのなら往なされない様に鋭く、受け止められるのなら打ち破れる様に強く、弾かれるなら……こっちから弾き飛ばすッ！！

そう思い立ったが吉日と言わんばかりに、感覚でその方法を編み出し、そして実行した。

「うぉおおぉぉ、りゃぁあぁぁーー！！」

「大振りな攻撃……なら、反らせばいいわ。タイミングを合わせて……ここッ！！」

通常であるならギンガの判断は正しい。

強力だが大振りな攻撃は外したら致命的な隙になり、自身に返る諸刃の剣である。

この場に及んで、まだそんな基本を理解していないスバルに渇を入

れるべくギンガは攻撃のタイミングを完璧に読み取り、掴んで流そうと考えたのだ。

だが、それは今この場においては誤りであった。

「どぉぉッせぇぇッいぃぃッーーー！！」

「えっ！？　がぁっ！！」

スバルの拳に触れた瞬間、思わぬ衝撃でギンガは空中へと投げ出された。

陸上生物ではあまり味わう事のない浮遊感に、一瞬肝を冷やしたギンガだったがすぐさま体勢を立て直し、足下にウイングロードを展開させて地上スレスレで踏み留まる。

自分の予想を超えた一撃に面喰らってしまったが、ギンガは冷静に今の攻防を分析した。

「（反らせなかった……いや、反らす前に弾き飛ばされた）……っ、衝撃制御（インパクトコントロール）。スバル、何時の間にそんな高等技法を……っと！！」

「ちぇっ……やっぱ射撃は苦手だなぁ。でも、もう一発ぅ！！」

地上付近にいるギンガに向けて、高速で飛来する青色の魔力弾。

その正体はスバルオリジナルの射撃魔法「シリンダーショット」である。

この魔法は誘導性を犠牲にする事で一発一発の威力を高めた高火力直射魔法に分類され、術者の周りを回転している魔力スフィアを術者自身の打撃によって、文字通りに打ち出すと言う極めて単純な魔法だ。

だが、その単純な魔法も打撃に特化したスバルが扱えば立派な脅威となっていた。

「ちょっ、速っ！？　スバル……なんて馬鹿力で打ち出してるのよ」

「むっ……ギン姉、バカって言う方がバカなんだよっ！！　この、バカァァァーーー！！」

そう言って、次々に魔力弾を連発してくるスバルにギンガは蛇行するような軌道でそれを避けつつ、内心でほくそ笑んだ。

確かに速度は速いが誘導性皆無の直射弾など、弾道を見極められれば回避は十分に可能な範囲である。

さらに、スバルが向きになればなる程、狙いが甘くなって当たる物も当たらなくなるだろう。

その為、ギンガはさらにスバルを挑発した。

「じゃあ、やっぱりスバルの方がバカじゃない。私は今ので二回目。アナタはさっきので三回言ってるわよ」

「ムッキィィーーー！！　もう怒ったんだからねッ！　これでもォォ、食らえェェィ！！」

スバルは連射を止めると、残りの魔力スフィアを強引に一纏めにして巨大な魔力弾を作り出した。

感覚で術式を組むスバルに、どちらかというと理論派のギンガは驚きを禁じ得ないが、その選択は今においては失策である。

確かに威力は先程よりも上がっているだろうが、脅威であった弾速が格段に落ちるのは明白だ。

さらに魔力弾のサイズが大きいので視界の妨げになり、それを放った頃にはスバルはギンガを見失っていた。

「っ！？　ギン姉、何処に行っ……」

「ここよ」

「えっ？　あぐっ！？　し、下からだとぅ！？　ぐっ、がぁぁぁ」

ギンガが攻撃を仕掛けたのは足下。

つまりはスバルの立つウイングロードの裏側からの奇襲であった。

そこは空戦に慣れないスバルにとっては完全な意識の範囲外、まさに死角だったのである。

自身が空中にいる場合、攻撃を警戒しなければならない方向は前後左右上下の３６０。全てに置いてだ。

陸地という最大の壁が存在する陸戦とそんな物が存在しない空戦での最も大きな違いは、これが一番である言えるだろう。

足下からの奇襲とさらなる追撃によって陸に叩き落とされたスバルはいつもの方法で着地し、今は上空にいるギンガをギッと睨み付けた。

その構図はギンガの奇襲が成功するまでと酷く対照的であり、それがさらにスバルを苛立たせる。

「ぐぅぅ、ギン姉ぇぇ」

「思慮浅薄、油断大敵ね。空戦は全方位警戒だって以前教えたでしょうに。フープバインド発動。さて、感じるな考えろってのは誰の言葉だったかな」

「バインドッ！？　でも、これだけで私を押さえるのは……」

「でしょうね……だから」

「えっ、何を？」

そう言うとギンガは一気にスバルへと詰め寄り、胸の辺りを軽く小突いた。

姉が何をしたいのか分からないスバルは怪訝な顔をするが、ギンガはそのまま上空へと駆け昇っていく。

ギンガの異名、「蒼き流星」の元となった必殺技……シューティングスター・ストライクである。

「くくっ、詰めを誤ったねギン姉。多重じゃないなら……私なら力尽くでバインドを破壊して逃げれる。そして、ギン姉のそれは、当てるのに、他の誰かの協力が、必要不可欠だよッ！！」

思い切り全身に力を込め、ギンガのバインドを引き千切って破壊したスバルは、すぐさま逃げようとしてその顔を驚愕に歪める事になった。

自身の体がまるで石になったかのように、思う様に動かないのである。

「か、体が……動かない。な、何でぇッ！？」

「バカねスバル。この私がそんな弱点を放っておくわけ無いでしょ。うん、天馬さんに浸透勁を教わっておいて本当によかったわ……必殺ッ！！　シューティングスター・ストライクッ！！」

急上昇、天地反転、急降下。

落下の勢いそのままに、正しく流星と化したギンガはスバルに突撃を敢行する。

それは以前の焼き直し。

黄金の負けパターン。

体が動かなければどうしようもなく、決まれば負ける絶望的な状況。

だが……スバルは逆に落ち着いていた。

「そうだよ……ギン姉の言う通り、私の方がバカじゃん。ギン姉だって自分の弱点見つけて、ちゃんと向き合って、何とかしようと頑張ってるのに。なのに、私が欠点克服の為に覚えた魔法は最低限な物で、後は考えず思ったままに本能で戦って……バカだバカだ、私は大バカだ。でも……そのバカを極めるッ！！　ウォォオオオオオオッーーーー！！！！」

「なっ、浸透勁を外した！？　でも、もう遅い。喰らいなさい！！」

「輝け、私の拳ッ！！　もっと輝けェェッーーー！！」

――――　ｓ．ＣＲＹ．ｅｄ　――――

交錯する一瞬、ギンガはそんな声が聞こえたような気がした。

閃光、然る後に轟く爆音。

「ぐぅ……はっ、スバル！？」

一切合切何も見えなくなるような青白い光が収まると、ギンガは弾き出される様にして地面に尻餅を付いた。

そして、状況を認識するとすぐさま構えを取り、スバルの襲撃を警戒する。

二人が全力でぶつかり合った為であろうか、激しい土煙が辺りを覆っており、ギンガはスバルの姿を確認する事が出来ない。

辺りを警戒してしばらく待っていると、空気が落ち着いてきたのか土煙が晴れ渡ってきた。

ギンガの少し前方に薄っすらとシルエットが浮かび、最大の警戒を向けるがどうやら動く気配は無いようである。

「スバル……？」

土煙はどんどん晴れていき、シルエットは遂に完全にその正体を現した。

「スバル。大丈夫……なっ！？」

案の定、そのシルエットはスバルであった。

だが、その姿を見たギンガは大きく目を見開いて驚愕を顕にする。

拳を前に突き出したまま、直立で気絶しているスバルの、その腕のデバイスがあり得ない程に変貌を遂げていた。

一廻り大きくなったその腕は、以前は一つであったジェットスラスターがもう一つ追加されており、見様に寄っては何らかの動物の頭部を思わせる感じだ。

上腕、そしてショルダーアーマーはより先鋭化され、背中からは腕に付いているようなジェットスラスターが数本が飛び出している。

スバル元来のバリアジャケットは、下部はそのままであったが上部が侵食されるように胸部アーマーと青いボディスーツへと変化しており、それは臍の辺りで途切れるように消えていた。

さらに驚くべきは……右腕だけにあったスバルのデバイスが左腕にも少し侵食していた事であろう。

どうも作りかけの印象を受ける左腕の変化にギンガは戦々恐々とし

た。

もし、これが完全であったなら……自分は負けていたのではないだろうか？

そう思わせてならないのである。

「一体、何なの？　このデバイス……」

ギンガは取り敢えず気絶したスバルを地面に寝かせて、その異形の腕をマジマジと眺める。

スバルが何故持ち去った母の形見を使っていないのか？

その内容をギンガは未だ詳しくは聞いていない。

ただ、リボルバーナックルを使わないのは、そのピーキー過ぎる性能故にスバル自身が使い熟せていないからだとギンガは思っていた。

その為の代替品として、このデバイスを使用しているのだと考えていたのだが、それにかけてもこれは異常過ぎる。

魔導師本人と一体化し、障壁破壊魔法を常時展開させ、形態変化（フォームチェンジ）などではあり得ないような変貌を遂げる。

そんな怪しい物を自分の妹が使用している事が……いや、そのようなデバイスが存在している事自体がギンガには不安で堪らなかった。

「う……ん、ギン……姉？」

「スバル！　起きたのね。体、大丈夫？」

目覚める直前、何事もなかったかの様にスバルのデバイスは元の姿に戻った。

今は待機状態へと移行したのか、地面に横たわるスバルの手の甲に煌く青い宝石と化している。

「ふぇ？　あっ、そっか……また負けちゃったんだね、私」

「スバル……覚えてないの？」

「ん、何を？」

「……ううん、何でもないわ」

上半身を起こして不思議がっているスバルをよそ目にギンガは何も無いのだと繰り返し説いた。

その後、お腹空いたと宣ったスバルにギンガは思わず吹き出し、まあ今のところはデバイスの事は置いておこうとスバルの右手に手を伸ばす。

「あっ、そうだ。今度さぁ、ティア達と旅行行くんだけど……お土産何がいい？」

「何でもいいわよ。食べる物ならね」

「えぇー、そんなのお金が幾らあっても足りないよー」

「「……ぷっ、あはははは、あはははは……」」

ギンガの手を支えにし、しっかりと地面に立ち上がったスバルは、そんな事を口にしたギンガと共に笑い声を上げた。

そんな平和な一幕。

願わくば、こんな日々がずっと続きますようにと祈わずにはいられないギンガであった。

閑話1　スバルの訓練風景（後書き）

まずは閑話の一つ目、スバルの訓練風景でした。

いや、訓練風景って言っときながら、結局やってるのは模擬戦と伏線張りなんですけどね……

次回は温泉の話です……お楽しみに！！

閑話２　温泉旅行　ｉｎ　日本　南紀白浜編（前書き）

大変長らくお待たせしました。

それでは閑話の２　温泉旅行編スタートです。

閑話2　温泉旅行　ｉｎ　日本　南紀白浜編

季節は冬真っ盛り。

とある聖人の誕生日も越え、年の瀬も近くなったある日の事。

ティアナ、スピアーノ、スバルの三本足（トライクロウ）の面々は第９７管理外世界の極東の島国……まあ、ぶっちゃけて言うと日本にいた。

来日の目的は以前から言っているように、温泉にゆっくりと浸かり、美味しい物をたらふく食べ、各地を観光しようと言う所謂、慰安旅行だ。

年末と言う事もあり、三泊五日の日程で組まれたスケジュールにはスピアーノが嬉々として調べ、練り、凝縮された予定がびっしりと書き込まれていた。

その名も「天下分け目の温泉旅行　ｉｎ　日本　～聖地巡礼の旅～」である。

あの堅物で知られるレジアス・ゲイズ中将に直接おねだりすると言う、普段のティアナからは全く想像できないような方法で渡航許可をもぎ取った一行は定期航行船の中で一夜を過ごし、転送魔法でまずはかつての紀伊国……現在で言う所の和歌山県西牟婁郡白浜町へと降り立った。

そう、聖地巡礼の旅とはティアナやスピアーノといった前世の記憶を持つ者の縁のある地を訪れようと言う企画なのである。

尤も到着した時には既に夕刻であった為、観光は翌日に回し、予約していた旅館へと向かったのではあるが……

「はい！　てな訳で、まずは日本三古湯の一つ、南紀白浜温泉です。実に千四百年以上も歴史のある温泉なんですよ」

「せ、千四百年！？　ふぇぇ、日本って凄いんだね」

「白浜温泉？　ん、あれ？　ここって牟婁の湯じゃなかったっけ？　雑賀孫市（わたし）が前来た時にはそんな名前だったような気がするんだけど」

「それは昔の話ですね。今は白浜温泉って言うんです。取りあえず夕食はお風呂に入ってる間に用意してくれるみたいですし、早速行きますか？」

案内された部屋でスピアーノによる温泉の説明を受けたスバルはその歴史の雄大さに驚きつつ、お茶請けとして用意されていたお菓子をむしゃむしゃと平らげていた。

また、ティアナはかつての自分がここに来た時と温泉の名前が違った事に違和感を覚えたが、事前に調べていたスピアーノのお陰で疑問も氷解し、ちょっと渋めに煎れたお茶を一口飲む。

そんな二人の様子を見つつ、一頻りの説明を終えたスピアーノは早速温泉に行こうと二人を誘った。

「いいわね。スバル、浴衣の着方教えてあげるからこっち来なさい」

ティアナは部屋に備え付けてあるクローゼットを開けて浴衣を取り出し、テキパキと風呂準備を整える。

浴衣という物を初めて見たスバルは物珍しそうにその構造を確認した。

「浴衣ってこれ？　これ、服なの？」

「そうよ。日本の伝統的な民族衣装ね。着方は私のを見て真似したらいいわ。まずは服と下着を全部脱いで」

「全部脱いで！」

そう言って、ティアナは静かに、スバルは元気良く服と下着を全て脱ぎ捨て、一糸纏わぬ生まれたまんまの姿になった。

その行動は余りに突然に、余りにも堂々とし過ぎていて、扇情的と言うよりも衝撃的と言った感じだ。

いつもなら、そう言うハプニングには敏感に反応しそうなスピアーノも、驚きの余り半ば状況を理解できずポカンとしていた程である。

そんな空気を塵ほどにも気にせず、ティアナはスバルを着付けて行った。

「次に浴衣を羽織って……」

「羽織って！」

「帯を締めて……」

「締めて！」

「ハイお終い」

「お終い！！」

ティアナ・ランスターの浴衣着付け教室……終了。

その時間、僅か一分半である。

「……いやいやいや、ちょっと待って下さい！」

「何よ、スピアーノ。私の着付けに何か問題でもあるっての？」

「ありますよ！　何で浴衣の下、真っ裸なんですか！？　普通は下着穿きますって！」

「……そうなの？　何だ、それならそうと早く言いなさいよ。お陰で恥を掻いちゃったじゃない」

何か言いがかりも甚だしく感じるが、ここで言う恥とは肌を晒したことではなく、単に間違えた事であろう。

それに、今ここで忠告を受けておいて正解だったかもしれない。

何せ浴衣とは布一枚である。

その下が裸では、唯でさえ帯で締め付けてる分、ボディラインが出易い上に色々な部分が擦れて痛いのだ。

それに浴衣だけでなく和装という物は非常に転け易いという事も忘れてはならない。

前世で慣れているティアナ達ならまだしも、初心者のスバルでは裾を踏んづけて転けてしまう可能性が非常に高いのである。

人前で派手に素っ転んで痴女認定されてしまうのを防ぐ為、ティアナ達は普通の服に着替える事にした。

「しかし、ティアって胸大きいよねぇ。訓練のお陰か色んな所が凄く引き締まってるし。特にウェストの括れなんて……もう溜まりませんなぁ」

「そう言うアンタは私のより大きいじゃない。あと、その手つきを止めろ。それ以上近づいたら鉛玉をぶち込むぞ」

「ぶち込むだなんて……ティアのエッチ」

「何……このガールズトーク。あと、胸の話は未だにスポーツブラで済ませられる私に対する当てつけですか。当てつけですね。よーし、分かった表に出ろ。その胸、嫌と言う程に揉み拉いてくれる」

女三人寄れば姦しいとはよく言ったもの。

その後、この旅館自慢の大浴場へと向かった三人は部屋から出ても、暖簾を潜り更衣室に入っても同様に姦しく、非常に騒がしかった。

幸いな事に今の所は他に人は無く、ほぼ貸し切り状態であったのが救いだったのだろう。

で、なければ確実に追い出されている。

「しかし……よっくもまあ、そんな熱い湯に入れますね。私はこっちので十分ですよ」

「一応、念の為に言っとくけど……そこ、子供用のお風呂だからね。水深浅いし温度も低い。アンタ、無駄に背がデカいからほとんど半身浴みたいになってるじゃない」

「いいじゃないですか半身浴。健康にも美容にも。あと、無駄に背がデカいは余計です」

「まっ、アンタがいいならそれでいいわ。はぁ～気持ちいい。疲れ

が湯の中に溶け出す様だわ」

更衣室にデカデカと掲げられた入浴指南書に従い、掛け湯と体の洗浄を終えた三人は思い思いの風呂に浸かりつつ、日頃の疲れを癒す。

そんな中、ティアナは数ある湯船の中でも最も温度の高い物に入っていた。

その滴る湯を玉弾く肌としっとりと濡れた艶のある太陽色の髪、そして仄かに火照る紅顔は普段の彼女とはまた一味違い、ひどく艶やかである。

「こんな広いお風呂初めてー！　すーいすーい、と。ティア、ほら泳げるよー！！」

一方、スバルはと言うとこの様な広々としたお風呂に入るのは初めてなのか偉くはしゃいでいた。

だが、お風呂で泳ぐのはマナー違反。

よい子も悪い子も普通の子も真似しないように。

「スーバールー。お風呂で泳いじゃ駄目よー。マナー違反でしょー」

「ティアナさんティアナさん。タオルを湯に浸けるのもマナー違反なんですよ。さあ、そんな煩わしい物は早く取ってもう一度全てを

さらけ出して下さい」

「こうしてタオルを巻いとかないと胸を揉みにやって来る不届きなからすがいるのよね。言わば自衛よ、自衛」

「何と！　けしからんおっぱ……いや、けしからん奴もいたもんですね。見つけたらとっ捕まえてやりましょう」

「……露天風呂の方に行くわ。スバル、外の風呂に行きましょう。スピアーノは置いといて」

「外のお風呂！？　行くー！」

「ちょっ、冗談ですって！　待って下さいよ」

女三人寄れば以下省略……

と言う訳で、舞台は露天風呂の方に移る。

中より少し熱めの湯にスピアーノが難色を示したが、流石に外気の寒さに耐えかねたのか恐る恐ると言った感じで入浴した。

長湯で火照った顔に吹く夜風が何とも心地良く、爽やかな清涼感が体を突き抜けていく。

周りは海なのか潮の良い香りが辺りを漂い、季節が冬と言う事もあって空気が澄んで星空がよく見えた。

「あれがベテルギウス。その下がシリウス。その左にプロキオン……」

スバルが指さす冬の大三角。

釣られて空を見る。

「……何ですか、急に？」

「いやー私の声を担当している声優さん的に言っとかなきゃなー、と思って」

「声優！？　私達、アニメのキャラだったんですか！？　私の声の担当は一体誰なんです！？」

「さぁね……少なくとも私の担当は中〇麻衣で確定よ。て言うかそんなアホな事言ってないでそろそろ出ましょう。お腹空いてきたし」

「さんせー」

言って、そそくさと出ていくティアナとスバル。

後に残ったのは呆けているスピアーノだけだ。

「あっ、ちょっと待って下さい！　私の声は誰なんですか！？　ええい、こうなったら募集します。宛先は感想まで！」

メタ発言乙。

温泉から上がった三人を部屋で待ちかまえていたのは豪華な料理だった。

海の幸、山の幸がふんだんに使われた一品の数々はその一つ一つが芸術品として成り立っている様であり。

それらの中央に座するはこの地でとれた白身の王クエを用いた冬の鍋の頂点、「クエ鍋」である。

滅多に食べれない天然物だけあって、その神々しさ足るや筆舌に尽くし難い。

「「お、おぉ〜〜〜！！」」

「おぉ、クエね。食べるの久しぶりだなぁ。熱燗でキュッと一杯いきたいところだけど未成年だし我慢するしかないか……」

早速と言わんばかりに卓を囲み、すかさず箸を伸ばそうとするスバルを牽制しつつティアナは乾杯の音頭を取った。

手に持つのは勿論、アルコールではなくソフトドリンクである。

「はい、てな訳で……今日までお疲れ様&明日からも頑張りましょうと言う事で乾杯したいと思います。特に来年からはもっともっと忙しくなるかと思います。でも、今は十分に楽しんで英気を養いましょう。では……乾杯！！」

「「かんぱ～い！！」」

こうして宴が始まった。

普段から家事担当のスピアーノは料理と共に置いてあった指南書に従って、まずは水の張った鍋に昆布を入れ、火を掛けた。

その間に一品物を食しながら、沸騰する直前に昆布を取り出し、クエの身を入れていく。

適度にサシの入った身が出汁の中で踊り、その身を白く染めていく様は何とも感慨深い。

次に野菜を煮えにくい順に入れていき、最後に鍋蓋をし、数分間煮たせた。

そして細心の注意を払い、最善のタイミングを見計らってＧＯサインを出す。

「総員戦闘準備！！　……今ですッ！！」

蓋を解き放つと、揺蕩う湯気の向こうに桃源郷が見えた気がした。

ぷりっぷりとした身を野菜と共にすくい上げ、さっと特製ポン酢に潜らせて……食す。

「「「はむっ……はふ、はふ、はふ……っ！！！」」」

一口食べたその瞬間、三人の目がカッと見開かられた。

そして、その衝撃は光となって口の中から迸る。

「「こっ、これは……うーーまーーいーーぞぉーーー！！！」」

「うん、美味しい美味しい。でもこれに熱燗があればもっと良かったのになぁ」

若干、一名のリアクションが何か違うが、それでも三人は我先にと次々に鍋を掻き込んでいく。

しっかりと歯堪えのある肉厚の身は、淡泊ながらも濃厚な味わいで、一噛みする度にそれが口一杯に広がった。

程良く酸味の利いたポン酢にはかなりの脂が浮いているが、それで

も全然くどく無く、むしろこれが丁度良く感じるくらいだ。

そのポン酢も使用されている柑橘類はよくある柚子や酢橘などではなく、世界でもここ和歌山のとある村でのみしか栽培されていないと言う幻の柑橘、「邪払（じゃばら）」である。

これがまたクエと良く合い、互いが互いの持ち味を引き出し合っているようだ。

一心不乱に食べる三人は終始無言で、そこそこ量もあったと言うのに何時の間にやら残り少なく、最後のシメに突入した。

「雑炊って言いましてね。こうやって鍋をやった後の魚介や野菜の旨味が存分に滲み出た出汁にご飯を入れて煮たせて、ある程度煮立ったら溶き卵を廻し入れるんです。良い感じに半熟になったら火を止めて、薬味と海苔を散らせて完成！　っと。はいティアナさん、スバルさん」

「いただきまーす……うまーい！！」

「以前はいつも栄養ブロックか戦闘糧食（レーション）だったけど、こう言う皆でつつく鍋も悪くないわね。あの小早川の気持ちが今なら分かる気がするわ」

ガツガツと雑炊を平らげる三人によってあっと言う間に鍋は空っぽになり、幸せいっぱいの鍋時間は終了した。

「はあー、流石に満腹。それで、これからどうする？　また温泉行く？」

「いえ、明日の朝に入りましょう。明日は結構あっちこっち移動しますし、少し早いですがもう布団を敷いて寝ましょうか。ちょっと待って下さいね」

スピアーノはそう言うと内線でフロントを呼び出し、就寝の準備を頼んだ。

仲居さん達が布団を出してくれている間に三人はお土産を見に行き、ここでしか売ってない様な名菓やら南高梅やらを購入する。

そして半時間程散策した後、綺麗に布団が敷かれた部屋に戻った。

そして……

「はい、じゃあ明日の予定を発表します。まず、朝起きて温泉。ここで朝食を取ってから、早いですが八時半にチェックアウト。後は転移魔法を駆使して雑賀孫市ゆかりの地を巡ります。まずは八咫烏を奉っている熊野神社へお参りに。それから雑賀荘跡や鈴木屋敷、雑賀崎とかですね。その後、京都に向かい諸々の史跡を見物。最後に三条河原を背景に記念撮影と……こんな感じです」

「最後のだけ却下よ。何でわざわざ五右衛門（アンタ）が処刑された場所で写真撮らなきゃならないの。なんか写ったらどうすんのよ」

「大丈夫ですって。少なくとも私は写らないですよ。他の方は知り

ませんけどね」

「余計悪いわ！！　あーもう、寝る前に嫌な気分になっちゃったじゃない。どうしてくれるの！！」

「そうですね……じゃあ、気分を紛らわせるために『ＴＨＥ　猥談』と洒落込みますか？」

「はっ？」

「ねー、猥談って何？」

ここに来て、ようやく旅行の夜のメインイベントが始まった。

しかし、どうやらスバルは猥談自体の意味が分かってないようである。

スピアーノはそんなスバルに対して軽く説明した。

「まあ、ぶっちゃけると『あなたの好きな人だーれ？』ってな事をきゃぴきゃぴ、うふふ……と話し合う事です」

ぶっちゃけ過ぎである。

あと、そんな説明ではスバルの答えは決まった様な物であった。

「へぇー、じゃあ、私はティアだね。うん、それ以外にあり得ない。だってティア、優しいもん……」

「ひゅ〜、言いますねスバルさん。かく言う私も現状ではティアナさんですね。正直、生まれる前から愛してました」

スバルとスピアーノの心の籠もった告白攻撃に対し、ティアナは……

「……くだらない。さっさと寝るわよ。お休み」

冷ややかな視線と言うカウンターを繰り出した。

「……お休み」

「……お休みなさい」

電気を消して真っ暗になった部屋で、しばしの間体育座りで黄昏る二人を余所にティアナは眠りにつく。

そしてその意識が落ちる直前に、ふとある事を思い出した。

（そういや、二人ほどいたな。この私が……意識した男は……）

――――惚れた……アンタに惚れちまったよ！　何処までも何処までも……アンタを守る！――――

――――孫市……ワシはこの夢を最後まで貫く。だから孫市、お前もワシと共に……――――

（くだらない。くだらな……くは……ないか……すぅ、すぅ……）

こうして、旅の最初の夜は更けていった。

閑話2　温泉旅行　ｉｎ　日本　南紀白浜編（後書き）

旅行編、まだまだ続きます。

あと、スピアーノの声優さんについてですが、こんな声が合うじゃないかな程度で教えて貰らえたらおｋです。

一応、必須ではありません。

あまり詳しくない人は気にしなくても結構です。

名前が出てきた声優さんの声を聞いてみて、作者が適当に決めたいと思いますのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2926w/

凡人に誇り高き烏が入りました

2011年12月17日02時27分発行